

はじめに

滋賀県平和祈念館は、平成 24 年 3 月に「語りつぐ 平和へのねがい」を指針として開館し、その後、県民のみなさまのご支援により順調に活動をひろげ、すでに 12 年が経過しました。

当館の展示室は、基本展示と企画展示によって構成しておりますが、企画展示は開館以来、年間 2～3 回程度の展示替えを行い、令和 5 年度末までに計 34 回の企画展示を開催してきました。しかしながら、当館では企画展示図録の刊行を行っていないため、これらの企画展示の内容について、会期終了後に改めて県民のみなさまにご覧いただけるような刊行物としては、毎年刊行している年報で展示内容のごく一部を知っていただく程度にとどまっておりました。

このため、当館では企画展示終了後に、展示で使用したパネルやモノ資料の写真等を掲載した展示報告書を年度ごとに取りまとめて編集・発行する取り組みを昨年度から開始いたしました。今回刊行する『令和 4 年度企画展示実施報告書』は、その 2 冊目であり、令和 4 年度に開催した第 31 回企画展示「戦死者 8,843 名 フィリピンの戦場Ⅱ—レイテ島・ミンダナオ島などの島々—」、第 32 回企画展示「戦争と女学生—戦時下の学校生活と進路—」の 2 つの企画展示の内容を取りまとめたものです。

県民のみなさまが戦争の悲惨さや尊さを学び、理解を深めるために当報告書を役立てていただければ幸いです。

令和 6 年（2024 年）3 月

滋賀県平和祈念館

館長 朝倉敏夫

例 言

- 1 本書は、滋賀県平和祈念館が令和4年度に開催した第31回・第32回企画展示の内容を取りまとめた報告書である。
- 2 本書に掲載した企画展示の会期等は、下記のとおりである。
 - ・第31回企画展示「戦死者 8,843 名 フィリピンの戦場Ⅱ
―レイテ島・ミンダナオ島などの島々―」
会期：令和4年6月18日～12月18日
 - ・第32回企画展示「戦争と女学生―戦時下の学校生活と進路―」
会期：令和5年1月5日～6月25日
- 3 本書は、企画展示で使用したパネル等の内容に基づいているが、誤字・脱字などの修正を行ったほか、内容を一部省略したものがある。
- 4 各企画展示の開催および本書の作成にあたっては、多くの資料提供者と関係機関に御協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

目 次

はじめに

例 言

第31回企画展示「戦死者 8,843 名 フィリピンの戦場Ⅱ ―レイテ島・ミンダナオ島などの島々―」	1
第32回企画展示「戦争と女学生―戦時下の学校生活と進路―」	45

滋賀県平和祈念館 第31回企画展示

戦死者 8,843 名 フィリピンの戦場Ⅱ ーレイテ島・ミンダナオ島などの島々ー

(会期：令和4年6月18日～12月18日)



上：戦場となったレイテ島オルモック東方の山々

下：レイテ島で全滅した歩兵第9連隊第3大隊第10中隊の行進（ネグロス島にて）

ごあいさつ

昭和16年（1941年）12月8日、外交交渉に行き詰った日本はハワイの真珠湾と英領マレーの攻撃に踏み切り、当時の日本が大東亜戦争と呼んだアジア・太平洋戦争が始まりました。この戦争は日本の壊滅的な敗戦に終わり、日本全体で兵士や民間人など合わせて約300万人が犠牲となりました。

日米両国にとって重要拠点であったフィリピンは、開戦当日から終戦まで戦火が収まることはありませんでした。フィリピンへ送られた日本軍兵士・軍関係者を待ち受けていた現実には、侵攻作戦や制圧地域でのアメリカ軍やフィリピン人民兵との激しい戦闘、圧倒的な兵力で島々に再上陸してきたアメリカ軍からの攻撃、そして密林での飢餓や感染症でした。この地での日本軍兵士・軍関係者の戦死者は約518,000人に及び、滋賀県民の戦死者も8,843名おられます。これは、昭和6年の満州事変からアジア・太平洋戦争の終戦までの15年間における本県戦死者32,715名の3割近くに達します。最も多くの滋賀県出身者が犠牲となった戦場、それがフィリピンです。

滋賀県平和祈念館では、第29回企画展示「戦死者8,843名 フィリピンの戦場Ⅰールソン島編ー」を昨年開催したところですが、今回は、その続編としてレイテ島やミンダナオ島など、ルソン島以外の島々を取り上げ、関係者の体験談やモノ資料などで、人びとが体験した戦争の記憶を紹介します。

最後になりましたが、今回の企画展示におきましては、一般財団法人滋賀県遺族会、厚生労働省、東北大学理学部地理学教室より多大なご協力をいただきましたこと、深くお礼申し上げます。

令和4年6月18日

滋賀県平和祈念館

第1章 フィリピン 戦死者

1パーセントのプロフィール

8,843人。この数字は戦争中にフィリピンで亡くなった滋賀県出身の兵士や軍関係者の人数です。県内の小学6年生の児童数は13,710人（令和3年5月現在）ですので、滋賀県ではフィリピンでの約4年間の戦争だけで、6年生児童の約65パーセントの人たちが亡くなったこととなります。また、これは戦争による県民死者数のほんの一部なのです。兵士や軍関係者に限っても、中国大陸やビルマ、太平洋の島々、沖縄、そして県内など戦争全体で32,715人が亡くなっています。

滋賀県平和祈念館では平成5年（1993年）から、戦死者の情報を含めて、県民の戦争証言を記録する活動（戦争体験の聞き取り調査）や戦争に関する資料寄贈の受入れを行っており、現在まで約2,300名（組織を含む）の方々に提供・協力をいただい

ています。こうした調査のなかで、ご家族や親族、親しい友人から提供いただいたフィリピンでの県民戦死者の情報は約100名です。これは、この地での戦死者のわずか約1%に過ぎません。でも、当館に寄せられた彼らの記録・記憶は、亡くなられた方々が厚生労働省の「軍死亡者関係資料」や戦友会の「戦没者名簿」などに記される一人の『兵士』である以前に、かつて滋賀県で暮らしたやさしい息子であり、兄弟想いの兄や弟であり、妻や子どもを愛した一人の『人間』であったことを教えてください。家族や郷里を愛した普通の人たちがたくさん、戦争で亡くなられたのです。

当館に寄せられた情報をもとに、そうした1%の人たちのプロフィールをご紹介します。

第1節 戦死者が語るフィリピンの戦争経過

パナー：戦場となったフィリピンの島々



攻撃を受けて炎上する市街地（セブ島）



戦場となった街で消火活動をする人たち（ネグロス島）



戦場となった街の黒煙（セブ島）



戦場に遺棄された自動車の残骸（ミンダナオ島）

草野 文子さん（長浜市）の伯父 草野 唱二さん（24歳）

死亡年月日 昭和17年(1942年)1月3日

死亡場所 ルソン島バンバムガ州ボラック南側

入営後の草野唱二さんから家族のもとへ、農業期の忙しさを気づかう手紙が送られてきました。



草野 唱二さん
[草野 文子さん 提供]

井上 比奈子さん（栗東市）の父 井上 軍治さん

死亡年月日 昭和17年(1942年)1月30日

死亡場所 ルソン島バターン半島

井上軍治さんは、昭和5年（1930年）に現役兵として陸軍に入隊されました。最初は中国大陸に派遣されていましたが、その後フィリピンに派遣され、昭和17年（1942年）にルソン島バターン半島カボット方面での戦いで戦死されました。所属は、垣第6554部隊でした。

澤地 洋子さん（東近江市）のおじ 澤地源一さん

死亡年月日 昭和17年(1942年)2月10日

死亡場所 ルソン島デルピアン第75兵站病院



澤地源一さんの
村で生まれた額文
[澤地 洋子さん 提供]

昭和16年（1941年）に召集を受けて、第16師団の工兵第16連隊に配属されました。昭和17年（1942年）2月5日、ルソン島バターン半島のサトマ山北東部での戦闘で負傷し、5日後に運ばれた野戦病院で亡くなりました。

吉坂 ちゑさんの兄 吉坂 英太郎さん（31歳ころ）

死亡年月日 昭和17年(1942年)4月7日

死亡場所 ルソン島サンピセンテ川右岸



吉坂 英太郎さん（演習地にて）
[吉坂 ちゑさん 提供]

吉坂英太郎さんは、雨の日には長靴をもって、妹のちゑさんを迎えに来てくれる、面倒見の良いお兄さんだったそうです。

昭和15年（1940年）、甲南駅から故郷の人たちに見送られて出征されました。

大村 柁一さん（長浜市）の兄 大村 権治良さん（22歳）

死亡年月日 昭和17年(1942年)7月14日

死亡場所 レイテ島タクロパン



大村 権治良さん（戦死直前に撮影）
[大村 柁一さん 提供]

大村権治良さんは、昭和15年（1940年）11月に召集されました。

辻 與惣次郎さん（大津市）の弟 （氏名不明）（21歳ころ）

死亡年月日 昭和17年(1942年)12月8日

死亡場所 マスバテ島

水原千代さん（近江八幡市）の夫 水原五郎作さん（26歳）

死亡年月日 昭和17年(1942年)12月25日

死亡場所 ミンダナオ島スリガオ南方20km



水原 五郎作さん
[水原 千代さん 提供]

水原五郎作さんは農業を営むかたわら、沙沙貴神社の楽師として、祭礼などで横笛や笙を演奏されていました。昭和17年（1942年）2月、水原さんは2度目の召集を受け、妊娠中の千代さんを残して出征されました。水原さんはフィリピンへ送られる直前、生まれて間もない我が子に会うために2時間だけ帰郷されました。それが家族との最後の別れとなりました。

浅田 啓二さん（近江八幡市の兄） 浅田 久満雄さん（24歳ころ）

死亡年月日 昭和17年(1942年)ころ

死亡場所 ミンダナオ島

目片 すす子さん（大津市）の夫 目片 嘉一さん（26歳）

死亡年月日 昭和18年(1943年)3月27日

死亡場所 ミンダナオ島ミサミ州マカハンパス



目片 嘉一さんが使用した
「九四式野戦甲車説明書」
[目片 すす子さん 提供]

太平洋戦争直前の昭和16年（1941年）11月

に結婚された目片さん夫妻の新婚生活は、嘉一さんの召集によって、わずか6ヶ月で終わ

りました。出征前日、嘉一さんは「自分たちは新婚旅行なしやから、帰ったら行こう。そして、毎日、手紙を寄越す（出す）ように」といって、フィリピンへ出征されました。すすさんが息子の誕生を知らせると、嘉一さんからかわいいう革靴やバスタオルが送られてきました。お子さんの生後30日目の写真を受け取って祝杯を挙げた嘉一さんが、次に届いたお子さんの写真を見ることはありませんでした。

田中太啓男さん（大津市）の兄 田中光男さん

死亡年月日 昭和18年(1943年)4月以降

死亡場所 レイテ島



田中光男さんが戦地で訪んでいた母子
「八月バタン山中及び○○湖に遊戯物を供するため記念碑を建設す」
[田中 太啓男さん 提供]

寺田 幸吉さん（東近江市）の兄 寺田 松太郎さん（23歳ころ）

死亡年月日 昭和18年(1943年)5月1日

死亡場所 セブ島第14陸軍病院

寺田松太郎さんは生まれつき体格が良かったそうです。昭和16年(1941年)1月、地域の青年団長をされていた寺田さんは出征され、その後、部隊移動によりフィリピンへ向かわれました。



山上青年学校のころの
寺田松太郎さん(右端)
(寺田幸吉さん、提供)

植西 弘子さん（大津市）の父 伊藤 武一郎さん（35歳）

死亡年月日 昭和19年(1944年)10月7日

死亡場所 ルソン島マニラ陸軍病院か？



伊藤武一郎さんの水筒
(植西弘子さん、提供)

伊藤武一郎さんは、軍属として満州（中国東北部）で働いていた時に結核を発病し、入院されました。昭和19年(1944年)6月、結核が完治していない伊藤さんも召集され、フィリピンへ送られました。「今度、出征したらもう帰れない。」と覚悟していたようで、残される妻子のために資産分与を親族に依頼してから出征されました。

井上 あやさん（近江八幡市）の夫 井上 延一さん

死亡年月日 昭和18年(1943年)10月8日

死亡場所 ルソン島北端の沖の海上

蚕の卵を生産する滋賀県蚕種共同施設組合に勤めていた井上延一さんは、長浜工場長代理として単身赴任していた昭和18年(1943年)9月、召集されました。あやさんは、「出征する延一さんの気持ちをくじくから」と、家族にとめられ、夫を見送れなかったそうです。

北野 栄子さん（栗東市）の父 北野 栄一さん

死亡年月日 昭和18年(1943年)10月14日

死亡場所 ルソン島キャビネ州ダイネ



北野栄一さん(出征時 佐山産業組合にて)
(奥島 すみ子さん、提供)

昭和17年(1942年)、地元の佐山産業組合で働いていた北野栄一さんは2度目の召集を受け、妻のとくさんとお子さんを残して出征されました。フィリピンの戦地から家族のもとへ、お子さんの写真を待ち焦がれる気持ちを記したハガキが送られてきたそうです。

池田 シカさん（東近江市）の義兄 池田 耕蔵さん

死亡年月日 昭和19年(1944年)4月

死亡場所 ミンダナオ島

古澤 しげさん（日野町）の兄 古澤 久三郎さん（25歳）

死亡年月日 昭和19年(1944年)5月21日

死亡場所 レイテ島

西大路郵便局で働いていた古澤久三郎さんは、2度目の召集でフィリピンへ送られました。「出征を秘密にすること」との命令により、誰にも見送ってもらえず、しげさんたち姉妹は家で泣いていたそうです。



古澤久三郎さんから妻のしげさんへの手紙
(古澤しげさん、提供)

増田 玲子さん（彦根市）の叔父 増田 弘さん（21歳）

死亡年月日 昭和19年(1944年)10月21日

死亡場所 サマール海峡の海上



増田弘さん(彦根工業学校中)の姿
(増田玲子さん、提供)

彦根工業学校を卒業されました。

菅沼 文子さん（大津市）の夫 万木 清良さん（29歳）

死亡年月日 昭和19年(1944年)10月23日

死亡場所 レイテ島タガミ

すらっと背が高く軍服姿が似合う万木清良さんは、性格もおおらかで、話し上手な楽しい人だったそうです。

文子さんと結婚され、お子さんにも恵まれましたが、戦争のために新居を留守にすることが多く、家族と一緒に過ごした時間はほんのわずかでした。



万木清良さん(万木 俊一さん提供)

池田 シカさん（東近江市）の義弟 池田 甚作さん

死亡年月日 昭和19年(1944年)10月

死亡場所 レイテ島沖の海上

古道 由男さん（日野町）の兄 古道 太一さん（23歳ころ）

死亡年月日 昭和19年(1944年)10月23日

死亡場所 レイテ島カドモン付近

古道太一さんは出征の前日、「由男、よう見といてくれよ。私はおそらくもう帰ってきられんと思うで。おまえは何としてもこの家を守ってくれ。この前言うたとおり、絶対守ってくれなあかん」と、弟の由男さんへ家族のことを託して戦地へ向かわれました。

富田 静さん（大津市）の兄 富田 太郎さん（29歳ころ）

死亡年月日 昭和19年(1944年)10月25日

死亡場所 レイテ島

上原 いよさん（高島市）の夫 上原 四郎さん（30歳）

死亡年月日 昭和19年(1944年)10月25日
死亡場所 レイテ島タガミ



上原 四郎さん(左)と上原 いよさん。提供

昭和16年（1941年）10月、上原四郎さんは新妻のいよさんを残して出征されました。2人の新婚生活はたった9ヶ月だったそうです。

出征直後に生まれた娘の和子さんが父親に会えたのは、四郎さんが一時帰国を許された昭和18年（1943年）の一度きりでした。

正野 光博さん（日野町）の伯父 正野 次郎さん（22歳）

死亡年月日 昭和19年(1944年)10月25日
死亡場所 サマール島沖の海上



正野 次郎さん(右)と弟の正野 博三さん(正野 光博さん。提供)

昭和18年（1943年）、満州鉄道に勤めていた正野次郎さんは「国のために役立ちたい」と志願して、舞鶴海兵団へ入団されました。

藤田 はるさん（愛荘町）の夫 藤田 駒治郎さん

死亡年月日 昭和19年(1944年)11月5日
死亡場所 レイテ島



藤田 駒治郎さん(藤田 はるさん。提供)

昭和14年（1939年）8月、妻のはるさんと2人のお子さんと暮らしていた藤田駒治郎さんに2度目の召集令状が届きました。「出征を秘密にすること」との命令が出ていたため、駒治郎さんは誰にも送られず、私服姿で家を出ていったそうです。はるさんが戦地の駒治郎さんへお子さんが描いた絵を送ったところ、「月明かりで見た」という返事がフィリピンから送られてきました。それが最後の手紙となりました。

山本 紀夫さん（長浜市）の父親 山本 喜一さん

死亡年月日 昭和19年(1944年)11月6日
死亡場所 レイテ島タガミ西方陣地

武村 隆さん（栗東市）の兄 武村 司一さん（23歳）

死亡年月日 昭和19年(1944年)11月6日
死亡場所 ミンダナオ島

小学校卒業後、武村司一さんは京都市のお菓子屋さんで働いていました。

上口 善美さん（長浜市）の伯父 上口 仙太郎さん（33歳ころ）

死亡年月日 昭和19年(1944年)11月6日
死亡場所 レイテ島タガミ西方陣地



上口 仙太郎さんの肖像画(上口 善美さん。提供)

日中戦争で2度も負傷された上口仙太郎さんは、除隊後にとらゑさんと結婚されました。昭和17年（1942年）、再び召集された仙太郎さんは、生後半年のお子さんととらゑさんを残してフィリピンへ出征されました。出征式に向かう仙太郎さんは、玄関を何度も出入りして踏ん切りがつかない様子だったそうです。

福島 治郎さん（竜王町）の兄 福島 佐一さん（25歳ころ）

死亡年月日 昭和19年(1944年)11月14日
死亡場所 レイテ島タガミ周辺



福島 佐一さんの「衛生兵必携」(福島 治郎さん。提供)

福島佐一さんは小学校卒業後、大阪の小森商店に奉公に出ていました。

昭和16年（1941年）に2度目の召集でフィリピンに送られました。

太田 孝之さん（栗東市）の兄 太田 賢さん

死亡年月日 昭和19年(1944年)11月17日
死亡場所 フィリピンに向かう海上



太田 賢さんのノート(太田 孝之さん。提供)

昭和17年（1942年）、太田賢さんは志願し、甲種幹部候補生として入隊されました。

川瀬 アエさん（東近江市）の夫 川瀬 有蔵さん（30歳）

死亡年月日 昭和19年(1944年)11月21日
死亡場所 ミンダナオ島

役場の戸籍係だった川瀬有蔵さんは生まれたばかりの娘さんを溺愛し、近所に行くときも、いつもおんぶして出かけられたそうです。母親も「女が三人（アエさん・母親・祖母）もいるのに、わざわざ男のあんたがおんぶすることないのに」と、あきれていたそうです。昭和18年（1943年）3月、川瀬さんは「おまえが学校へ行く時分に帰って来ようほん（来るよ）」と、娘さんの顔を撫でてから出征されました。

植田 安正さん（甲賀市）の弟 植田 潔さん（23歳）

死亡年月日 昭和19年(1944年)11月
死亡場所 レイテ島



植田 潔さん(植田安正さん。提供)

昭和18年1月、植田潔さんは召集されました。

田中 健治さん（大津市）の弟 田中 修さん

死亡年月日 昭和19年(1944年)11月
死亡場所 ルソン島マニラ沖の海上

田中修さんは技術職を目指していましたが、和歌や短歌、日記を書くことが大好きな文学青年だったそうです。

安田 一平さんの曾祖父の兄 河原田 貞一さん（高島市出身）

死亡年月日 昭和19年(1944年)
死亡場所 ネグロス島

河原田貞一さんは陸軍航空隊に入隊し、ネグロス島へ送られました。

脇坂 金五郎さん（東近江市）の弟 脇坂 寅夫さん（18歳ころ）

死亡年月日 昭和19年(1944年)12月7日
死亡場所 レイテ島オルモック付近の海洋

脇坂寅夫さんは背が高く、社交的な性格だったそうです。

昭和16年（1941年）、東京の塚本商店で働いていた脇坂さんは体調を崩して帰省した時に役場の勤めもあり、海軍予科練習生に志願されました。土浦の海軍航空隊に入隊後、フィリピンへ送られました。



脇坂 寅夫さん
（撮影 金五郎さん、提供）

三上 芳久さん（大津市）の兄 三上 正久さん（21歳）

死亡年月日 昭和19年(1944年)12月7日
死亡場所 レイテ沖の海上

「おいどん」のあだ名で呼ばれた三上正久さんは、いじめられていた下級生を助けるなど、親分肌の度胸が据わった性格だったそうです。発酵化学に興味を持ち、灘の酒屋に就職するため、猛勉強していた三上さんは時流の影響を受け、大刀洗陸軍飛行学校へ入隊されました。

伊吹 達夫さん（長浜市）の弟 伊吹 主己さん（27歳）

死亡年月日 昭和19年(1944年)12月8日
死亡場所 レイテ島

早くに両親を亡くした伊吹兄弟は、達夫さんが親代わりとなつて、主己さんを育てたそうです。
主己さんは関西大学2年生の時、学徒出陣で敦賀第19連隊へ入隊されました。

滝田 幸七さん（東近江市）の兄 滝田 佳三さん

死亡年月日 昭和19年(1944年)12月8日
死亡場所 レイテ島ブラウエン飛行場

滝田佳三さんは、フィリピンの戦場から「この頃は食べるものがなくて、蛇やトカゲを食べている」と記した手紙を家族へ送られています。

門坂 空平さん（東近江市）の兄 門坂 庄平さん

死亡年月日 昭和19年(1944年)
死亡場所 レイテ島

昭和17年（1942年）夏、門坂庄平さんは家族のもとへ、フィリピンで見たホテルなどの話を記したハガキを送りました。

高田 恵子さん（甲賀市）の伯父 高田 初太郎さん（32歳ころ）

死亡年月日 昭和19年(1944年)?
死亡場所 レイテ島?

高田初太郎さんは、満洲への派遣などを経て、フィリピンへ派遣されました。戦地での日記やご家族に宛てた手紙を多く残しておられます。残された日記は昭和19年（1944年）2月までで、その後、いつどこで戦死されたのかは不明ですが、所属されていた歩兵第20連隊は、昭和19年にレイテ島で玉砕しています。

北村 つるさん（大津市）の長男 北村 藤一さん

死亡年月日 昭和19年(1944年)12月8日
死亡場所 レイテ島ブラウエン飛行場付近

北村藤一さんは徴兵検査に合格し、昭和18年（1943年）12月に工兵第16連隊に入隊されました。

中西 一雄さん（大津市）の兄 中西 恒三さん

死亡年月日 昭和19年(1944年)12月8日
死亡場所 レイテ島ブラウエン飛行場

中西恒三さんは日中戦争で何度も召集されたため、結婚の機会を決めかねていました。

昭和18年（1943年）、中西恒三さんは結婚することもなく、再び召集されてレイテ島に送られました。



中西 恒三さん(中西一雄さん、提供)

森田 久隆さん（長浜市）の父親 森田 久治郎さん

死亡年月日 昭和19年(1944年)12月以降

死亡場所 ルソン島ワウ付近の第65陸軍病院か？

昭和18年（1943年）2月、森田久治郎さんは幼い娘さんを亡くされました。翌年、久隆さんが生まれて大変喜んだのもつかの間、昭和19年（1944年）6月に召集令状が届き、妻と幼いわが子を残して出征されました。

勝井 吉男さん（甲賀市）の弟 （氏名不明）

死亡年月日 昭和19年(1944年)

死亡場所 レイテ島

白井 貞夫さん（近江八幡市）の兄 白井 雄一さん（26歳）

死亡年月日 昭和20年(1945年)2月中旬

死亡場所 レイテ島オルモック北東のダナオ湖畔

八幡商業卒業後に、大阪の敷島紡績に勤めていた白井雄一さんは召集され、幹部候補生として豊橋の士官学校へ入学されたそうです。

卒業後、白井雄一さんは第16師団歩兵第9連隊第3大隊第10中隊の中隊長として、フィリピンへ派遣されました。



会社員時代の白井 雄一さん(右側)
[白井 貞夫さん、提供]

西堀 誠さん（長浜市）の兄 西堀 恵三さん（22歳ころ）

死亡年月日 昭和20年(1945年)2月26日

死亡場所 ルソン島ラグナ州ロスバニオス

熊本予備士官学校を卒業し、ルソン島の部隊へ配属されました。

市田 勝さん（東近江市）の父親 市田 久治郎さん（33歳）

死亡年月日 昭和20年(1945年)2月26日

死亡場所 ルソン島マニラ市

昭和18年（1943年）4月、妻と2人の息子と暮らしていた市田久治郎さんのもとに召集令状が届きました。市田さんは舞鶴海兵団に入隊後、ルソン島へ送られました。



満洲鉄道に勤めていた頃の市田 久治郎さん(昭和12年2月)
[市田勝さん、提供]

長谷井 よねさん（大津市）の弟 長谷井 定次さん（22歳）

死亡年月日 昭和20年(1945年)2月26日

死亡場所 ルソン島マニラ市

三菱商事に勤めていた長谷井定次さんは2度目の召集を受け、ルソン島へ送られました。召集時には、すでに結核を発病していたそうです。



長谷井 定次さんの寄せ書き日の丸
[長谷井 よねさん、提供]

植田 美代子さん（東近江市）の兄 植田 建次さん（21歳ころ）

死亡年月日 昭和20年(1945年)2月ころ

死亡場所 ビリ島

植田建次さんは大変まじめな人で、家族の大国柱として2町歩の田んぼを耕しながら青年学校に通っていました。昭和18年（1943年）、出征が決まると、残された家族が田んぼを耕作できるよう、妹の美代子さんのために子牛を買って来て、牛の扱い方を記した丁寧な説明書きを置いて行かれたそうです。



植田 建次さん
[植田 美代子さん、提供]

伊庭 長和さん（高島市）のいとこ 伊庭 信二さん（32歳ころ）

死亡年月日 昭和20年(1945年)3月1日

死亡場所 レイテ島カンギボット山付近

昭和12年（1937年）10月27日、伊庭信二さんは日中戦争で負傷し、家族のもとへ戦死を知らせる戦死公報の誤報が届きました。当時の新聞記事には「生きていた英霊」としてそのことが取り上げられています。除隊後、結婚を考えていた昭和16年（1941年）、伊庭信二さんは再び召集され、フィリピンへ向かいました。



伊庭 信二さんの新聞記事
[伊庭 長和さん、提供]

田中 もとさん（大津市）の夫 田中 為三郎さん（30歳）

死亡年月日 昭和20年(1945年)3月21日

死亡場所 ルソン島アンチボロ

田中為三郎さんは、嚮導隊の隊員として北海道や新潟県で荒地の開墾に従事されていた昭和18年（1943年）に召集されました。妻のもとさんが娘の満里子さんを連れて、伏見の部隊へ面会に行かれた時、軍の敷地を出た2人を見送るため、為三郎さんは堀によじ登って別れを惜しまれたそうです。



嵐山にて満里子さんと一緒に撮影された田中 もとさん、妻氏
[田中 もとさん、提供]

吉田 越子さん（近江八幡市）の夫 吉田 喜代次さん（31歳）

死亡年月日 昭和20年(1945年)3月28日
死亡場所 パナイ島イロイロ

昭和19年（1944年）5月、水口警察署で警察官をされていた吉田喜代次さんは、3度目の召集令状を受け取りました。部隊がフィリピンへ出発する日、妻の越子さんは部隊の他の家族と一緒に1時間だけ面会を許されました。それも、「ありがたく思え。親心だ。1時間も面会させてやった」との、部隊長の言葉で終わりを告げたそうです。



吉田 喜代次さん
（吉田 越子さん、提供）

田中 昌利さん（野洲市）の兄 田中 実さん（22歳ころ）

死亡年月日 昭和20年(1945年)3月
死亡場所 ルソン島マニラ東方のマリキナ山中

別府市の亀の井バス会社にお勤めだった田中実さんは、呉海軍工廠へ徴用された後、昭和17年（1942年）、蘆山航空隊に入隊されました。戦地へ赴く前に、幼稚園に通っていた弟の昌利さんにランドセルを買ってあげたそうです。

竹内 はつ江さん（湖南市）の弟 竹内 春造さん（24歳）

死亡年月日 昭和20年(1945年)4月1日
死亡場所 レイテ島

妻と子どもを残して出征されました。

北川 久雄さん（東近江市）の父親 北川 佐右衛門さん（34歳）

死亡年月日 昭和20年(1945年)4月5日
死亡場所 ルソン島リザール州アンチボロ

五個荘郵便局などで働いていた北川佐右衛門さんは、昭和19年（1944年）5月、海軍の徴用中に召集されました。家族との最後の別れもできずにフィリピンへ送られた北川さんは、戦地へ向かう列車から、東海道本線沿いに住む親戚にあて、ハンカチを投げ落とし、自分が戦地へ出発したことを家族に知らせました。

永谷 芳昭さん（大津市）の父親 永谷 時治さん（32歳）

死亡年月日 昭和20年(1945年)4月10日
死亡場所 ホロ島パンカル山

永谷時治さんは気が強く、日中戦争の出征でも人前で泣くことがなかったそうです。昭和19年（1944年）の出征では、事前にフィリピンへ派遣されることを知らされていたため、再び会うことができない家族を想ってなのか、靴を履きながら泣かれたそうです。



永谷さん（永谷 芳昭さん、提供）

池田 シカさん（東近江市）の夫 池田 倂治さん（29歳ころ）

死亡年月日 昭和20年(1945年)4月12日
死亡場所 ルソン島リザール州五訓山



池田 倂治さん
（池田 シカさん、提供）

昭和17年（1942年）、徴用で大阪の日立造船に働きに出ていた池田倂治さんは、夫婦で住むための新居を郷里に建て、親戚のシカさんと結婚されました。昭和19年（1944年）6月20日、徴用期限が終わったその日、池田さんのもとに召集令状が届きました。池田さんは一度も新居に住むこともなく、シカさんと生まれて間もないお子さんを残して、大阪から出征して行かれました。

竹内 充夫さん（大津市）の兄 竹内 伝さん

死亡年月日 昭和20年(1945年)4月18日
死亡場所 ルソン島ウラニオン州ヤリヤガン

大津商業学校を卒業され、三菱重工にお勤めでした。

西村 操さん（大津市）の夫 西村 雄次郎さん（36歳ころ）

死亡年月日 昭和20年(1945年)4月24日
死亡場所 ルソン島クラーク空軍基地付近か？

西村雄次郎さんは、妻の操さんに「ちょっと行って来るだけや。ちょこちょこ行って、じき（すぐ）に戻ってくるわ」と、言い残して出征されました。

中島 君香さん（草津市）の夫 中島 久太郎さん（34歳ころ）

死亡年月日 昭和20年(1945年)4月25日
死亡場所 ルソン島

豊屋さんを営んでいた中島久太郎さんは召集され、昭和19年（1944年）4月に舞鶴海兵団に入団しました。久太郎さんからのハガキには、切手の裏に「おなかが減るので何か送ってほしい」と、妻の君香さんに宛てた秘密の依頼が記されていたそうです。

池田 シカさん（東近江市）の義弟 池田 健吉さん

死亡年月日 昭和20年(1945年)4月
死亡場所 レイテ島

仙波昭男さん（近江八幡市）の兄 仙波彦嗣さん（29歳）

死亡年月日 昭和20年(1945年)5月16日
死亡場所 ミンダナオ島ブギドノン州マルコ

朝鮮の三井百貨店で働いていた仙波彦嗣さんは、昭和19年（1944年）3月、結婚のために帰郷されました。挙式後、2人で朝鮮のご自宅へ戻ろうとした矢先、召集令状が届きました。仙波さんは花嫁を残して、1人で出征して行かれました。

**黄瀬 しげさん (湖南省) の夫
黄瀬 増次さん (33歳)**

死亡年月日 昭和20年(1945年)5月20日
死亡場所 ルソン島ヌエバシヤ州イロイロ

黄瀬増次さんは農業とともに、牛車曳き・木材運搬で生計を立てられていました。出征で駅へ向かう途中、振り返って故郷の東寺(湖南省東寺地区)をじっと見ていたそうです。

**横田 高知さん (大津市) の父親
(氏名不明)**

死亡年月日 昭和20年(1945年)5月
死亡場所 ルソン島クラーク地区

**奥島 すみ子さん (甲賀市) の兄
奥島 宗男さん (26歳)**

死亡年月日 昭和20年(1945年)6月2日
死亡場所 ネグロス島マンドラガン山付近



奥島宗男さんは、校長先生の息子さんと喧嘩して、警察から呼び出しをくらうなどの武勇伝を持つ「やんちゃ者」でしたが、小学校に入学するすみさんにランドセルや弁当箱を買ってあげるなど、兄弟想いのやさしい人だったそうです。青年学校に通いながら、佐山村(甲賀市小佐治ほか)の農協に勤めていた昭和15年(1940年)8月に現役で出征され、昭和19年(1944年)に部隊移動によってフィリピンへ送られました。

奥島宗男さん(左)と弟の善治さん(右)の撮影(奥島すみ子さん、提供)

**川嶋 ことさん (栗東市) の夫
(氏名不明) (37歳ころ)**

死亡年月日 昭和20年(1945年)6月8日か?
死亡場所 ルソン島

**小森 信行さん (野洲市) の父親
小森 庄四郎さん (27歳)**

死亡年月日 昭和20年(1945年)6月8日
死亡場所 ルソン島アンチボロ



小森庄四郎さんの戦時服(小森信行さん、提供)

**宇野 八重子さん (草津市) の父親
宇野 弥右衛門さん**

死亡年月日 昭和20年(1945年)6月15日
死亡場所 ルソン島

宇野弥右衛門さんは身体が大きく、おとなしく、口数が少ない人だったそうです。出征当時、4歳だった娘の八重子さんは、弥右衛門さんに「お相撲やラムネの瓶にタバコの煙を入れて遊んでもらったことを覚えているが顔が悪い出せない」と話されています。

**中井 利郎さん (東近江市) の叔父
中井 三郎兵衛さん (26歳ころ)**

死亡年月日 昭和20年(1945年)6月15日
死亡場所 ルソン島マニラ東方のイボ



中井三郎兵衛さんの戦時服(中井利郎さん、提供)

**木村 茂さん (近江八幡市) の兄
木村 周一さん (23歳)**

死亡年月日 昭和20年(1945年)6月15日
死亡場所 ルソン島マウンテン州ハバンガン

昭和17年(1942年)1月、木村周一さんは弟の茂さんに「通信兵は後方部隊やさかい、戦果を上げられる兵士でないけども、精一杯やってくる」と言って、出征されたそうです。

**水島 登志さん (野洲市) の夫
水島 保さん (40歳ころ)**

死亡年月日 昭和20年(1945年)6月15日
死亡場所 ルソン島リザール州マニラ南方

水島保さんは柔道七段の腕前で、鹿児島県の第七高等学校(現在の鹿児島大学)の助教授をされていました。



水島保さんの旅行鞆(水島登志さん、提供)

**奥野 正一さん (近江八幡市) の兄
奥野 孝三さん (30歳ころ)**

死亡年月日 昭和20年(1945年)6月15日
死亡場所 ルソン島イサベラ州ジョネス

**大橋 善治郎さん (多賀町) の兄
大橋 由太郎さん (31歳)**

死亡年月日 昭和20年(1945年)6月18日
死亡場所 ルソン島

**平井 光子さん (東近江市) の夫
平井 義夫さん (26歳ころ)**

死亡年月日 昭和20年(1945年)6月22日
死亡場所 ルソン島ブギヤス

2回目の出征でルソン島へ送られました。

**猪田 清治郎さん (東近江市) の弟
猪田 和一さん**

死亡年月日 昭和20年(1945年)6月
死亡場所 ルソン島バレー峠

**上村 重良さん (甲賀市) の父親
上村 重郎右衛門さん (47歳)**

死亡年月日 昭和20年(1945年)7月2日
死亡場所 ルソン島

上村重郎右衛門さんは真生川町長などを歴任された後、昭和18年(1943年)に召集され、食糧増産隊中隊長となりました。戦地では「郷里でも食糧増産のために男手がいるだろう」と、農家出身の部下を帰郷させたそうです。

山田 利治さん（東近江市）の父親

山田 彌五郎さん（31歳）

死亡年月日 昭和20年(1945年)7月8日

死亡場所 ルソン島リザール州バングンバヤン

青木 喜代さん（愛荘町）の夫 青木 勘四郎さん（37歳）

死亡年月日 昭和20年(1945年)7月12日

死亡場所 ミンダナオ島



青木 勘四郎さん(青木 喜代さん、提供)

農業を営まれていた青木勘四郎さんは、4度も兵役に服しました。その合間に喜代さんと結婚しましたが、いっしょに暮らした期間はわずか1年6ヶ月あまりでした。昭和19年(1944年)8月、フィリピンへ出発する前に勘四郎さんは、「死なせんがな、死なせんがな、わしは看護兵やで死なせんがな」と、喜代さんたちに繰り返していたそうです。「衛生兵やから、必ず帰ってくる。子どもはそれから作れば良い」言っていた勘四郎さんが再び戻ることはありませんでした。

安藤 克恵さん（草津市）の兄 安藤 清太郎さん（38歳ころ）

死亡年月日 昭和20年(1945年)7月13日

死亡場所 ルソン島

息子さんの誕生を知らずに亡くなりました。

中川 あい子さん（多賀町）の兄 中川 与一さん（27歳）

死亡年月日 昭和20年(1945年)7月15日

死亡場所 ミンダナオ島コタバト州ミラヤ



中川 与一さんの軍服
(中川 あい子さん、提供)

昭和17年(1942年)2月、中川与一さんは2度目の召集を受け、母親と妹のあい子さんを残して出征されました。

初田 智久さん（大津市）の夫 （氏名不明）（34歳ころ）

死亡年月日 昭和20年(1945年)7月15日

死亡場所 ミンダナオ島

初田智久さんのご主人は、草津の郡農会で働いていました。昭和17年(1942年)1月に召集され、智久さんと2人のお子さんを残して、フィリピンへ送られました。

井上 桂一さん（東近江市）の父親 井上 外次さん（32歳）

死亡年月日 昭和20年(1945年)7月16日

死亡場所 ルソン島カヤバ山中



井上 外次さん(井上 桂一さん、提供)

昭和18年(1943年)12月、井上外次さんは奥さんに遺書を手渡し、「もし、わしが無事に帰ってきたら開ける必要はないから、何かあるまでしまっておいてくれ」と言って、家を出られたそうです。

奥島 すみ子さん（甲賀市）の兄 奥島 一重さん（24歳）

死亡年月日 昭和20年(1945年)7月17日

死亡場所 レイテ島ピリヤバ周辺



満洲義勇軍のころの奥島 一重さん
(奥島 すみ子さん、提供)

奥島一重さんは大阪の薬屋さんに丁稚として奉公に出ていた時に、満洲義勇軍に志願されて中国大陸へ渡られました。その後、召集を受けて所属した満洲の部隊がレイテ島へ派遣されました。

川村 英さん（東近江市）の夫 川村 吉蔵さん（36歳）

死亡年月日 昭和20年(1945年)7月23日

死亡場所 ルソン島

フィリピンへ派遣される前夜、川村吉蔵さんは妻の英さんやお子さんたちを伏見の旅館に呼んで、最後の晩を一緒に過ごされました。「今度は行くところが、行くところやからな」と話されたそうです。部隊の見送りでは、幼い娘さんが「お父さん」とヨチヨチ歩きで後を追う姿を、一度振り向いて見ただけで、そのまま歩いて行かれました。

小辰 くまさん（東近江市）の夫 小辰 源左衛門さん（32歳）

死亡年月日 昭和20年(1945年)8月1日

死亡場所 ルソン島東方60kmの山中

昭和19年5月、年齢的に「もう召集はないだろう」と村の役をいろいろと引き受けていた小辰源左衛門さんに召集令状が届きました。妻のくまさんは出征直後に生まれた息子さんを源左衛門さんに見せるため、一度だけ、舞鶴の部隊に面会に行かれたそうです。それが2人の最後の別れとなりました。

齋藤 茂さん（近江八幡市）の兄 （氏名不明）

死亡年月日 昭和20年(1945年)8月5日

死亡場所 ネグロス島

齋藤茂さんのお兄さんは、滋賀県庁の土木部で働いていましたが、技術を買われて海軍に徴用され、軍属としてネグロス島へ渡りました。

山本 志津さん（野洲市）の夫 山本 弥右衛門さん（36歳）

死亡年月日 昭和20年(1945年)8月8日

死亡場所 ルソン島

山本弥右衛門さんは地域の在郷軍人会の会長を長く務められていたそうです。

久保 とみさん（草津市）の夫
久保 勝さん（33歳）

死亡年月日 昭和20年(1945年)8月15日
死亡場所 ルソン島

家業の家具屋さんを手伝っていた久保勝さんは身体が弱かったため、長い間、召集されませんでした。昭和18年（1943年）9月、戦況悪化により召集されました。

和治 なつさん（高島市）の夫
和治 清さん

死亡年月日 昭和20年(1945年)8月19日
死亡場所 レイテ島

昭和18年（1943年）12月18日、京都に奉公に出ていた和治なつさんは、両親が決めた結婚相手の清さんと式を挙げられました。その5日後、清さんは出征し、2度と帰って来ることはありませんでした。



和治 清さんの肖像画
（和治 なつさん、提供）

西堀 誠さん（長浜市）の兄
西堀 郁三さん

死亡年月日 昭和20年(1945年)8月19日
死亡場所 ルソン島

山元 ふゆさん（栗東市）の夫
山元 新六さん（30歳ころ）

死亡年月日 昭和20年(1945年)9月6日か？
死亡場所 ルソン島

山元新六さんは身体が弱かったそうです。戦況悪化により、昭和19年（1944年）2月に召集されました。

松村 晋二郎さん（東近江市）の弟
松村 友三郎さん（19歳）

死亡年月日 昭和20年(1945年)10月3日
死亡場所 ルソン島カナルバン米軍第174衛戍病院

猪飼 久子さん（栗東市）の兄
（氏名不明）

死亡年月日 昭和20年(1945年)
死亡場所 ルソン島マニラ

死亡年月日が不明な戦死者

奥村貞男さん（草津市）の弟
奥村清三郎さん

死亡年月日 不明
死亡場所 レイテ島

海軍に入隊されました。

加藤 與市郎さん（大津市）の弟
加藤 順三さん

死亡年月日 不明
死亡場所 レイテ島

航空兵としてフィリピンへ送られ、音信不通となったそうです。

丸山 弘さん（大津市）の兄
丸山 幸治さん（18歳）

死亡年月日 不明
死亡場所 レイテ島



丸山 幸治さんの軍帽（丸山 弘さん、提供）

昭和15年（1940年）、丸山幸治さんは志願兵として出征されました。

疋田 きくさん（高島市）の弟
（名前不明）

死亡年月日 不明
死亡場所 レイテ島

徴兵検査に合格し、そのまま入隊されたそうです。

奥村 早智子さん（大津市）の叔父
（氏名不明）

死亡年月日 不明
死亡場所 ネグロス島

西澤 敬治郎さん（東近江市）の父親
西澤 久三さん

死亡年月日 不明
死亡場所 ミンダナオ島



西澤 久三さんの母が書き付けた
（西澤 敬治郎さん、提供）

奥内 くにさん（近江八幡市）の息子
奥内 文雄さん

死亡年月日 不明
死亡場所 ミンダナオ島

奥内文雄さんの子どものころの夢はパイロットになることでした。川西航空機で働いていた昭和17年（1942年）1月、奥内さんは志願し、土浦航空隊に入隊されました。

藤本 速雄さん（高島市）のいとこ
藤本 太郎助さん（23歳ころ）

死亡年月日 不明
死亡場所 レイテ島カンギボット山付近

藤本太郎助さんは父親ゆずりの豪傑だったそうです。出征前日の晩も、ほとんど夜通しお酒を飲んでいたので、出征式ではまともに挨拶できないほどの二日酔いでした。家業の関係で自動車運転免許を持っていたため、海軍陸戦隊の自動車班に配属されました。

荒川 卯太郎さん (日野町) の兄
中澤 由吉さん (27歳ころ)

死亡年月日 不明

死亡場所 ルソン島サラクサク峠



中澤由吉さんと家族(昭和14年の撮影)
(写真: 日本郵船社、掲載)

中澤由吉さんは子どものころ、身体が小さく、どちらかという
とおとなしい性格だったそうです。

昭和19年(1944年)、地元の酒屋さんで働いていた中澤さん
は召集されて、フィリピンへ送られました。

フィリピン戦年表

昭和16年(1941年)

- 12月8日 アジア・太平洋戦争が始まる
- 12月22日 日本軍の主力がルソン島に上陸
フィリピンへの本格的な侵攻開始

【ルソン島で日米が交戦】

昭和17年(1942年)

- 1月2日 日本軍がマニラを占領
- 1月2日~4月9日 バターン半島で戦闘
- 6月9日 コレヒドール島の米軍が降伏
日本軍がフィリピン全土を占領

【フィリピン人民兵との戦闘は継続】

昭和18年(1943年)

- 9月25日 レイテ島・サマル島が第16師団の
守備地域となる
滋賀県出身兵士が多数、レイテ島へ移動
- 10月1日 日本がフィリピンの独立を承認

昭和19年(1944年)

【米軍反攻を準備】

- 9月9日 マニラなどで空襲が始まる
 - 10月20日 米軍がレイテ島へ上陸
- 【レイテ島をめぐる両軍の激しい戦闘】
- 10月23日~26日 レイテ沖海戦 日本軍が敗北
 - 12月15日 米軍がミンドロ島へ上陸
戦火が拡大

【レイテ島をめぐる戦闘が終結】

- 12月25日 日本軍がレイテ島の防衛を断念
第16師団を除き、撤退命令

昭和20年(1945年)

【米軍がルソン島攻略へ向けて準備】

1月3日 ルソン島の日本軍司令部がバギオへ撤
退

1月9日 米軍がルソン島に上陸

【ルソン島をめぐる両軍の激しい戦闘】

2月上旬~ ルソン島の日本軍が北部の山間地で抗
戦

3月3日 米軍がマニラを占領

3月18日 米軍がパナイ島へ上陸
フィリピン全土に戦火が拡大

【米軍がフィリピン全土の制圧に着手】

3月29日 米軍がネグロス島へ上陸

4月16日 ルソン島の日本軍司令部がバギオから
撤退

4月17日 米軍がミンダナオ島へ上陸

4月23日 ルソン島の日本軍がバギオから撤退

5月9日 米軍がバレテ峠を攻略

5月19日 米軍がルソン島のサラクサク峠を攻略

5月30日 米軍がバレテ峠周辺を制圧

【フィリピン各地で日本軍兵士が敗走 飢餓と感染
症で苦しむ】

6月頃~ ルソン島北部の日本軍兵士がプログ山
周辺で逃避行

8月15日 終戦

【終戦を知らず日本軍兵士が逃避行】



ルソン島北部バギオ英霊追悼碑での慰霊の様子

(平成13年撮影)

【体験談—主人の兄弟4人ともフィリピンで戦死したんですわ—】 Aさん（東近江市）

主人の兄弟4人とも、みんな戦死したんですわ。みんな、よい身体したはった。長男のBさんは、昭和19年4月、ミンダナオで。戦時中に戦死の通知が来ましたな。次男のCは私の夫ですが、昭和20年4月12日、フィリピン（ルソン島）リザール州です。三男・Dさん。この人は海軍で、戦艦「筑摩」（※「筑摩」は正確には重巡洋艦です）に乗ってはったんですが、昭和19年10月、フィリピン沖で船が沈んだんですな。そして、四男、Eさんは、現役で行って昭和20年4月、レイテで戦死。けど、両親は、立派なもんやったなあ。口に出さはらなんだ。しっかりしてはった。心の中は、どんな悲しかったか、分からんけど。

主人は2年間の徴用期限が終わったら、私と一緒に、この家で暮らすつもりやったんです。けど、2年間の徴用期限が終わったその日、忘れもしません、昭和19年6月20日に召集令状が来たんです。親元の役場に来ました。そこで、私の兄とおじさんとがその令状を持って大阪へ来てくれました。電報も来たんやと思います。このとき、生後8ヶ月の息子がいましたんや。郷里へ戻る間ものうて、主人は大阪の寮からそのまま出征しました。両親の顔も見ずにですわ。

6月28日に、一度面会に行きました。私は息子を連れて大阪から伏見の連隊へ行ったし、里からは私の母、それとお義母さん、従姉妹、女ばかりの4人です。面会時間は、3時間ほどありました。かやく御飯を作って持って行きました。主人は、息子を取り上げて肩馬してましたわ。可愛い盛りでしたな。

そして、昭和19年9月に最後の船便で台湾へ渡って行かはった。2回、便りがありました。1回目は、小さい紙にちょっと書いているだけです。「両親を頼む」「息子を頼む」とだけ書いていました。出し先は分かりません。2回目は「台北にて」ってありましたな。やから、終戦でも私らは、主人は台湾にいやはるもんとばかり思ってたんです。

終戦になって、お義父さんに、「Cさん部隊の中隊長です」という伊勢（三重県）の人から手紙が来た

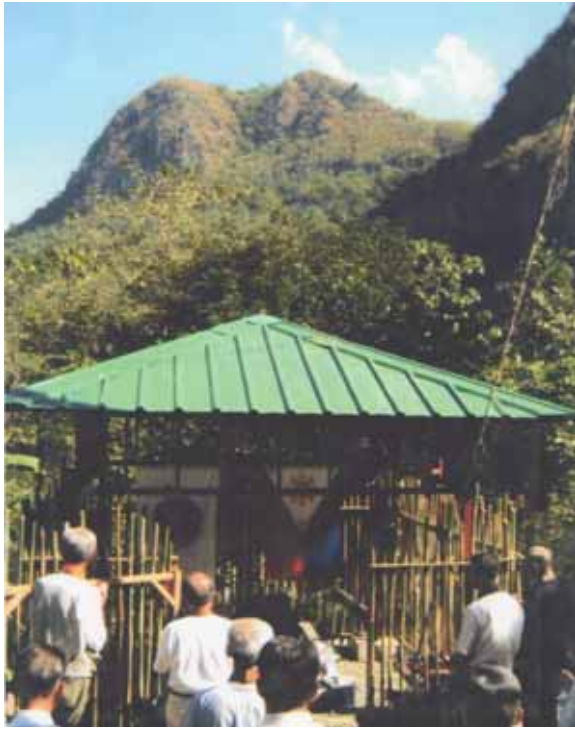
んです。そこに、主人が「戦死した」って書いてあったんですな。お義父さんは、見せてくれはらなんだ。けど、小姑さんと聞きに行こうと言って、三重県の佐那具まで行ったんです。けんど、向こうも泣いて泣いて十分には喋ってくれはらなんだ。言いにくかったんですやろなあ。戦う武器もなく、食べるものもない。逃げるに逃げられへん。敵が攻めて来たとき、主人は岩の上に立って、手に持っていた自分の手榴弾を投げたんです。死ぬ覚悟やったんですな。最後は手榴弾を背中に受けた。自爆のようなもんやったそうです。昭和20年4月12日の戦死です。フィリピン・リザール州の五訓山というところです。500人ほどいた兵隊さんが、最後に残らはったんは2人だけやったて。

平成9年に息子と一緒に、戦跡巡拝・慰霊の旅に参加させてもらいました。五訓山というのはダムの上にありました。あんな急な山でなあ。息子が、その山に向かって大きな声で、「お父さーん」と呼びましたがな。私も、「お父さん、やっと来ましたほん」と言いました。涙が出て涙が出て。けど、可哀想な人やった。私のような境遇の人は、たくさん連れがあったて、私は我慢できたけど。



ルソン島マニラ東方の日本地名

Cさんが戦死された「五訓山」や戦没者碑がある「千秋山」は、日本軍が占領時に付けた地名です。



マニラ東方山中方面戦没者之碑での慰霊の様子
 (「千秋山」のふもとで平成19年撮影)



左：水島保さんの柳行李

水島保さんが軍隊で使用していたものです。

右：伊藤武一郎さんの国民服（上衣とズボン）

伊藤武一郎さんが、最初の召集から戻られ、在郷軍人会に所属していた時に着ていた国民服です。



ルソン島バターン半島での慰霊の様子（平成13年撮影）



『横田隊写真帖』



左：写真集『比島派遣軍』

右：戦地から送られてきた冊子『比島作戦の思ひ出』

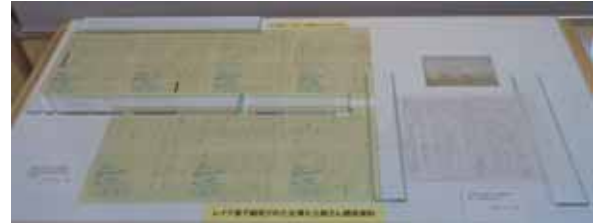
日本軍はこれらの書籍を発行し、戦果を宣伝していました。



レイテ島で戦死された丸山幸治さん関係資料
 (右上：軍帽、左上：靖国神社合祀通知書、
 下：丸山幸治さんから届いたはがき)



フィリピンで戦死された奥島宗男さん、一重さん関係資料



レイテ島で戦死された古澤久三郎さん関係資料
 戦死の様子を伝える手紙の中でも、地名は「〇〇」と秘密に
 されています。



フィリピンで戦った方々を偲ぶ品

最上段：指揮刀 2段目：奉公袋・赤たすき・千人針

3段目：靖国神社写真、寄せ書き日の丸、写真「章一郎出征ノ時寫」・第一補充兵證書・軍隊手帳

4段目：豚皮の編上靴、砲弾・弾頭部

第2章 フィリピンの戦場では

第1節 戦場となったフィリピン

ルソン島やミンダナオ島など7,000を超える熱帯の島々で構成されるフィリピンは、16世紀からスペインの植民地でしたが、19世紀末に独立を目指した民族運動がさかんになり、1896年にフィリピン革命が始まります。1898年にはアメリカが介入してスペインとの戦争に勝利し、同年12月に統治権を譲り受けました。

この間、フィリピンは1898年6月12日にスペインからの独立を宣言し、アメリカは当初は革命軍を支援しましたが、やがて抑圧する側になっていきます。アメリカは革命軍を降伏させ、1902年から本格的な支配を始めました。しかし、独立運動を続けるフィリピン人に対して、アメリカは1916年に自治を認め、1934年には完全独立を約束しました。

多くのフィリピン住民が、1946年に約束されていた独立を心待ちにしていた昭和16年（1941年）12月、日本軍がフィリピンに攻め込みます。戦争の舞台となったフィリピンでは、現地の人々も巻き込まれました。フィリピン政府によれば、この戦争によって犠牲となったフィリピン人は110万人以上だったとされています。

コラム：フィリピン革命と日本

日清戦争（1894～1895年）に勝利して台湾を領土に加えた日本は、フィリピンにとっては隣国でした。1898年6月12日に独立を宣言したフィリピン政府は、スペイン軍と戦うための軍事的支援を日本にも求めようとしていました。

当時の国際情勢のなかで、日本はスペインとアメリカの戦争に対しては中立の立場をとり、日本政府としてはフィリピン政府への支援を行いませんでした。しかし、一部の政治家などは、フィリピン独立への軍事的支援を行おうとしました。彼らが準備した武器・弾薬や日本人有志を積んだ船（布引丸）は、明治32年（1899年）7月に長崎港から出航しましたが、暴風雨によって東シナ海で沈没してしまいました（布引丸事件）。



フィリピンの伝統的な家屋



田植え（フィリピンの農村にて）



稲刈り（フィリピンの農村にて）



フィリピン ルソン島の人々

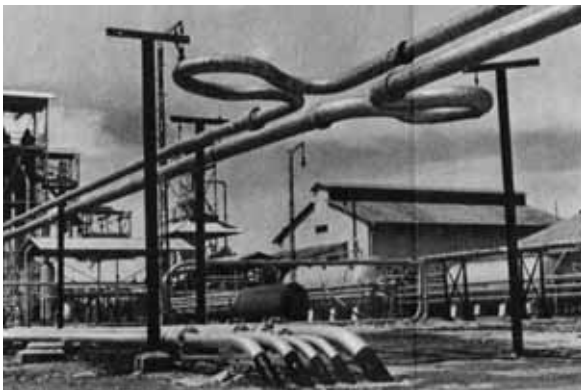
フィリピンでの戦争 1

—日本軍 フィリピンへ侵攻—

アメリカ合衆国の植民地だったフィリピンは、オランダ領東インド（現在のインドネシア）などで産出する石油などの天然資源を手中に収めたい日本軍にとって、立ちふさがる壁のような存在でした。

昭和16年（1941年）12月8日、ハワイの真珠湾攻撃と同日に、日本軍は航空機によるフィリピンのアメリカ軍基地への奇襲攻撃を成功させました。日本軍は約6万5千人の兵力でルソン島やミンダナオ島に進攻し、同年12月22日には、滋賀県出身の多くの兵士が配属された陸軍第16師団を主力とする部隊が、ルソン島のリングエン湾やラモン湾から上陸します。昭和17年（1942年）1月にはマニラを占領し、バターン半島やコレヒドール島での戦闘を経て、同年6月9日にコレヒドール島のアメリカ軍が降伏しました。

日本はフィリピン全土の制圧を宣言しましたが、実際には、フィリピン各地で日本軍の占領・支配に抵抗する住民が、オーストラリアにいるアメリカ軍と連絡をとりながら、ゲリラ作戦などで抵抗運動を続けました。その結果、地域の治安維持活動に動員された日本兵とフィリピン人民兵との戦闘によって、多くの犠牲者が出ました。



日本軍が占領した蘭印（オランダ領東インド）ボルネオ島の精油所

フィリピンでの戦争 2

—米軍の反攻・再上陸によって—

昭和19年（1944年）10月20日、フィリピン奪還を目指すアメリカ軍は、フィリピン中部のレイテ島への上陸を開始します。日本軍は、海軍に残された艦船を結集してレイテ島周辺での作戦行動を行うとともに、多数の陸軍部隊の派遣や新たに編成した神風特別攻撃隊によって、アメリカ軍の封じ込め・撃退を試みました。しかし、制空権を握り、物量に勝るアメリカ軍の攻撃によって、レイテ沖海戦で主力艦船のほとんどを失うなど、敗退を重ねます。

日本軍がルソン島北部の山岳地帯に籠り、抗戦を続ける中、アメリカ軍はネグロス島やミンダナオ島などの島々にも戦線を拡大し、フィリピン各地で日本軍を敗走させていきました。山岳地帯に籠ってゲリラ作戦を続けた日本兵は飢えに苦しみ、戦死者よりも餓死や病死者の方が多かったようです。

昭和20年（1945年）8月15日に、日本は無条件降伏を受け入れ、山下奉文第14方面軍司令官も山岳地帯を出て9月3日に降伏しますが、その後も終戦を知らずに敗走を続ける日本軍部隊・兵士もいました。

昭和33年（1958年）に厚生省がまとめた資料には、フィリピンでの戦争に参加した日本軍兵士630,967人のうち、帰国できた人は115,200人だったと記されています。その後の調査によって、死者数などに変更が生じていますが、フィリピンへ送られた人のうち、おおむね8割前後、50万人以上の方が戦争の犠牲となったと考えられます。



ルソン島からミンドロ島へ向かう船

（昭和17年（1942年）頃）

フィリピンで戦った滋賀県出身の兵士たち

戦前の日本では、国民皆兵制度のもと、健康な男子は20歳になると兵役につくことが義務付けられていました。

滋賀県で徴兵された人々は、京都師管区（滋賀や京都などの新兵への教育・訓練を担当し、配属先を決める陸軍の組織）からそれぞれの部隊へ送られました。昭和16年（1941年）、京都師管区が編成・兵員補充を担当する第16師団がフィリピンを攻める主力部隊としてルソン島へ送られ、多くの滋賀県出身兵士がフィリピン各地で戦いました。

戦況が悪化した昭和19年（1944年）からは、フィリピンの多くの島々で激しい戦闘が繰り返され、10月には神風特別攻撃隊による特攻作戦も開始されて、多くの滋賀県出身者が犠牲になりました。激戦地として有名なレイテ島や、戦前から多くの日本人が暮らしていたミンダナオ島を中心に、フィリピンでの戦いの様子を見ていきます。

【体験談—「よい飛行機がない。」「日本も負けるかもわからん。」—】 脇坂 金五郎さん（東近江市）弟の寅夫さんがフィリピンのレイテ島沖で、昭和19年12月に特攻戦死されました。

弟の寅夫（大正15年生まれ）は、男兄弟4人の二男。寅年生まれやから寅夫や。小学校高等科を卒業して、昭和15年4月、東京に就職しとったが、脚気を患い、養生を兼ねて郷里に帰ってきよった。そのうちに大東亜戦争になって、家にいる寅夫に、役場から「海軍予科練習生に志願しては」という誘いが来るようになった。男兄弟が4人という家族構成も理由やろね。「寅夫君を予科練へ」という誘いが村長からも何度もあって、父は困とったが、「男やから、いずれ徴兵で出なあかん。同じことなら……」と根負けして、寅夫も「このまま、戦時下の東京に戻るくらいやったら」と予科練志願を承諾して、（茨城県）土浦の海軍航空隊（乙種飛行予科練生第一期）に入隊したんや。

休暇で帰ってくると、寅夫は「半年くらいで、飛行機に乗らんならん」と言うもった。速成で操縦士を養成する訓練方法やったんやね。

予科練から海軍航空隊に配属された寅夫は、その

後1泊2日の外泊許可をもらって、一度帰宅したことがあったが、「よい飛行機がない」「沖縄に応援に行けたけれど、沖縄もひどいもんや。火の海や」「日本も負けるかもわからん」などと言うもった。特攻出撃を控えて、家族と最後の面会の意味で帰郷したんやろね。そんな様子は全然見せへんかったけど。**脇坂さんは、特攻出撃のことをラジオで聞いたそうです。脇坂さんの家は、かつて精米業をしていたので昼間も電気が来ていたし、集落にたった1個というラジオがあったそうです。**

遺品は近江鉄道愛知川駅留めで送られ、脇坂さんが受け取りに行かれましたが、遺品といっても衣類少々があっただけで、これといった目ぼしいものは何ひとつなかったそうです。



ルソン島パンパンガ州 マバラカット東飛行場跡の看板



マバラカット東飛行場跡にある特攻兵士の像

爆装航空機による体当たり攻撃を行う「神風特別攻撃隊」は、昭和19年10月21日にルソン島のマバラカット飛行場から初出撃しました。現地には特攻兵士の像や看板が立てられています。



上：フィリピンの植田潔さんから届いた手紙とはがき
 右下：フィリピンの上原四郎さんから届いたはがき
 左下：大村権治良さんの戦死後に届いた慰問のはがき
 大村権治良さんは、既に7月14日にレイテ島で戦死され、はがきは手元には届きませんでした。



パナー：日本軍占領下のレイテ島
 昭和17年（1942年）7月頃のレイテ島タクロバン街の街並み
 レイテ島で戦死された大村権治良さんの埋葬地を示す写真
 「比律濱の景」

第2節 レイテ島では・・・ フィリピン最大の激戦地 レイテ島

アジア・太平洋戦争におけるフィリピン最大の激戦地として知られているレイテ島は、首都マニラがあるルソン島の東南に位置し、フィリピンで8番目に面積の広い島です。日本の島と比べれば、四国の半分ぐらいの大きさです。

昭和17年（1942年）にフィリピンを撤退したアメリカ軍は、昭和19年10月にフィリピン奪還のため、この島を上陸目標として、大規模な上陸作戦を決行します。日本軍は海軍に残された艦船を結集して作戦行動（レイテ沖海戦）を行うなど防衛に努めますが、10月24日には戦艦武蔵が沈没するなど多くの艦船を失います。すでに10月12日からの台湾沖航空戦で多くの航空機を失っていた日本軍に対して、物量に勝るアメリカ軍は制空権を握って有利に戦いを進め、地上戦でも日本軍を圧倒しました。

レイテ島には8万人余りの日本兵が投入されましたが、その大多数の方々の命が失われました。食料補給が絶えて飢えに苦しんだレイテ島での悲惨な戦いの様子は、フィリピン戦に従軍した小説家の大岡昇平が書いた「レイテ戦記」などの文学作品にも描かれています。



右：戦争関係図書（大岡昇平著『レイテ戦記』）
 左：レイテ島の万木清良さんから届いたはがき
 このはがきは昭和19年9月15日付けで、10月23日に戦死された万木清良さんからの最後の便りでした。10月20日にアメリカ軍の上陸作戦が始まると、フィリピンから内地の家族へ手紙を送れるような状況ではなくなってしまいます。



戦場

【体験談—生きてたら不思議なくらいや—】

吉居 靖夫さん（大阪市）

ルソン島からレイテ島へ渡り、生き延びてオーストラリアの収容所で終戦を迎えられました。

（昭和19年に）レイテへ渡ってから、しばらくは平和やった。

（レイテ島での艦砲射撃は）そんなもん滅茶苦茶ですわ。逃げるだけで精一杯。あの艦隊がね、レイテ湾を埋め尽くしたときは、もうこれはあかん。あれまともに見たら、こらあかん、生きて帰れんと思うたわ。あんだけの船、大阪湾に並べたら大阪湾一杯になりますわ。

もう、皆ばたばた、ばたばた死んでいくにやね。生きてたら不思議なくらいや。全部飛行機で爆弾を落とすよ。ものすごいものですわ。山が崩れるほど撃ちよる。結局反対側、西側の方へ逃げるわけやな。

山の中にゲリラがいてね、アメリカ軍の自動小銃もつとーる。（ゲリラはフィリピン人ですが、）アメリカ軍の手先ですわな。食べ物は何にもなし。（昭和19年）10月から（昭和20年）2月までね、よう持ったなと思てます。雑草食うたり、カニやヘビ、カエル。オタマジャクシは、苦うて食べられんかったですけど。

（投降したのは）昭和20年2月9日のことや。栄養失調で、僕も目方が32キロぐらいしかなかった。だからね、歩けんにやね。そしたら（フィリピン人が）負ぶつたろゆうてね、向こうの兵隊まで連れて行ってくれた。

収容所で酷い目にあつたということは、全然なかった。人間として取り扱ってくれたね。一番よかったん違いますか。オーストラリア（の収容所）が。

終戦の時は、ラジオを持って来やはったんや。日本負けたんや言うて、ラジオ持ってきた。玉音放送。わしら聞きませんでした。みんな分かてるんです。ニューギニアでも、わしらフィリピンでも、みな負けましたわな。負けるの当たり前ですわな。



レイテ島周辺地図（大東亜地図体系『フィリピン群島圖』（部分）博多成象堂発行）



レイテ島で戦った方々を偲ぶ品



フィリピンの山道を行くトラック

【体験談-1 発撃したら 100 発ぐらい返ってきよる一】 上野 正雄さん (大津市)
レイテ島に配属された上野さんは、レイテ島からサマール島へ逃避行を続けました。

マニラに行って、ルソン島のシボコットウという部落に行ったんや。ほで、その隣にナガというところにうちの大隊本部があった。シボコットウからナガへ行って、ナガからレガスピー。そこから、各地へ討伐に出ったんやが、ほんで半年ほどたって、命令が出てレイテに行った。

昭和 17 年いうたら、まだ勝ち戦やからねえ。18 年の頃に、ちょっと悪なってきたから。(台湾の) 高雄の沖で沈没したとかねえ。ほで、レイテで壕を掘ってねえ、第一線の玉砕を待ったわけです。

レイテの玉砕の前にね、イギリス戦艦とアメリカ戦艦がね、サマール島の向こうのね、ホモンハン島いう小さい無人島があるねん。そこへ 127 隻の戦艦が来ったんです。レイテを攻撃するのにね。

(日本軍は 6 万人いたが) そんなもん、1 発撃ったらね、100 発ぐらい返ってきよる。日本の飛行機が飛んだかて、2 機か 4 機ぐらいしかない。向こうはね、20 機がね、ブウア〜と来よるさかいね、とても抵抗でけへん。武器が、もうたいそうなもんが

ないもん。

私は 3 中隊やったけどね、2 中隊の兵隊がね、サマール島に駐屯しとったんや。サマール島のギワンに 2 中隊が、ホモンハンに来てる敵の戦闘部隊としておった。ほんで、私らは、(レイテ島の) タクロバン、ここが連隊本部やから、そこから、ずうっと 6 里 (約 24km) ほど離れたところに待機しとってんけど、そんなん、危のうてかなん、そんなん、やってられんちゆうてサマール島に行った。

レイテとサマール島の間、すぐ渡れるねん。狭い狭いね。100 メートルほどの海岸を、狭いところがあるんや。レイテからサマール島に渡るのに、船に乗って。けど、泳いでも渡れるぐらいのとこやけど。ほんで渡って、同じ連隊の 1 中隊から 7 中隊までギワンに行ったんです。けど、ギワンまで行こうと思ったら、その道中で、やられて攻撃くろてね。ほんで、青木少尉やらが死んだんです。こらあ、どうもならん言うて、山へ入って、やっとギワンにたどり着いたんです。

ほんで、ギワンにたどり着いたら、2 中隊の中隊長が、ああ良かったちゆうてね。ほんで、会うて 3 日目や。また、襲撃くろてね、2 中隊が全滅したんや。ほんで、わしらは、またバァンと山に逃げてね。ほんで、ずっとサマール島を 1 年半逃げて廻ったんや。

敵はその後、どんどん上陸して。敵のほうがかんり優勢ですさかいな、もう逃げるよりしょうない。ほんなこと言うと恥ずかしい話やけどよ。



戦闘によって破壊されたフィリピンの街



フィリピンでの戦死者数

防衛庁防衛研修所戦史室の『戦史叢書 捷号陸軍作戦2 ルソン決戦』（昭和47年11月、朝雲新聞社発行）をもとに作成。下図は『大東亜地図体系 フィリピン群島図』（昭和19年3月、博多成象堂発行）を使用

【体験談一運、不運の分かれ目でしたー】

北岸 正次さん（東近江市）

北岸さんは昭和19年7月に、レイテ島からセレベス島へ急に移動になって命拾いされました。

昭和17年3月1日、私は一年早く兵役を志願した。「お国に尽くすには、軍属ではもう一つ生ぬるい」という気持ちがあったから。もちろん航空隊に入隊したいと思っただが、検査の時、私が八日市の出身と分かって、第8航空教育隊への入隊が決まったんや。

昭和19年6月に動員命令があつて、フィリピンに渡ることになり、7月13日にレイテ島のアンヘレス飛行場に到着して、しばらく駐留しとった。

セレベス島（オランダ領東インド）のメナドの飛行場へ、飛行30戦隊から先発隊が30名向かうことになつたが、これ、もうほんまの第一線ですん

にやわ、飛行隊としては。ところが私は命令ないもんやから、残留者と共に飛行場へ見送りに行ったんよ。戦隊長も自動車で見送りに来て、私の顔を見るなり「お前は、どうして行かんのだ」と言われて、「はい、命令がありません」と答えると、「俺が行くのに、その機を誰が整備するのか。行け!」ということで、さっそく日用品や拳銃、母の写真などを荷物に詰めて、急きよ一緒に出発したんよ。30名が31名になったわけやね。

日用品と着替えを持って、申告に行ったら、もうプロペラ回るとるんです。輸送機がないもんやから重爆機が来る。そこへ30名乗って。そこは、運・不運、私の分かれめですにや（笑）。

昭和19年10月8日、わが飛行場に始めて米軍機の空襲を受けたんやが、真っ青な空に、機体がキラリと光ったかと思たら、もうニッパヤシの葉がプシュプシュと音をたてとった。P38（アメリカロッキード社製の戦闘機）の空襲と機銃掃射やった。怖かった。落下傘爆弾も怖かったわ。ヤシの葉に引っかかるとるが、いつ爆発するか分からんからね。

アメリカ軍は、飛行場の滑走路を徹底的に破壊しよった。1トン爆弾が投下されるとドーンと土煙が巻き上がって、直径100メートル近い大きな穴が空いた。サイパン陥落後は、日本の爆弾を搭載しているアメリカ軍機もあったが、日本製の爆弾は鋼質で、人馬殺傷力が強かったんよ。上空をどんどんB24（アメリカ軍の重爆撃機）が通過して、皆、レイテに向かっとった。



上原四郎さんに贈られた寄せ書き日の丸・千人針



左：上口仙太郎さんの軍服（軍服上衣・袴、軍帽、赤たすき）
陸軍の軍装と出征の時に着用した赤たすきです。

右：寄せ書き日の丸

誰に贈られた物なのかは不明です。



大村権治良さんの遺品

左：弾痕（写真の矢印部分）付き軍袴

右：寄せ書き日の丸



大村権治良さんの戦闘帽・雑嚢

第3節 在留邦人と戦争

—ミンダナオ島の民間人が体験した戦争—



ミンダナオ島で慰霊を行う遺族たち（平成4年撮影）

多くの日本人が暮らしていたミンダナオ島では

ミンダナオ島は、フィリピン諸島の南部に位置し、ルソン島に次いで大きな島です。北海道より少し広いくらいの面積があり、フィリピン最高峰のアポ山（標高3144m）をはじめとする山々が連なっていて、島のほとんどを熱帯雨林がおおっています。

ミンダナオ島では、戦前から日本人によるマニラ麻などの栽培が盛んで、ダバオには2万人近い日本人が生活していました。戦争の激化に伴い、ミンダナオ島で暮らしていた日本人男性も軍に召集されていきます。

昭和20年（1945年）になると、アメリカ軍はミンダナオ島にも攻撃を加え、上陸してきます。すでに多くの艦船や航空機を失っていた日本軍に対して、アメリカ軍は圧倒的な兵力で攻撃を続け、日本軍は敗走を重ねることになります。

この島での戦争の様子を、戦争が始まる前にミンダナオ島で生まれて生活していた大城昇さんの体験談を中心に見ていきます。



ミンダナオ島のダバオ市街略図

コラム:フィリピンの特産品「マニラ麻」

フィリピン原産のマニラ麻は、東南アジアの熱帯地域などで栽培されている多年草です。同じバショウ属のバナナに似た姿をしています。葉から強くて弾力のある繊維が採れ、船舶用のロープなどに多く利用されましたが、現在では人造繊維の使用が増えて、栽培量が減少しています。

一定した収穫期が無い植物であるため、年間の降雨量が均等で、台風の経路から外れているミンダナオ島のダバオ州が栽培適地とされ、アジア・太平洋戦争前には日本人移民などによる栽培が盛んでした。ダバオのマニラ麻栽培の約8割を日本人が担っていたとされています。日本人移民の中で、もっとも多かったのは沖縄県出身の方でした。



当時のマニラ麻栽培の様子

(『マニラ麻栽培概要』(拓務省拓務局発行、1939年)による。)

【体験談—戦争が始まって、日本人はみんな監禁されました—】 大城 昇さん(米原市)
父親がミンダナオ島で麻栽培をしていた大城さんは、現地で開戦を迎えました。

私は昭和7年生まれやが、父らは、もう10年ほど前に行っったんちゃうかな。そうでないと、わしらを迎えられへんわ。開墾して、麻畑にして。なかなか大変やっったんやと思うで、うちのお父さんは、麻を植えてから、種植えてから。ほいで、製品にしたんかな、10年ほど経ってから。ほな、これはいけるというもんで、うちのお母さん呼び寄せたらしいわ、どうも。一つの開拓団みたいなもんやね。そういうふうな、奨励しとったんやな、日本政府も。

アメリカの支配下のときは、日本人もええ生活し

とったんや。当時は、食べ物、わしらは作っとったで。コメやらトウモロコシやら作っとったでな。食べ物にはもう、野菜もんは不自由せんのか。トマトでもな。キュウリ、ウリでね、まあ。天然でね、できてますんやで。

それで小学校3年のときに大東亜戦(アジア・太平洋戦争)が起きたんやな、(昭和)16年12月8日に。それからずうっとワガンいうとこでね、監禁されとったんですわ。日本人は全部。戦争起きたもんやさかい、日本人いうもん、みんなもう、一つの学校にやな、わしらの学校にみんな監禁されたわけなんや。親子、日本人たるものはみんな。小学校の中で、食事を全部ね。食事いうても、家で食べるみたいなええもんじゃないわね。にぎり飯やな。寝る場所は学校。教室。もう学校、教育はないですよ。監禁されてるんやな。学校利用して、もう、その日からもう勉強なしや。

(昭和16年)12月20日に日本軍が上陸してきたんや。日本の兵隊さん初めて見た。ほれがまたひどいもんや、攻撃が。夜中にな、ほんまの、ダーンッ、ダダンッ。もう、ダダン音はしとったけどね。日本軍が入ってきて、それが3年間ぐらいかな。昭和20年まで日本軍の支配下になっったんや。

【体験談—日本の飛行機は、皆落ちて行きよった—】

大城 昇さん(米原市)

大城さんはミンダナオ島で見たアメリカ軍との空中戦の様子を語っています。

わしが住んでたこの港、ダリアオンいうとこな。(アメリカ軍の飛行機に)あの辺爆撃されてね。

ああ、見える見えるいうて。ほしたら今度はもう上で、日本の飛行機とな、向こうの飛行機と、空中戦や。空中戦やとるけどね、もう情けなかったわ。最初はよかったんやで。日本の飛行機はな、優勢やっったんや。向こうの飛行機逃げて行きよったんやけど。もう、そやな、ひと月も経たんうちにな、あらもう、何かこうエンジンってな、(日本は)ガソリンが代用品使うとるんか知らんけど、速度が落ちてきたんやな。いくら飛行機がようても。向こうの、燃料がええがな。ほら日本の飛行機は皆落ちて行きよった。空中戦でバーッと。もう無茶苦茶や、もう。

「ああ、ああ」いうて。「ああ、日本またやられた。またやられた」。最初よかったんやけどな。ああ、やっぱり日本は勝つ見込みがあると思ったけど、あれ見てからな、ああ、こりゃあかん日本はと。飛行機の速度が違うんや。ドーンと。すぐ追いついてしまよるにや、日本の飛行機に。



水牛に乗るフィリピンの人々

【体験談—兵隊に行ってた父さんは栄養失調で骨と皮や—】 大城 昇さん(米原市)

アメリカ軍の攻撃で山の中へ逃げた大城さんは、父親と再会しました。

(昭和)20年3月の卒業式のときにアメリカ軍が艦砲射撃しよったんや。ボンボンボンボンボンと、行事しよったら。もう艦砲射撃もひどいもんよ、ボンボンボンボン撃ってね。それでも卒業式どころじゃないですわ、もう。避難命令が出たんですわ。日本人たるものは皆。

どんどん逃げて来て、タモガンいうとこへ逃げたんですわ。もう山の中へ。フィリピン人から日本人から、何万人から人間が逃げ込んだんや。一緒に逃げたのは母さんと、弟と、妹4人ですな。皆で6人。その時分はもう、お父さんらは皆、兵隊に取られてね。もう現地召集で。母親も大変やったやろ。

やっぱり着替えやら食料やらあるでしょう。これに子ども、妹乗せんならんしね。弟が牛にね、わしは馬や。小学校で馬に乗って行っとったんやね。今から、ようそんなことしたなと思うて。弟が4年生やわな、4年生で水牛にね。あそこ、もう牛いうたら水牛ばっかりですわ。それに背中に皆くくりつけてね、荷物を。食べるもんやら着替えが、それ皆乗

せて。それで移動ですわ。

わしは、食料な、そういうもん確保せなあかんでな。塩だけはな、ちゃんと持っとらなあかんで。米やら豆な、大豆とか、ああいうの持っとったけどな。

「もう、塩だけは絶対、なにしといてや。」って母親にしよっちゅう言われとった。ほれって6年生のときやで、ほんまに。

逃亡しとったんやけど、いろいろあったんやけど、20キロ辺りで(兵隊に行っていた)お父さんが帰って来たんや。もう栄養失調で、骨と皮や。わしらを探しとったちゅうんや。わしらを探すのにな、相当苦労したらしいわ。どこにおるか、今こそ携帯電話でどうたらこうたらあるけど、当時はね、人の話を聞いて、どの辺でどういう人が、「なあ、こういうもん知らんか」とかな、わしらの年代ぐらいの子を見たらな、そらやっぱり、たまらなんだやろな。そんで、やっと会えたでよ。栄養失調で、探しに来よったんや。わし、おやじと思わなんだんや。痩せてもうて、もう顔の相もね、もう昔のイメージが全然ないんや。

親父もう、使いもんにならんので。ついて歩くだけやで。こっちが見たらなあかんねん。もう栄養失調で、何かもう情けなかった。

【体験談—ミンダナオ島では終戦後も戦ってました—】 大城 昇さん(米原市)
終戦後に投降した大城さん一家は収容所へ送られることになります。

逃げて帰って来て収容所へ行くまでにな、向こうの現地人のもんに乗らな。それがな、何日かいうたって、そんなもんね。あれ7月とか言うとるけどな、分からへんで。そんなもん、カレンダーも何もないとこでね、密林の中へ入ってきてやで。何日山中におったか分からへんで。そらそやろな。

8月過ぎててもな、戦争、ボンボンとやとったんやで。8月15日に終わってるのに。それから殺されてるの、ようけおるんやで、山中で。山の中で銃撃戦やとんやで、かなんわ。日本軍も知らんのやな。信用しよらんのや。終戦、終わった言うけどもな、信用しよらんのやな。戦とるんや、向こうの現地

人と。だから向こうの現地人も戦うわな。向こうは、やっぱり守らなあかんでね。

当然、警備やっとするんやけど。その間に、日本軍、やっぱりああいう戦争から逃れた兵隊が入ってきて食料をあさるんやろな。そこらの民家の。また、これは危ないわな。銃持ってるから。それを討伐するために向こうの現地人の、また、やっとするわけや。

あれ、終戦言うてるけど、わしらも手え上げて、その人らに送ってもらうのな、大分あとちゃうかな。もう8月の、9月に入っとったんちゃうかな、わし思うけど。分からへん。



左：横田清一さんの奉公袋、
右：堀池榮一さん著『ミンダナオ島敗走記』

【体験談—逃げ回るために南方へ渡ったようなもんや—】

堀池 榮一さん（草津市）

昭和19年8月に上陸されたミンダナオ島での体験について、次のように語っておられます。

私は自動車隊やったから、戦争はしてへん。ジャングルの中を逃げ回るために南方に渡ったようなもんや。

（ミンダナオ島には）麻の栽培で日本人はようけおったんや。民間の人や。その人らが、一番気の毒やわ。現地人でもなあ、邦人（日本人）でもなあ、生活を楽しいやってるのによ、踏み込まれてよ、家は焼かれてよ、物は盗られてよ、現地の人には怒るはずや。そらあ、まあ、戦争に巻き込まれたらそうなるがな。

ほんでなあ、土民（※現地の人に対する蔑称）の牛を盗んできよったやつがおるんや。ほで、返しに行ったんや。ピアノまで盗んできたやつもおる。それも返しに行きよったわ。

19年の9月に大空襲におうたんや。日本の飛行機はあんまり飛ばへんのに、今日はようけ飛んどんなあ、と言うとったんや。ほんだらな、（アメリカ軍の）航空母艦から来とったんや。ほんでな、あわてて機材の倉庫に入ったんや。ほんだら、ドンドン撃ちよってなあ、大きな穴が開いたんや。それが9月の9日や。

もう（昭和）20年にもなったら、自動車って、あらへんがな。ほと、最後は背負い子というて、二宮金次郎みたいに、背負い子しょって山の中に運ぶんや。ほんで、20年6月23日に塩を背負って歩いてたときに、アメリカ軍の迫撃砲弾が落下してきて、右手の甲にあたったんや。もう焼き火箸が突き刺さったように痛かった。傷は大きくて、白い骨が見えてた。

陣地に戻って、衛生兵にガーゼを巻いてもらい、止血用の注射を打ってもらった。このとき、ヘソの下に砲弾の破片を受けた兵隊がいたんやが、リンパ腺が腫れて、そいつは歩けんようになってしもうた。陣地を撤収してジャングルに逃げ込むとき、その兵隊は放置されたままやったが、さぞかし、みんなを恨みながら死んだことやろう。



外邦図：ミンダナオ島（測量機関：比律賓交通部）

右上に㊦と書かれているように、地図は㊦情報でした。地名が英語表記なのは、フィリピンの地図を複製したためと思われる。

コラム: 日本陸軍が作成した外邦図

海外で植民地などの支配を行うためには、現地の地図を作成して、地形などを正しく把握することが大切でした。このような目的のために、日本陸軍参謀本部の陸地測量部が、日本の内地以外について作成した地図を外邦図と呼びます。作成するといっても、すでに作られていた外国の地図を複製した場合も少なくありませんでした。なお、海軍省水路部によって作成・管理されていた地図も含めて、外邦図と呼ばれることもあります。

アジア・太平洋戦争終結後、参謀本部に保管されていた地図が複数の大学などに分配されて、学術資料として残されています。中でも東北大学の所蔵点数が最も多く、約7万枚、約1万2千種類の地図が所蔵されています。今回の展示では、東北大学理学部地理学教室のご協力で、フィリピンのミンダナオ島やホロ島の地図を展示しています。



野村和男さんが使っていた軍服上衣・軍靴・ゲートル

【体験談—こんなことでは、いつ死ぬか分からんなんて思ってました—】 野村 和男さん（東近江市）
昭和19年（1944年）にマニラからミンダナオ島のカガヤンに上陸して飛行場建設のために働いてお

られましたが、アメリカ軍が上陸したため山中での生活を送ることになりました。

敵はその後、どんどん上陸して。敵のほうがかなり優勢ですさかいな、もう逃げるよりしょうない。ほんなこと言うと恥ずかしい話やけどよ。ほれから、だんだんだんだん奥へ、毎日、入りますやろ。南のほうへ下がって行って、海辺のできるだけ近いところへ、行かんことには塩気がないやろ。

まあ、原住民が、トウモロコシやらサツマイモをな、植えとかはるにや。ほんでわしらは、ほれ、百姓をしてたさかいに、サツマイモやらトウモロコシやらよう知つとるさかいな。ほんでほこへな、まあちょっと、取りに行ったりしましたけどな。ほれで、生かじりしたりな。もうこら、こんなことでは、いつ死ぬやら分からんなんて思ってましてん。まあ、ほうして、ほういうな暮らしを、ほんでも半年ほどやってますんにやわ。

ほいたら、今度は何や、もう、戦争が終わったていうことを聞きましてん。戦争が終わったさかいに、アメリカ軍が、もう早う下りてこいと言うて、おまえらには罪がないさかいに、下りてきたら、食料から何もかも与えるというて、うまいこと書いたピラを飛行機から、ヘリコプターで、ばあつと撒いたらしいな。ほんで、もう部隊はもうほれに信用をしまして、下りよった。

ほんな、こうして思いますのは、あの（レバンダ島の）小野田（寛郎）さんちゅう人。あの人は軍人の精神があつたんやなと思うな。ほんだけ言われても、ほれを信用しやらへんだで。みんなは、ほんなことでもうとにかく早いとこ助けてもらわんことには（笑）。



小野田寛郎さん関係図書

コラム:ルバング島で発見された日本兵

ルバング島は、ルソン島の南西、ミンドロ島との間に位置する島です。昭和49年(1974年)、このルバング島に1人で潜伏していた日本兵が帰国して、大きなニュースになりました。

この最後の日本兵、小野田寛郎少尉は、昭和19年(1944年)12月にルバング島に着任された和歌山県出身の方です。

昭和20年2月にアメリカ軍が上陸すると、島内の日本兵たちは山間部に逃げ込みましたが、8月の戦争終結後も小野田少尉と部下たちの計4人は、潜伏してゲリラ活動を続けました。部下たちが死亡するなどして、最後は小野田さん1人になり、昭和49年3月、元上官からの任務解除命令を受けて、小野田さんも降伏しました。終戦から29年が経過していました。



目片嘉一さんが使っていた軍服上・下、軍帽、軍靴、飯盒



ミンダナオ島で戦った方々を偲ぶ品
(青木勸四郎さんの出征幟など)



西澤久三さんに贈られた寄せ書き日の丸
青木勸四郎さんの豊満大社鉢巻、軍用水筒、慰問袋



中川与一さんの軍服上衣

第4節 その他の島では



【体験談—山の中を逃げて歩きました—】

Fさん（長浜市）

戦争末期のネグロス島での様子を語っています。

（昭和）20年の正月やなあ。この島、今の日本の航空基地やったもんやさかい、日本の兵隊が仰山おるちゅう事で、（アメリカ軍は攻撃を）後回しにしましたんや。ほんで全部やってきてから、ここへやって来ましたんや。ここに上陸して、ダア一と攻めてきましたさかい。で、私ら、山の中へ逃げましたんや。20年の3月25日頃かな？

ほんでに、自分ら（日本軍）が攻めた時に、アメリカの兵隊は山に逃げて、山の中で生活しとったの。ほて、わたしら山の中に、入れ替わりで逃げ込んだら、ほらアメリカの設備はよろしいわいな。山の中にな、ジーゼル（エンジン）やら据えて。ほて、無線で交信してますし。向こうは山の中へ入っても、いろいろ補給したりなんかしてますさかい、豊富ですけど。日本は補給も何にもあらしませんし。もう、そこらのとって食うてな、しょうがない。

向こうはトウモロコシやら作るときよる、あれを盗りに行った。サツマイモもな。伊吹さんみたいな高い山があって、食べ物が有りそうなとこにダア一と行って。見つけたら盗って。袋へ詰めて、負いねて、ダアと逃げるが。うだうだ何時までも探していると、ダッダ、ダッダ、ダッダ、ダア、撃ってきよるがな。

ほらもう、現地人がおるようなとこまで行かな、

食うものあらへんがな。家の横にトウモロコシを収穫して、干しときよる。ほれを盗りに行くんや。命がけや。

3月に山に入ったんや。ずっとです。5月頃になったら、もう（食べる）米がないようになったんや。それからほんでもう、バラバラで皆、（食べ物）を探しに行かなしょうがない。

山の中、逃げて歩きましたんや。ほて、8月15日か。ダア一とピラ撒きよったわいな。「（大日本）帝国は連合軍に対して無条件降伏したさかい。諸君は無益な抵抗を止めて山を降りてきたまえ」ちゅうて。デーと撒きよった。ほれまで低いとこ飛んどった飛行機が、もう高いとこを飛ぶようになったし、やっぱり負けたんかなと思たら、日本の参謀と将校の人が「日本負けたさかい、もう抵抗は止めよ」言うて歩かよった。（司令官の）山下閣下が9月2日に降伏、調印しやはるさかい、で、わたらの部隊も山を9月の2日に降りるさかい、何処どこへ集合せいで言うてな。連絡がありまして、昭和20年の9月2日に山を降りました。



ネグロス島での天長節祝賀行事（昭和17年？）

【体験談—事務所でも自爆する覚悟で手榴弾を持っていた—】

寺村 栄一郎さん（甲賀市）

フィリピンと台湾の間にあるバタン島で事務作業に従事された体験談です。

ほんとはサイパンに行くはずやったけど、状況が悪いということで、フィリピンのバタン島に行くこ

とになったんや。それが（昭和19年）7月30日やった。

海軍に護衛されて（フィリピンに渡り）、バタン島ではヤシ畑の中に事務所をつくって、隧道（トンネル）を掘って。皆が掘ってくれるんや。なんせ、何もすることがないがな。ほんで、事務所ができて、ようやく入って。地上にあったら、爆撃されてしまうがな。山の斜面にや。地面の下やないんや。山の横や。そこに電気を通して。兵隊には、電気屋もいろいろありますからな。

食べ物は糧秣（兵員用の食料と軍馬用の秣）で持って行ってるがな。事務所もそういうものを持ってんねん。穴掘って、糧秣を入れておく。半年分ぐらいは持って行ってる。事務所はそれを保管してて、分配せんならん。そういう仕事が事務所の仕事や。食料の分配が一番大変な仕事やった。住民の物を盗ってたのではあかんからな。住民に喜んでもらうのが兵隊の仕事やから。けどな、逆に盗ってきよるやつもおるんや。住民を困らせるやつがあるんや。銭出して買うてくるやつはええねんけど。糧秣は終戦のときまで、確保しとったな。お腹一杯になるほどは、あたらなんだけど、雑炊にするぐらいはずっとあった。

（バタン島には）飛行場があったんやが、飛行場はもうやられてしもてあかんかったけどな、もうようさん飛行機がつぶれてましたけどな、そこへ行きましてん。で、糧秣庫をつくって、今まで船に積んであった糧秣を船から下ろして確保したんや。それが私らきつかったん。

爆撃はあったけど、横穴の中に入れてるさかい。それを事務所の給与係というのがいてて、そこが糧秣の供給をしたんや。私らは人事のことばかりやった。給与のことは給与係がやってたから。

編成割り当てとかは、私らがやらなあかんけどな、人の割り振りはな。兵器は兵器係というのがいてた。被服は被服係、そういう係があった。事務所のなかでそういう風に分かれてたんや。私は人事と功績と軍事機密。まあ、手がら立てたりな。ほんでまた病気で死んだり、怪我して死んだり、機銃掃射がよかったから、撃たれて戦死する人もあった。

わしは事務所におってもやな、自爆する覚悟で手

榴弾を持っていた。自分の体より大事な資料を預かってんねんやから。手榴弾だけはな、許可がもらえて、資料と一緒に自爆するためや。もう取られたらしまいやから。公用行李と一緒に自爆や。もう一番大事なものやから。取られたらみんな分かっってしまう。

戦死した人がいると、その情報を本部に送るんやけど、私ら送るものにもあらへん。自分で持ってんねん、遺骨も。もう、どこも連絡がでけへん状態やった。



直木清さんがパラシュートを使用して作った手帳

フガ島で従軍された父の清さんが捕虜収容所で使用したものだそうです。



直木清さんの手帳の中身（抜粋）

【体験談—もう暗号全部、解読しときよるんや—】

北川 喜一郎さん（愛荘町）

ルソン島の北にあるフガ島で通信兵として従軍された体験談です。

昭和19年4月10日に現役入隊。もうこれ最後の、日本軍最後の現役行きや。敦賀の歩兵第19連隊に入隊して初年兵教育受けて。で、10月に、もう（福岡県の）門司を出たんやわ。10月2日にフィリピン上陸したんやでな。フガ島へ上陸。ピラピセンターちゅうとこに上陸したんやわ。

食うもんあらへんにゃ、こんな島やで。上陸したきり、もうあと補給なんにもないにゃで。ほのかわり、ここにはな、ぎょうさん、牛でも200か300あったやろな。馬も150ほどあった。放牧や。はじめ金払うて、牛や馬、金払うてな、それで肉炊いて食わしてくれよったけど、もう、だんだんだんだん少のうなってくるやろ、食いよるで。ほしたらもうみんなが、兵隊が食うもんもないさかい、もう思い思いに牛やら馬殺して食いよったで、もう数が減ってしもうたんや。

ほんでしまいには、もうほんま、肉に米粒が付いたるぐらいの程度やったわ。毎日ほれやでな。もう、ほら腹は減るし、食うもんはないしな。こんな島やさかいね。（この肉は）あんまりうまいことなかった。何もな、醤油や水やら砂糖やらって、あらへんにゃで。海水くんできてやな、泥んこは、ほんで炊きとおしよるにゃ。ほと、ほれは沈んでしもうて。また海水入れて炊きよったら、塩が今度残るやん。ほれで味付けやでな。

通信は、はじめのうちは、旅団から連絡があったけどな、しまい目には電池がないようになってしもうたんや。ほったら電池送れって連絡しよったらな、アメリカ軍の飛行機が来てよ、「日本の兵隊さんの皆さん、電池がないでお困りやろうさかい、電池落とします」ちゅうて、飛行機から電池落とすよるにゃ。

（全部暗号で送ってるが）もう暗号全部、解読しときよるんや。あんなもんあかへんわな。もうしみに、業を沸かして（※腹を立てて）、ええやろう、日本語で打って旅団に送りよったら、旅団からお叱り受けよって。まるきり、全部もう皆、暗号解読しときよるにゃ、だからもう。ようあんなもん解読し

よったと思う。

ほやけど、この無線もな、危なかったんや。電波が通るやろ？ そうするとな、電波はもう探知しよるでな、爆撃食らうにゃ。爆音がしたら、「もう通信やめ。退け、退け」ちゅうて。ほいで、飛行機が行ってしもたらまた。もうほら電波探知機がよう発達しとったでな、ほらあかんわ。日本はな、電波探知機ってあらへんのに。

赤外線カメラでジャングルの中、写しよるにゃわ。低空飛行で。単発の飛行機でな、グルーっとゆっくり舞いよるにゃ。「おーい、艦載機来よった。危ないでよー」いうて。ほと、ほの間に電波出しよるとな、もう兵隊がベターっと腹ばいで寝てるまで写つたにゃ、写真。ほれをわしら、終戦後、アメリカ軍が見せてくれよったけどな。「これ、ジャパン兵隊や」いうて。ほんなんジャングルの中でいても、あかへんにゃ。



通信業務（気象観測隊）

【体験談—となりの船が魚雷を受けて、2~3分のうちに沈んでいった—】 江畑 太久二さん（長浜市）

昭和18年5月に3ヵ月の教育召集で入隊して、19年6月ころフィリピン・バブヤン諸島のフガ島というところに派遣されたんやが、派遣された8隻のうち4隻がバシー海峡（台湾とフィリピンの間にある海峡）でアメリカ軍に沈められたんよ。一隻に3000人くらいが乗とった。

畳1枚に4~5人くらいの混みようで、ろくに身体を横にして寝ることもできんかった。船底には軍

馬が乗っと思ったわ。潜水艦に攻撃されそうやと聞いて、皆が甲板に出て立っと思ったんやが、隣の船が魚雷を受けて2~3分のうちに、尻から真っ逆様になって沈んで行った。あっという間のことで、その船からは助けを求める人もなかったわ。

フガ島の守備隊は400人で、壕を掘ったり、食べ物を探しに行ったりしとった。攻撃がなかったからよかったが、マラリアと栄養失調でたくさんの人が死んでいったわ。自分もマラリアに2回かかったんよ。

終戦のニュースは、1ヵ月あとの9月中頃に山の中で聞いたが、五分五分くらいの対戦になっと思ってたから驚いた。出征するとき、叔父が「この戦いは負けるに決まっているから、隠れている方がよい」と言うてた言葉を思い出すわ。

フガ島におったのは、わずか1年やったが、10年も15年もおったような気がするで。

千人針は、面会のとときに叔母が持ってきてくれたもので、腹に巻いとったが、シラミが湧いて困ったわ。

戦争末期には、この江畑さんの体験談のように、多くの船が敵の潜水艦等に攻撃されて沈没し、目的地に到達する前に命を落とした兵隊が多数いました。



江畑太久二さんが使っていた千人針と一等兵記章



日本軍の輸送船団



フィリピンへ向かう輸送船団 (昭和16年(1941年)12月)

【体験談—慰霊の旅もここまでは行けへんね—】

永谷 芳昭さん (大津市)

父の時治さん (大正2年生まれ) はフィリピンを転戦され、昭和20年4月10日にホロ島で戦死されました。

いったん除隊して在郷軍人会に入っはるから、昭和15年のときに除隊したんやと思いますね。それからまた18年か19年ぐらいに赤紙が来て、それでフィリピン行ったんやね。

母 (時治さんの妻) の言うのにはね、革靴履いて出て行くときにね、泣いてたっというて母言うてましたんでね。ほんで、ある程度そのときはフィリピンへ行くことは分かってたんで、「もう死ぬことは本人は分かってたんやないかな」っというて、母はそんなふうに言うてましたですね。せやからある程度覚悟して行ってるから。そんな、「気の強い人やで、泣かへるような人やないんにゃけど」っというて、

お母さん言うてました。

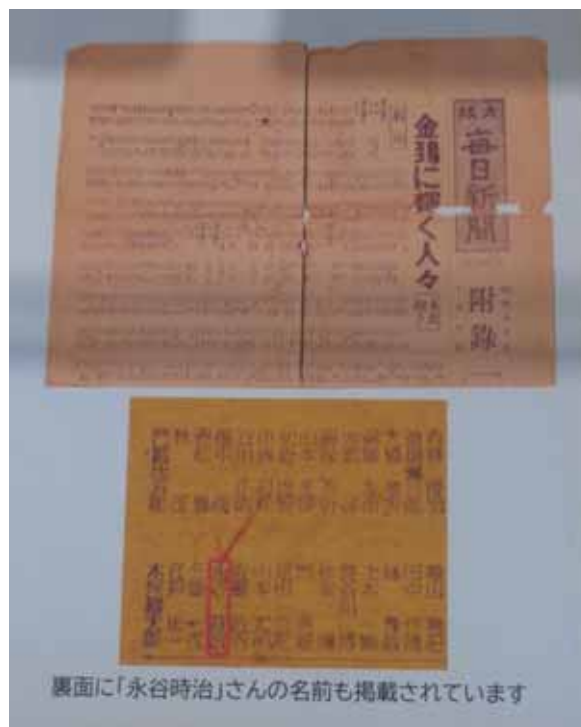
フィリピンのマニラから真南に大体500キロぐらいのところに、このホロ島というのはあるんですね。島そのものが、ちょっと細長い島ですけど、30キロぐらいしかないんですよ。何でこんな小さい島で戦わなんだんでしょね。ここに残らんわけがありましたんやろね。ここで何を守ったんやろうなという感じやね。慰霊の旅も、ここまでは行けへんね。



外邦図：ホロ島（製本・印刷機関：参謀本部）、永谷時治さんがもらった金鷲勲章などの展示状況



永谷時治さんに贈られた功七級金鷲勲章功記



勲章受章者一覧表（大阪毎日新聞附録）



日本軍が占領したホロ島（昭和17年頃）



ホロ島を警備する日本兵（昭和17年頃）

第3章 戦死した人たちへの想い

—慰霊と遺骨収集—



遺骨収集と戦没者慰霊事業

厚生労働省の資料によれば、アジア・太平洋戦争における海外戦没者（硫黄島・沖縄を含む）は約240万人にのぼります。昭和27年度から国による遺骨収集が南方地域で開始され、各地で実施されてきましたが、遺骨が収集されて御遺族のもとに返されたのは戦没者の約半数にとどまっています。フィリピン地域においては、約51万8千人の戦没者のうち、収容遺骨は30パーセントに満たない現状です。こういった現状であることから、平成28年度に「戦没者の遺骨収集の推進に関する法律」がつけられ、戦没者の遺骨収集を国の責務として、令和6年度までを遺骨収集施策の集中実施期間とし、遺骨に関する情報収集や遺骨収集の取り組みが行われています。

また、厚生労働省は戦没者への慰霊と平和への思いを込めて、昭和45年度以来、硫黄島と海外14ヶ所に戦没者慰霊碑を建立し、フィリピンにも昭和48年に「比島戦没者の碑」が建てられています。昭和51年度からは慰霊巡拝も厚生労働省によって計画的に実施され、フィリピンにも遺族の方などが訪れて、戦没者の慰霊を行っておられます。

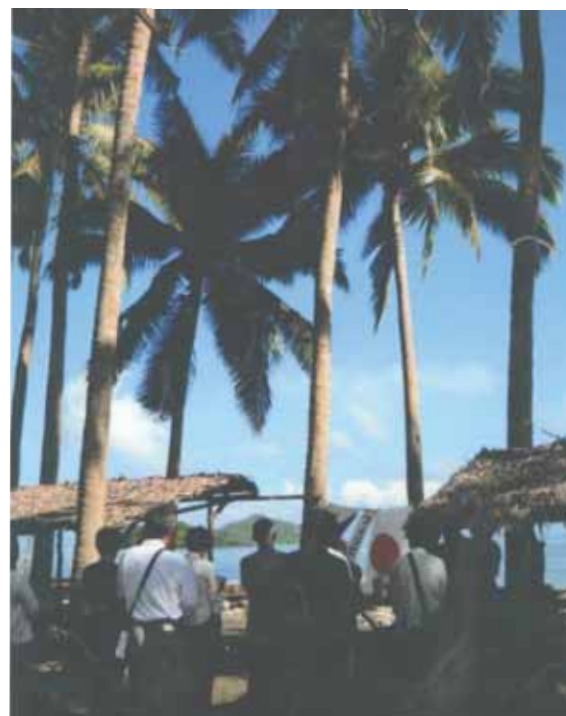


パナー：遺骨収集と慰霊

フィリピンで亡くなった親しい人たちを探して
レイテ島での遺骨収集



左：遺骨収集アルバム、「レイテ島ダナオ湖畔の慰霊法要」写真、右：記録映画「平和への道」8mmフィルムと台本



ミンドロ島での慰霊の様子（平成21年撮影）



比島戦没者の碑

【体験談—たくさん亡くなった人みんな慰霊をしたい。それはするべきや。—】

田村 芳江さん（大津市）

夫の田村榮さん（大正10年生まれ）は、昭和17年5月にフィリピンに上陸されましたが、12月30日にセブ島での戦闘で負傷して左腕を切断し、翌年に帰国されました。平成4年に亡くなられるまで、妻の芳江さんと一緒にフィリピンなどの海外へ36回も遺骨収集に行かれました。

主人の気持ちは、結局は、戦友。戦友ってすごくなって私は思うんですけど、あの、同じね働き、昔から同じ釜の飯を食べた者はものすごい強いとかいうことを聞いてきたけど、戦友ってまた違うんやね。私、肌で感じました。主人は、その戦友のお骨を拾ってあげたい、そして慰霊、お参りしたいという気持ち、それと、戦友がどんな働きをしたか、働かってその戦場でのね。それは言えないでしょ、みんな玉砕してしまってるから。で、自分は残った。なぜ残されたのか。やっぱり、戦友のそのことをみんなに知らせる、自分がお骨を拾わんなん、それするために自分は残されたっていう気持ちになってはるんやね。

私自身かて今までこの、慰霊を続けるつもりは全然無かったんや、ほんとは、そやけど主人は残したることがあるんや。『元気で50回忌慰霊をしたい』それを言うてはったんや。ほやけどあの、あと2年残ってたんや。ほんで、現地慰霊をね。ほんでこの現地慰霊だけは何とかして、現地で50回忌は済ましてあげよう、とね。

お父さん、それをよう言わはったから。もうあと2年したら、50回忌終わるさかい、それだけしたい、したい、言うてはったから。で、あ、これだけはしてあげんなん。と思て、それは行ったん。

（田村榮さんは平成4年に亡くなるまで）こればっかし。一生もう、戦争にかかわるそういうことだけで、ま、したいというようなあれやったから。ほんで自分のそれこそ、何もできん言うてはったのがしはったから、自分のしたいことしはった、できた。それはやっぱし、こういう戦友のおかげなんやね。あの人に言わせれば、戦友、第一に戦友。そういうことでしたわ。

一生かけはったんや。あとの残り。戦争に行ったその1年間というのが、あとの自分の人生というものを全部これに。初めは自分の戦友の慰霊、お骨拾って、だけだったの。だんだんにあのやっぱし、みなこのフィリピンにしても、東南アジアにしても、みな戦争にかかわってたくさん亡くなってはるから、やっぱり戦争にかかわって、たくさん亡くなった人みんな慰霊をしたい。それはするべきや。そんな思いになってきはったんやね。ほんで向こうでいろいろ回って、その慰霊ができなくなったら、国内で護国神社、各地にありますわね。その護国神社にお参りする言うてはった。そやけど、それをせずにお父さんは亡くなったけれど、私はその護国神社をほとんど回らしてもろた。



田村榮さんが収集された戦争関係図書

田村榮さんは、戦争に関する書籍を大量に収集されました。展示品は、当館に寄贈いただいた書籍のほんの一部です。

左下は田村榮さんが書かれた『栄光への道』という本です。



田村榮さんが収集され、当館に寄贈いただいた戦争関係図書の一部です。



ルソン島パタンガス（リパ日本軍飛行場跡）での慰霊の様子（平成30年撮影）



ルソン島での遺骨収集作業（平成元年撮影）

【体験談—まだ、ぎょうさん残ってましたわ、戦争の残骸—】

田村 芳江さん（大津市）
夫の田村榮さんと現地での慰霊・遺骨収集を始められた当時のことを次のように語っておられます。

一番初めの時（昭和42年のフィリピンへの慰霊の旅）は、（榮さんは勤務していた）学校休んで、ほんで慰霊に行ったんですけど、次行こうと思ったら、子供放っついて行けませんわね。休みもらえませんもん。ほんで、行きたい、お骨を拾ってあげたいという気持ち、ものすごう持ってはったんやないですか？そいで、50才で仕事やめて、そしたら自由になるからね。これだったら、やっぱし自分が行ける、そういう気持ちを持たはったんやと思います。「自分は60まで生きてらええほうや。」てね。ほたら、定年になってからやったら短いさかい。何もできない。それだったら、50でやめれば10年ある。そしたら、何かができる戦友のために、だから50でやめる言うてやめはった。

（当時の現地は）たくさんまだあの、なんちゅうかな、砲弾のあれなんかもあるしね。薬きょうとか、手榴弾ね。ああいうのもあるしね。それから、弾薬車がまだ、ひっくり返ってましたしね。道にね。アメリカのでしたわ。それから、あの、（レイテ島の）パロ海岸なんかはアメリカ軍の上陸用舟艇がもう、ボロボロになってたけど、もう20年も経ってるさかいに。もう、さびてね、ボロボロになってましたわ。そやけどね、まだぎょうさん残ってましたわ。戦争の残骸。

（レイテ島の激戦地）リモン峠の畑道歩くところすわ。ここで慰霊祭してたら近くの住民がやってきて、「あんたら、この下にね、いっぱい骨があるのにね、なんで拾わんのや。」って言わはるんや。それを初めて聞いて、まだお骨があるってね、20年経ってそんなこと思ってもなかったもん。そやけど、こんなままで行けしませんやん、スカートはいて行ってんねやし。ほんで時間もない。今度オルモックまで行かんなんし。ほんで困ってたら、その人らがパーッと下へおりてきてね、谷中からね、持てるだけ手に持って上がってきてくれはってん。現地の人が、で、そのお骨を持って帰ってきたんやけどね。ほしたらもう、コケがはえたみたいなんや、中はアリの巣でね、歯はね、手にいっぱいあってね、若い人の歯やから、虫歯は無いしね。うん、あれはショックでしたわ。



ルソン島北部レンゲット道での慰霊の様子（平成13年撮影）



遺族による慰霊の様子

【体験談一戦友の鎮魂のために慰霊に出かけていますー】 宇野 敬蔵さん（甲賀市）

昭和17年4月に（ルソン島の）リングエン湾上陸作戦に参加したんよ。その後、下級幹部教育隊で60人ほどの教育に当たっていたのやが、19年8月にサマール島の東にあるマスバテ島守備隊が、フィリピン人警備隊に襲われて皆殺しになったので、サマール島の下士官候補生隊から30人が救援に行くことになり、私もマスバテ島守備に加わったんですわ。

20年1月中旬、アメリカ軍がマスバテ島に上陸を開始したので、我々は陣地から島中央のウアク山脈に撤退してジャングル内での持久戦に入ったんやが、昼間はアメリカ軍の偵察機が飛んで来て、空からガ

ソリンを撒いて焼夷弾で山焼きをしよるんよ。

ジャングルでは、黄疸やら脚気、マラリアで悩まされたうえに、アメリカ軍の追撃があつて転進を重ねなあかん。衰弱して歩けんようになった兵がいると、木の棒で尻をポンと叩くのやが、5分ほどは歩くが、また倒れてしまう。そして「もう、放つて下さい」と言いよる。やむなく手榴弾を渡すと、しばらくして「バーン」と大きな音が聞こえて、部下に「見に行つてこい」と言うと、やがて「誰々、自決しました」との報告を受けました。

そんな中で、わしも重傷を負うことになったんや。ある時、塩がないので海水を取りに行ったら、アメリカ軍とゲリラに見つかつて、迫撃砲の砲弾の破片を右膝に受けたんよ。立ち上がれん私を部下が背負つて、山へ連れ戻つてくれた。師団長から自決命令が出て、私もその覚悟やったが、部下が「自分が生きている限りは介抱します。死んで下さい」と言うてくれて、そのお蔭で生き延びることが出来たんよ。

投降したのは、昭和20年10月末のことやった。兵隊が炊事の水を汲みに行つて、「戦争は終結しました」という日本軍のビラを見つけたんやが、「これは、アメリカ軍の計略やろう」との判断が大勢を占めとつた。でも、日本軍将校から詔勅が届いて、「無条件降伏」「生命を永らえ、祖国を建て直してくれ」というようなことが書かれてあつたんよ。11カ月のジャングル暮らしで、半袖シャツもボロボロ、靴も破れてほとんど裸足同然。アメリカ軍はそんな我々に石鹸をくれ、シャワーで身体を洗わせてもろうて、新しいシャツや日用品も支給してくれた。こんなやつたら、もっと早ように降伏したらよかつたと思うたわ。

所属中隊175名のうち、生還できたのはたったの5名。祖国を遠く離れた南の島で散つた多くの戦友の鎮魂のために、昭和48年から延べ8回、戦跡慰霊の旅に出かけてますのや。

【体験談—「二度と戦争を起こしたらあかん」という教訓を残して、兄は死んでいったんやと思います—】

植田 美代子さん（東近江市）

私たちは三人きょうだいで、長兄がフィリピンで戦死した健治（大正12年11月24日生まれ）、次兄が喜代一（大正14年生まれ）、そして私。先に出征したのは、次兄の喜代一で、志願して航空整備兵になって、中支派遣軍部隊に所属して飛行機に乗った。

長兄の健治は、昭和18年12月25日に現役入隊したんやが、国を出る前に最後の面会があって、私も行きたかったんやけど、兄の手紙に「美代子は学校があるから休まさんと、代わりに誰かに来てもらって」と書いてあったんや。母たちは兄の好物を沢山作って面会に行ったけど、面会時間はわずか5分間で、それも兵隊さんと面会人の間には縄が張ってあって、持ってたものは何一つ渡せず、食べさせてあげれなかった。逆に、兄さんから髪の毛と爪を手渡されたんよ。

帰りの敦賀駅で、母はボーっとして何も分からんようになってしもうて、一緒に行った叔母たちと駅ではぐれてしもうたん。幸い、後で誰か親切な人が米原駅まで母を送り届けて下さって、皆で米原駅まで迎えに行ったわ。母は早くに未亡人になるなど、いろいろ苦勞してて気丈な人なんやけど、十分な面会ができなかったショックがよほど大きかったんやと思うわ。

一度だけ、現地から往復ハガキが届いて、最初に「お母さんを大切に」、そして「これが最後の便りになる、内地との交流も出来なくなる」など、いろいろな事が書いてあった。ハガキには南方の花の押し花がしてあったわ。さて返信ハガキにこちらから兄への返事を書く番やが、色々なことを一杯書きたい、けれどハガキの大きさは限られとる。余り小さな字で書いたんでは読めんようになる。困ってしもうて、「お母さん、どうしよう」と相談したことを覚えるわ。

兄の派遣先はフィリピンのビリ島。兄の部隊の近くにおられた久田少尉が手紙を下さって、「真面目に良く尽くしてくれる。大変よい青年です」と書いてあったわ。戦後、久田少尉が生還されて、私たちに兄の属した部隊が玉砕したことを告げに来られた。

ビリ島は小さな島で、敵艦に囲まれ全滅したらしいわ。久田少尉は「もし生き残っていても、あの人がいたら自決しているだろう」と言うてはった。でも母は、兄の戦死を信じて待ち続けとった。母と二人で田んぼの仕事に出とって、ラジオで復員者の通報のある時間になると、母は私に「早くラジオを聞きに帰ってきいな」というんよ。

ある日、村長さんが兄の戦死公報を届けに家に来られて、「実は……」と、とても言い出しにくそうやった。母は、もうそのことを察知してて、涙ひとつ見せんかったわ。出る涙も無くなつとったのかも知れんわ。兄の遺骨をもらいに行く時も、母の体調が悪くなかったので私が行ったんやが、箱の中には小さな位牌が一つ入ってただけやった。

長男は、兄・健治から一字をもらって健一といいます。私はいつも「おっちゃんが戦死しやはったことを覚えといてや。仏さんにはお線香を供えてや」と頼んでます。「もう、二度とあんな戦争を起こしたらあかん」。兄は、そういう教訓を私たちに残して死んでいったんやと思うわ。



恩賜の杯

植田美代子さんが「恩賜の杯」を包んで保管されていた布も、杯と合わせて展示させていただきました。



ルソン島に建立されている比島戦没者の碑 (厚生労働省提供)



慰霊の様子 (厚生労働省提供)



地域別戦没者遺骨収容概見図 (令和4年3月現在、厚生労働省提供)

① 事前準備

- ・ 御遺骨の所在情報に基づき、収集場所を決定
- ・ 関係国や現地政府等と調整
- ・ 派遣団体と打合せ

※ 遺骨収集の前に現地調査も行います。

② 結団式



出発前に派遣団員と打合せを行います。



③ 現地政府等への表敬訪問と打合せ



相手国政府や現地の関係機関の協力を得るため打合せを行います。

④ 遺骨収集



現地作業員と協力して収容作業を行います。



派遣団員によって1柱ずつ丁寧に御遺骨を収容します。

⑤ 遺骨鑑定



日本と現地の双方の遺骨鑑定人により、日本人の御遺骨である蓋然性を確認するために慎重に御遺骨の形質鑑定を行います。

⑥ DNA鑑定のための検体採取



御遺骨の一部をDNA鑑定用の検体として日本に持ち帰り、所属集団の判定を行います。科学的な鑑定を終えるまでは、検体以外の部位は現地で丁寧に保管します。

遺骨収集の一般的な流れ (厚生労働省提供)

⑦ 御遺骨の送還



日本でのDNA鑑定の結果、日本人の御遺骨であると判定された御遺骨については、再度現地に行き、慰霊のため御遺骨を焼骨し、追悼式を行い、日本に送還します。

⑧ 遺骨引渡式



派遣団から厚生労働省職員へ御遺骨が渡されます。

第31回企画展示「戦死者8,843名 フィリピンの戦場Ⅱ－レイテ島・ミンダナオ島などの島々－」展示資料一覧表

展示資料番号	資料名	点数	資料説明	提供者名
第1章 フィリピン 戦死者 1パーセントのプロフィール				
第1節 戦死者が語るフィリピンの戦争経過				
1	水島保さんの柳行李	1		水島登志さん
2	伊藤武一郎さんの国民服(上衣とズボン)	一式		植西弘子さん
3	『横田隊写真帖』	1	昭和18年1月発行	白井貞夫さん
4	写真集『比島派遣軍』	1	昭和18年6月発行	白井貞夫さん
5	戦地から送られてきた冊子『比島作戦の思ひ出』	1	発行年の記載なし	富田昇さん
6	丸山幸治さんの軍帽	1		丸山弘さん
7	丸山幸治さんの靖国神社合祀通知書	1	昭和三十二年六月	丸山弘さん
8	丸山幸治さんから届いたはがき	4		丸山弘さん
9	奥島一重さんの賞状	1		奥島すみ子さん
10	奥島一重さんの遺言書	1		奥島すみ子さん
11	奥島一重さんの消息問い合わせの回答はがき	1		奥島すみ子さん
12	奥島一重さんの死亡告知書	1		奥島すみ子さん
13	奥島宗男さんの自動車運転免許証	1		奥島すみ子さん
14	古澤久三郎さんが戦地から送った手紙とはがき	2		古澤しげさん
15	古澤久三郎さんの戦死の様子を伝える高橋中隊長の手紙	1		古澤しげさん
16	水島保さんの指揮刀	1		水島登志さん
17	森田久治郎さんの奉公袋	1		森田久隆さん
18	森田久治郎さんの赤たすき	1		森田久隆さん
19	森田久治郎さんの千人針	1		森田久隆さん
20	靖国神社写真	1		白井貞夫さん
21	直木清さんに贈られた寄せ書き日の丸	1		直木正樹さん
22	写真「章一郎出征ノ時寫」	1		三和伸一郎さん
23	三和章一郎さんの第一補充兵證書	1		三和伸一郎さん
24	三和章一郎さんの軍隊手帳	1		三和伸一郎さん
25	直木清さんの豚皮の編上靴	一対		直木正樹さん
26	砲弾・弾頭部	4		森田久隆さん
第2章 フィリピンの戦場では				
第1節 戦場となったフィリピン				
27	フィリピンの植田潔さんから届いた手紙とはがき	2		植田安正さん
28	フィリピンの上原四郎さんから届いたはがき	1		上原いよさん
29	大村権治良さんの戦死後に届いた慰問のはがき	1		大村征一さん
第2節 レイテ島では・・・				
30	戦争関係図書(大岡昇平著『レイテ戦記』)	1		田村芳江さん
31	レイテ島の万木清良さんから届いたはがき	2		万木信一さん
32	上原四郎さんに贈られた寄せ書き日の丸	1		上原いよさん
33	上原四郎さんに贈られた千人針	1		上原いよさん
34	上口仙太郎さんの軍服(軍服上衣・袴、軍帽、赤たすき)	一式		上口善美さん
35	寄せ書き日の丸	1	誰に贈られた物なのかは不明です	平田地区遺族会
36	大村権治良さんの弾痕付き軍袴	1		大村征一さん
37	大村権治良さんに贈られた寄せ書き日の丸	1		大村征一さん
38	大村権治良さんの戦闘帽	1		大村征一さん
39	大村権治良さんの雑囊	1		大村征一さん
第3節 在留邦人と戦争－ミンダナオ島の民間人が体験した戦争－				
40	横田清一さんの奉公袋	1		横田清一さん
41	『ミンダナオ島敗走記』	2	堀池榮一さん著	堀池榮一さん
42	野村和男さんが使っていた軍服上衣	1		野村和男さん
43	野村和男さんが使っていた軍靴・ゲートル	一対		野村和男さん
44	小野田寛郎さん関係図書(『ルバングの譜』『我が回想のルバング島』『わがルバング島の30年戦争』『戦った、生きた、ルバング島30年』)	4		田村芳江さん
45	青木勘四郎さんの出征幟	1		青木喜代さん
46	西澤久三さんに贈られた寄せ書き日の丸	1		西澤敬治郎さん
47	青木勘四郎さんの豊満大社鉢巻	1		青木喜代さん
48	青木勘四郎さんの軍用水筒	1		青木喜代さん
49	青木勘四郎さんに贈られた慰問袋	1		青木喜代さん
50	目片嘉一さんが使っていた軍服上・下、軍帽	一式		目片すてさん
51	目片嘉一さんが使っていた軍靴	一対		目片すてさん
52	目片嘉一さんが使っていた飯盒	1		目片すてさん
53	中川与一さんの軍服上衣	1		中川あい子さん

第4節 その他の島では			
54	直木清さんがパラシュートを使用して作った手帳	1	直木正樹さん
55	江畑太久二さんが使っていた千人針	1	江畑太久二さん
56	江畑太久二さんの一等兵記章	1	江畑太久二さん
57	天明大隊長からの通知文書	1	永谷芳昭さん
58	昭和六年乃至九年事変従軍記章	1	永谷芳昭さん
59	支那事変従軍記章	1	永谷芳昭さん
60	勲七等青色桐葉章	1	永谷芳昭さん
61	勲八等白色桐葉章	1	永谷芳昭さん
62	功七級金鷄勲章	1	永谷芳昭さん
63	功七級金鷄勲章功記	1	永谷芳昭さん
64	勲章受章者一覧表(大阪毎日新聞附録)	1	永谷芳昭さん
第3章 戦死した人たちへの想い—慰霊と遺骨収集—			
65	遺骨収集アルバム	1	白井貞夫さん
66	「レイテ島ダナオ湖畔の慰霊法要」写真	1	昭和五十五年七月十二日ビサヤ会 白井貞夫さん
67	記録映画「平和への道」8mmフィルム	1	森田久隆さん
68	記録映画「平和への道」台本	2	森田久隆さん
69	田村榮さんが収集された戦争関係図書(田村榮さん著『栄光への道』を含む)	5	田村芳江さん
70	恩賜の杯	1	杯を包んで保管していた布も展示 植田美代子さん

第31回企画展示「戦死者8,843名 フィリピンの戦場Ⅱーレイテ島・ミンダナオ島などの島々」 写真・図表パネル一覧表

章	節	項	写真・図表タイトル	提供者名	備考
メインタイトル		バナー	戦場となったレイテ島オルモック東方の山々	白井貞夫さん	
		バナー	レイテ島で全滅した歩兵第9連隊第3大隊第10中隊の行進（ネグロス島にて）	白井貞夫さん	
第1章 フィリピン 戦死者 1パーセントのプロフィール	第1節 戦死者が語るフィリピンの戦争経過	バナー	昭和17年（1942）から20年（1945）までの戦況概要	当館	既存のバナーを利用
		バナー	戦場となったフィリピンの島々（攻撃を受けて炎上する市街地（セブ島）、戦場となった街の黒煙（セブ島）、戦場となった街で消火活動をする人たち（ネグロス島）、戦場に遺棄された自動車の残骸（ミンダナオ島））	田村芳江さん	『比島派遣軍』（比島派遣軍報道部、昭和18年6月1日発行）より引用
			草野唱二さん	草野文子さん	
			澤地源一さんの村葬で読まれた祭文	澤地洋子さん	
			吉坂英太郎さん（演習地にて）	吉坂ちゑさん	
			大村権治良さん（戦死直前に撮影）	大村証一さん	
			水原五郎作さん	水原千代さん	
			目片嘉一さんが使用した『九四式軽装甲車説明書』	目片すてさん	
			田中光男さんが戦地で読んでいた冊子『八月バタン山中及び〇〇岬に激戦地を偲ぶため記念碑を建設す』	田中太啓男さん	
			山上青年学校のころの寺田松太郎さん（右端）	寺田幸吉さん	
			北野榮一さん（出征時 佐山産業組合にて）	奥島すみ子さん	
			古澤久三郎さんから妻のいちさんへの手紙	古澤しげさん	
			伊藤武一郎さんの水筒	植西弘子さん	
			増田弘さん（彦根工業学校のころ）	増田玲子さん	
			万木清良さん	万木信一さん	
			上原四郎さん（左側）	上原いよさん	
			正野次郎さん（右）と弟の正野雄三さん	正野光博さん	
			藤田駒治郎さん	藤田はるさん	
			上口仙太郎さんの肖像画	上口善美さん	
			福島佐一さんの『衛生兵必携』	福島治郎さん	
			太田賢さんのノート	太田孝之さん	
			植田潔さん	植田安正さん	
			脇坂寅夫さん	脇坂金五郎さん	
			中西恒三さん	中西一雄さん	
			会社員時代の白井雄一さん（右側）	白井貞夫さん	
			満洲鉄道に勤めていた頃の市田久次郎さん（昭和12年2月）	市田勝さん	
			長谷井定次さんの寄せ書き日の丸	長谷井よねさん	
			植田建次さん	植田美代子さん	
			伊庭信二さんの新聞記事	伊庭長和さん	
			嵐山にて（後列右端の田中為三郎さん・前列左側のもとしさん）	田中もとしさん	
			吉田喜代次さん	吉田越子さん	
			芳昭さんを抱く永谷時治さん	永谷芳昭さん	
			池田梯治さん	池田シカさん	
			奥島宗男さん（左側）と弟の義治さん（出征時に撮影）	奥島すみ子さん	
			小森庄四郎さんの戦闘帽	小森信行さん	
			中井三郎兵衛さんの軍隊手帳	中井利郎さん	
			水島保さんの柳行李	水島登志さん	
			青木勤四郎さん	青木喜代さん	
			中川与一さんの軍服	中川あい子さん	
			井上外次さん（出征時の家族写真）	井上桂一さん	
			満洲義勇軍のころの奥島一重さん	奥島すみ子さん	
			和治清さんの肖像画	和治なつさん	
			丸山幸治さんの軍帽	丸山弘さん	
			西澤久三さんの寄せ書き日の丸	西澤敬治郎さん	
			中澤由吉さんと家族（昭和14年の入営時）	荒川卯太郎さん	
			ルソン島北部バギオ英霊追悼碑での慰霊の様子	一般財団法人滋賀県遺族会	平成13年撮影
			ルソン島マニラ東方の日本地名	当館	『戦史叢書 捷号陸軍作戦（2）ルソン決戦』（朝雲新聞社、昭和47年発行）の付図第六による
			マニラ東方山中方面戦没者之碑での慰霊の様子	一般財団法人滋賀県遺族会	「千秋山」のふもとで平成19年撮影
			ルソン島バターン半島での慰霊の様子	一般財団法人滋賀県遺族会	平成13年撮影

第2章 フィリピンの戦場では	第1節 戦場となったフィリピン		フィリピンの伝統的な家屋	田村芳江さん	『横田隊写真帳』（垣部隊横田隊、昭和18年1月）	
			田植え（フィリピンの農村にて）	田村芳江さん	『比島派遣軍』（昭和18年6月1日、比島派遣軍報道部発行）	
			稲刈り（フィリピンの農村にて）	田村芳江さん	『比島派遣軍』（昭和18年6月1日、比島派遣軍報道部発行）	
			フィリピン ルソン島の人々	堀池榮一さん		
			日本軍が占領した蘭印（オランダ領東インド）ボルネオ島の精油所	西村君枝さん	『大東亜戦争海軍作戦写真記録』（昭和17年12月1日、大本営海軍報道部編纂）	
			松竹少女歌劇団による慰問公演のパフレット（コピー）	堀池榮一さん	昭和17年（1942年）頃は、現地が比較的落ち着いた状況だったため、このような慰問も行われていました。	
			ルソン島からミンドロ島へ向かう船（昭和17年（1942年）頃）	個人	『比島作戦の思ひ出』垣部隊写真班作製	
			ルソン島バンバング州マバラカット東飛行場跡の看板	一般財団法人滋賀県遺族会		
		マバラカット東飛行場跡にある特攻兵士の像	一般財団法人滋賀県遺族会			
	第2節 レイテ島では・・・	バナー		日本軍占領下のレイテ島	大村桓一さん	昭和17年（1942年）7月頃のレイテ島タクロパンの街並み。レイテ島で戦死された大村権治良さんの埋葬地を示す写真（比律濱の景）。
				戦場	田村芳江さん	『比島派遣軍』（昭和18年6月1日、比島派遣軍報道部発行）
			レイテ島周辺地図	当館	大東亜地図大系『フィリピン群島図』（部分）博多成象堂発行	
			フィリピンの山道を行くトラック	田村芳江さん	『横田隊写真帳』（垣部隊横田隊、昭和18年1月）	
			戦闘によって破壊されたフィリピンの街	堀池榮一さん		
	第3節 在留邦人と戦争－ミンダナオ島の民間人が体験した戦争－		ミンダナオ島で慰霊を行う遺族たち	一般財団法人滋賀県遺族会	平成4年撮影	
			ミンダナオ島のダバオ市街略図	当館	早瀬晋三「『ダバオ国』の在留邦人」『日本占領下のフィリピン』（岩波書店、1996年）掲載図を改変	
			当時のマニラ麻栽培の様子	当館	『マニラ麻栽培概要』（拓務省拓務局発行、1939年）（国立国会図書館デジタルコレクションから引用）	
			水牛に乗るフィリピンの人々	田村芳江さん		
			外邦図：ミンダナオ島（測量機関：比律賓交通部）	東北大学理学部地理学教室	1941年製版・発行（1934年調整を複製）	
	第4節 その他の島では		フィリピンの地図	当館		
			ネグロス島での天長節祝賀行事	白井貞夫さん	昭和17年（?）	
			通信業務（気象観測隊）	田村芳江さん	『比島派遣軍』（昭和18年6月1日、比島派遣軍報道部発行）	
			日本軍の輸送船団	田村芳江さん	『比島派遣軍』（昭和18年6月1日、比島派遣軍報道部発行）	
			フィリピンへ向かう輸送船団（昭和16年（1941年）12月）	田村芳江さん	『大東亜戦争報道写真録』（昭和17年12月8日、読売新聞社発行）	
			外邦図：ホロ島（製本・印刷機関：参謀本部）	東北大学理学部地理学教室	1943年波集團司令部複製を1944年複製	
			日本軍が占領したホロ島（昭和17年頃）	西村君枝さん	『大東亜戦争海軍作戦写真記録』（昭和17年12月1日、大本営海軍報道部編纂）	
	第3章 戦死した人々への想い－慰霊と遺骨収集－	バナー		遺骨収集と慰霊 フィリピンで亡くなった親しい人々を探して	白井貞夫さん	レイテ島での遺骨収集
				ミンドロ島での慰霊の様子	一般財団法人滋賀県遺族会	平成21年撮影
		比島戦没者の碑	一般財団法人滋賀県遺族会			
		ルソン島バタンガス（リバ日本軍飛行場跡）での慰霊の様子	一般財団法人滋賀県遺族会	平成30年撮影		
		ルソン島での遺骨収集作業	一般財団法人滋賀県遺族会	平成元年撮影		
		ルソン島北部レンゲット道での慰霊の様子	一般財団法人滋賀県遺族会	平成13年撮影		
		遺族による慰霊の様子	水原千代さん・水原一夫さん			
		ルソン島に建立されている比島戦没者の碑	厚生労働省			
		慰霊の様子	厚生労働省			
		地域別戦没者遺骨収容概見図	厚生労働省	令和4年3月現在		
	遺骨収集の一般的な流れ	厚生労働省				

戦争と女学生—戦時下の学校生活と進路—

(会期：令和5年1月5日～6月25日)



校庭に整列する女学生：滋賀県木之本実科高等女学校

ごあいさつ

明治後半から大正期にかけて、近代の教育制度が拡充し、それとともに小学校を卒業した女子の進学率が上昇していきました。また、女子中等教育の必要性から県内の高等女学校等の設置開校が増え、昭和20年（1945年）頃には、20校近くになりました。一方、日中は働き、必要に応じて学区内の青年学校や裁縫学校等へ通う女子たちもいました。

しかし、戦争の長期化は女学生たちの学校生活と進路を変えていきました。時間割に教練が入り、セーラー服のスカートからモンペ姿になって、さらには「勉強よりも増産」の掛け声のもと、軍需工場や開墾へ動員されていきました。

また学校を卒業した女子たちは、救護要員としてふるさとを離れて戦地または外地へ赴き働きました。戦地へ出征した男性に代わって、学校の教員や役場、銀行等へ勤めるようになった人たちもいます。今回の企画展示では、旧制高等女学校の方々の体験談やモノ資料を中心に、戦時下の女学生の学校生活と進路について紹介します。

令和5年1月5日

滋賀県平和祈念館

第1章 女子教育の拡充と学校生活

1) 女子の進学と高等女学校の拡充

戦前の女子教育についてみると、小学校（当時の尋常小学校）開校当初は、学校へ通う児童が半分もいませんでした。明治19年（1886年）の小学校令で義務教育が明確になったことによって、児童の就学率が向上し、大正12年（1923年）は、男女ともに小学校の就学率が99%となりました。

児童の就学率の向上とともに、中等教育機関へ進学する児童が増えていきました。中等教育機関以上の学校では男女別れており、異なる教育が行われていました。男子教育から遅れたかたちではありますが、女子の中等教育の必要性から各地に高等女学校の開校が増えていきました。昭和20年（1945年）の段階で、滋賀県には21校の高等女学校がありました。

戦前の中等教育機関における女子教育は、裁縫や家事等の実生活に必要な技芸を習得するものが多くみられます。また、明治32年（1899年）の文部大臣が「高等女学校ノ教育ハ其生徒ヲシテ他日中人以上ノ家ニ嫁シ、賢母良妻タラシムルノ素養ヲ為スニ在リ」と述べている通り、高等女学校において良妻賢母の育成が求められていました。

しかしながら、当時の高等女学校は、教育方針や修学年限、課外活動等は、学校ごとで異なり、それぞれの特色がみられます。

※高等女学校は、小学校等の初等教育機関を卒業した女子のうち、試験を受けて合格した人が通う中等教育機関の学校です。修業年限は本科で4年～5年（学校によって異なる）、その上に専攻科等がありました。主に13歳から19歳頃の女子が通っていました。昭和20年（1945年）頃になると、小学校を卒業した約2割の女子が高等女学校へ進学しました。



裁縫仕立帳



裁縫関係の教科書と教材



教科書『新制 女子東洋史』

2) 高等女学校のセーラー服

高等女学校への入学が決まると、学校へ通う準備をしました。制服はその準備のひとつです。

高等女学校が設立された当初は、着物や袴が主流でしたが、昭和初期にセーラー服が導入されました。洋服屋で新調する人もいましたが、お姉さんや卒業生の制服を譲りうけて着用する人もいました。セーラー服を着ると華やいだ気分になったそうです。

当時の写真をみると、女学生たちは、セーラー服にスカート、手提げ鞆を持ち、革靴を履いています。今の中学生や高校生と変らない姿で登校していたと想像できます。



理科実験の授業の様子 昭和3年

女学生らは和装姿で授業を受けています。

(滋賀県立愛知高等学校 所蔵)



図書室にあつまる女学生 昭和10年

昭和10年代に入ると、セーラー服姿の女学生がみられます。セーラー服が定着した頃と思われます。

(滋賀県立愛知高等学校 所蔵)

【体験談—入学した頃は、まだそう深刻な状況やなかったね。】

Nさん

Nさんは、昭和14年(1939年)に日野高等女学校に入学し、昭和18年(1943年)に本科4年生を卒業したのち、同校の専攻科へ進みました。

女学校に入学した昭和14年(1939年)頃は、まだそう深刻な状況やなかったね。それでも、セーラー服やらは新調せんと、卒業しはった人の古いのをわけていただいて着たりしてましたね。

本科の時やね。昭和16年(1941年)に(太平洋戦争の)宣戦布告がありましたでしょう。それからひどくなってきましたね。まあ、音楽なんかもありましたし、授業は授業でありましたけど。

それから、専攻科ではお裁縫なんかもありました

ので、入ってきはる人の制服なんかも縫ったげたりしましたわ。

それから、革靴がだんだんなくなって、下駄はいて学校へ通ったり、スカートがモンペになったりしてね。だんだん厳しくなってきたね。



絵葉書 日野高等女学校



日野高等女学校のバレー部

【体験談—ヘレン・ケラーに会えて嬉しかったわ】

Sさん

Sさんは、昭和12年(1937年)に大津市立高等女学校に入学しました。

英語は、女学校1、2年の時は必須やった。3年の時に選択になり、英語を選んだの。

昭和12年(1937年)5月にヘレン・ケラーが(大津にある)県教育会館に来た時、英語をやっていたので選抜されて出席することができ、とてもうれしかったわ。それ以降の学年では、英語は禁止になったの。

アメリカの社会福祉活動家として有名なヘレン・ケラー（1880～1968）は、昭和12年（1937年）に来日し日本各地を訪問しました。滋賀県へは5月7日に来訪、彦根にある県立盲学校で記念植樹をし、彦根高等商業学校（現、滋賀大学経済学部）講堂で講演したのち、大津の県教育会館でも講演を行っています。Sさんは、大津での講演会に出席しました。



ヘレン・ケラーの銅像（東近江市役所愛東支所前）

展示資料の紹介 絵葉書

県立大津高等女学校・滋賀県女子師範学校

明治41年（1908年）から昭和6年（1931年）の間、県立大津高等女学校と滋賀県女子師範学校は同じ敷地内にありました。絵葉書は、両校が同じ敷地内にあったことを伝える資料です。昭和6年（1931年）に県立大津高等女学校は移動し、跡地には滋賀県女子師範学校附属小学校が入りました。



絵葉書 滋賀県女子師範学校・滋賀県立大津高等女学校

3) 校則：娯楽

高等女学校があった時代は、どのような校則があったのでしょうか。

映画館などの娯楽施設へ遊びに行く時を例にあげます。その時は、制服の着用が義務づけられたという方の体験談がありました。遊びに行く時は、必ず保護者と一緒だったようです。

また、当時の中学校（戦前の男子が通う中等教育機関）や高等女学校では、異性との交流を禁止する学校が多く、一緒に帰ったり、交際はできない時代でした。厳しい学校の場合、退学させられる学生もいたようです。

【体験談—しつけの厳しい彦女（ケンジョ）時代】

Hさん

Hさんは、昭和5年（1930年）に彦根高等女学校を卒業後、同校の専攻科へ進みました。彦根高等女学校在学中のことについて語っています。

彦根高等女学校の制服は、紺のセーラー服にエンジ色の一本線が入ってました。（最寄り）駅を降りたら、左側は彦女生で反対側は彦中生（当時の彦根中学校で今の彦根東高校の前身）が通学することが決まってました。男女が話をしているところを見つけられると、1週間の停学とか、男女が一緒にお茶でも飲んでいたら退学でした。映画館に入るのも男女別々に入っても停学でした。父兄同伴ならよかったですよね。単独で行った場合は停学です。

通学路も決まっていたので、銀座（彦根市内にある銀座商店街のこと）で家の買い物なんかを頼まれた場合は、事務局へ行って、こうですと理由を言って、帰りに銀座を通りますという届けをしました。



彦根高等女学校校門



展示風景

【体験談—クラブ活動と勉学に励む女学生】

H さん

昭和5年（1930年）に彦根高等女学校の専攻科へ進んだHさん。彦根高等女学校在学中のクラブ活動やその後の進学について語っています。

当時からクラブ活動もありましてね、バレーもバスケットもありました。ちょっと今ではありませんけど、長刀とか、弓道とかね。陸上もありました。私は弓道をやってました。私は病気もしましたので、家族と相談しまして、激しいクラブもなんやしということで入りました。大会に出るといふことまではまだできませんでした。テニス部なんかはよく出ました。優勝も何回もしていました。

進学を目指す女学生

それと4年生になると滋賀師範（滋賀師範学校のこと。今の滋賀大学教育学部）へ行く資格ができるんですね、滋賀師範へ行って、小学校の助教諭される方も2人ぐらいありましたね。愛知川の女学校は4年制でしたから、転学されて5年生だけ来られていた方もおられましたね。



彦根高等女学校卒業アルバム(昭和15年)



「滋賀県彦根高等女学校 第四十五回卒業式」
式次第に掲載された卒業生の志望先

コラム 昭和15年(1940年)彦根高等女
学校卒業生139名の志望先

彦根高等女学校昭和15年度卒業生(139名)
の志望先

「滋賀県彦根高等女学校 第四十五回卒業式」式次第には、卒業生の志望先が掲載されていました。志望先をまとめると下の表になります。

一番多い志望先は、家庭で、就職はその次にきます。高等教育機関またはその他の養成所等へ進学する卒業生も多く、45%近くを占めます。

志望先として一番多い家庭ですが、その理由については不明です。滋賀県は農業の就業人口の多い県で、戦前においては全国の上位でした。これを参考に考えると、農業を生業としている女学生の家庭も多く、農業・家事の手伝いをしていたのではないかと考えられます。

進路先	人数	%
家庭	58	42
就職	19	14
高等女学校付設課程	37	27
高等学校機関(専門・大学)	11	8
看護、裁縫等の養成所	10	7
音楽学校・美術学校	2	1
その他の学校	2	1

コラム 戦時中の女性の服装

防寒コート

洋装店に勤めていた頃、残った最後の服地で友達が縫ってくれたものです。ゴツゴツした布地は、戦時中の独特のものでした。

浴衣

よい着物はお米に替え、残った着物を何度も縫って着ました。

手作りの上着

昭和19年(1944年)に切れ端をもらい作ったものです。袖と前身ごろは、当時貴重だったウールを使用しています。後身ごろは戦時中の粗悪なホームスパンを使用したと語っています。空襲の合間をぬって、上着をつくりました。



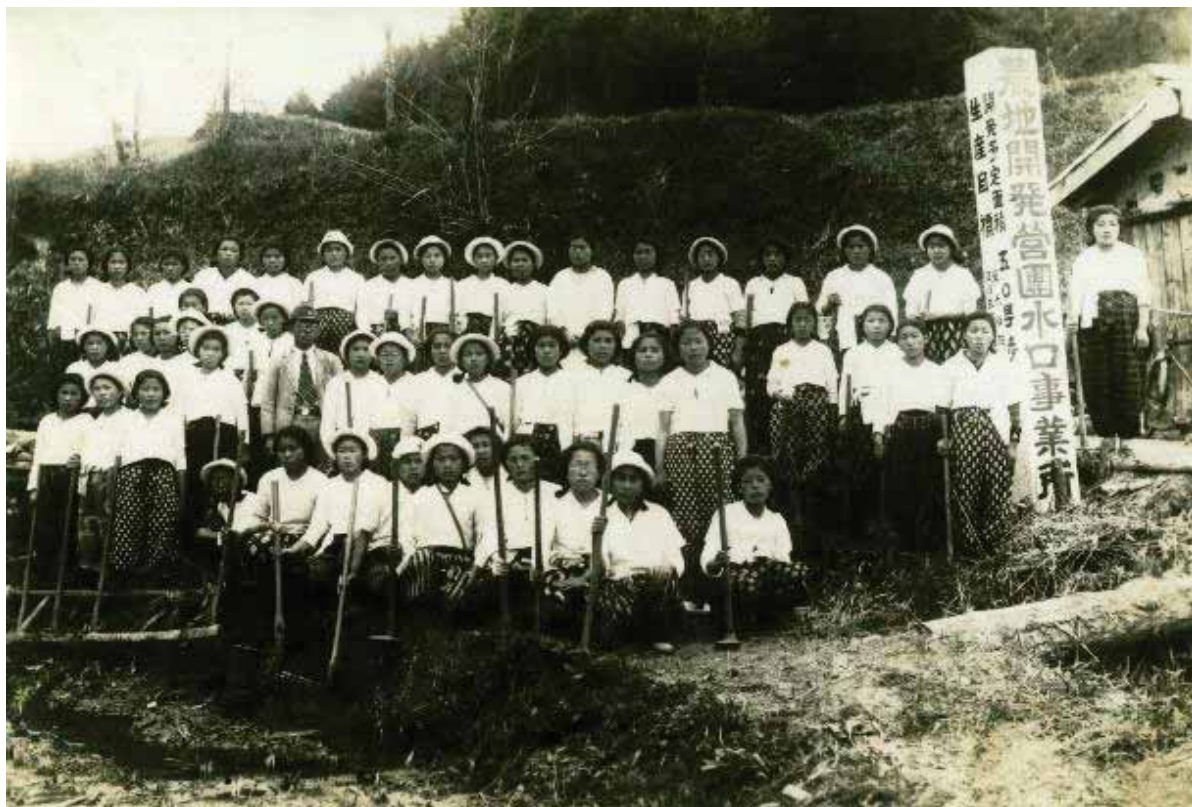
戦時中の女性の服装

左：防寒コート

真ん中：浴衣

右：手作りの上着ともんぺ

第2章 戦争による学校生活の変化



集合写真 水口高等女学校 奉仕作業

【体験談—入学試験は口頭試験ばかりでした。】

Nさん（東近江市）

Mさん（東近江市）

昭和17年（1942年）に、愛知高等女学校へ入学したNさんとMさん。女学校の入学試験は、紙がなかったため、口頭試験だったといいます。

Nさん 私たちは学力も不足。全然勉強ってあらへんかったさかいな。「学力不足と灰色の学生時代」と書いていてんか。結局、「太平洋戦争下の女学生時代です」と。

Mさん 小学校6年生のときに（太平洋戦争が）始まったんやな。

Nさん うん、6年生。で、次の年に入学したんですわ、女学校に。試験も、だから口頭試験のときに。

Mさん 試験用紙がなくてね、口頭試験ばかりでしたよ、大方。

Nさん 口頭試験ばかりでした。前の日に覚えてたわ。どことこの、サイパン島かどこか

の戦果を。「戦果を上げはったことを質問しはったらあかんで」言われて（笑）。ほんなこと（昭和）17年（1942年）に入学したんやな。

【体験談—「お国のためにがんばって下さい」と書いた】

杉本 智恵子さん（甲賀市）

昭和12年（1937年）7月に日中戦争が始まりました。戦地の兵士を励ますために、同郷の学校や地域、婦人会等から戦地へ慰問の手紙を送ることが推奨されました。

水口高等女学校に在学していた杉本智恵子さんは学校の割り当てで、中国へ派遣されていた同郷の兵士・西浦さんに慰問の手紙を送りました。慰問の手紙をきっかけに、杉本智恵子さんと西浦さんとのやり取りは4年間も続きました。

学校の割り当てで、水口町にいる人で、あんたはこの人と割り当てられました。書いた慰問の手紙は、

学校がまとめて戦地へ送らはんのやな。

私はええ人にあたったという。おじいさんに当たった人は、すぐに切れてしまうわな。この人はやっぱり気が合うたのかな。この人は文才家や。ほんでまだ若いけど、立派な人にあたってな。西浦さんという人でした。

慰めというのか、励ましやな。慰めたらあかんのや。まあ、頑張ってくださいということや。「体に気をつけて」、「国のために頑張ってください」と書いといた。

花びらを送ったことがあった。ほんとそれが懐かしくて書いたし。

当たる人も、私よかったんやわ。西浦さんが戦死しはるまで続いた。西浦さんは、飛行機に乗ってはるでな、「僕はいつかは死なんならん」と言っていた。



戦地の兵士から女学生宛ての手紙

女学生が送った慰問の手紙

杉本智恵子さんは、水口高等女学校在学時に、兵士の西浦さんと文通が始まりました。きっかけは、学校から戦地の兵士を励ますために送った慰問文でした。昭和12年(1937年)当時の西浦さんは、現役兵として中国へ派遣されたのちに航空兵へ志願し転科しました。二人の手紙のやり取りは、西浦さんが戦死した昭和15年(1940年)12月まで続きました。

その後の杉本智恵子さんは、水口高等女学校卒業後、京都の専門学校へ進学したのち、伴谷国民学校(今の甲賀市の伴谷小学校)で教員を経験しました。



『出陣兵士に送る女子慰問手紙文』

【体験談—ドレミファソラシドは、あかんねん】

Nさん(東近江市)

Mさん(東近江市)

愛知高等女学校の同級生(昭和17年(1942年)入学)のお二人が、当時のことを語っています。

Mさん 学校から映画を見に行かさったけど、軍隊の戦果ニュースと。

Nさん うん、そやそや。見たわ。うん。それにね、学校の勉強のほうではあれやったな。もう英語がなくなったな。途中一回。

Mさん うん。

Nさん 英語がなくなった。敵国の言葉。習わへんだ時期があったな。

Mさん 1年のときだけはな、ちょっと習ったけど。

Nさん な、ちょっと習ったけど。

Mさん よう覚えたけど。

Nさん 敵国の言葉やから英語が、英語がなくなった。戦争の真っ最中のときは、それから家庭でもな、「ポケット」と言わんと「物入れ」と言うたりな。何か、敵国の言葉を使わんようにささはった。

Mさん ほうやな(笑)。

Nさん それにな、覚えてんのな、音楽。ドレミファソラシドはあかんねん。ドレミファソラシドは、外国の言葉や、あかなんで。

Mさん イロハ、イロハや。
 Nさん ドイツ語で、ツェーデーエーエフゲーアー
 ハーツェーか。ドイツ語で言うたん、それ
 を。ドイツは(昭和15年(1940年)に結
 ばれた)日独伊(三国同盟)のあれで。
 Mさん で、ハニホヘトイロハもあったやん。
 Nさん ハニホヘトイロハもあった。
 Mさん ドレミがなかったんやな。ツェーデーエー
 エフゲー。ドレミのかわりでしたわ。



教科書『音楽1』(中等学校女子用)
 ドレミファの部分がハニホへと表記が変わりました

【体験談—英語は廃止になりました】

Nさん(日野町)
 水野 澄子さん(大津市)
**太平洋戦争中に日野高等女学校で学んだNさん、水
 野澄子さんの思い出です。**

Nさん〔昭和14年(1939年)入学〕
 最初は英語もあって、初歩的なことを習ってたけど、戦争がひどくなってきたら英語は廃止になって。普通の教科は習ってたけど、それもだんだん勤労奉仕が多くなって、山を開墾したところにお芋植えに行ったり、山で木を切って炭焼きをしたり、軍服の補修がくると、学校で補修をしたり。ほころびを直したりね。もう、勉強よりは、だんだんだんだん戦争の色が濃くなってきて。ゆっくり勉強してられなかったですね。

水野 澄子さん〔昭和15年(1940年)入学〕
 女学校の2年生に大東亜戦争が始まりました。そ

れまではね、ダンスがあったんですよ、女学校でも。そしたらね、やっぱりアメリカ民謡やらがまだ、ありましてね、「春風吹けば」ていう、しな—しな—つとしたダンス教えてもろてたんです。

それがね、2年生の途中から大東亜戦争になりましたら、途端にね、ドイツ民謡ですよ。ほんなら、タッタッタとマズルカゆうてね、キャンキャン跳ねるような勇ましいダンスに代わったんです。

通った日野高等女学校では、3年生の時に英語科と被服科に分かれるんですよ。私は英語が好きやから、英語科行きたいと思ってた。けど、3年生からもう英語全部廃止。敵国語ということで。習いたいと思っても、習えなかったんですよ。被服科も全部なしに。先輩は、一組が英語科、二組が被服科となっていたらしいですけどね。



戦時標語・ポスター(女学生の作品)

【体験談—体育の時間に竹槍などの訓練をしました】

Aさん(東近江市)
 中川 賀津子さん(高島市)
 葛見 幸枝さん(高島市)
**Aさん〔昭和19年(1944年)に淡海高等女学校に
 入学〕**

体育の時間に男の先生の指導で、竹槍の訓練をすることになりました。10人ずつくらいが鉢巻きを締めて一列に並び、「ヤアヤア」と掛け声を掛けて竹槍で突く訓練をしました。防空演習もありました。これは、上から藁縄で出来た輪を吊るし、その輪の中へバケツの水を掛ける練習でした。

中川 賀津子さん〔昭和18年(1943年)に藤樹高等女学校に入学〕

体育の時間に、薙刀の授業がありました。講堂に、木製の薙刀がずらっと並んでいました。

葛見 幸枝さん〔昭和18年(1943年)に藤樹高等女学校に入学〕

軍事教練の授業もありましたね。沢先生でした。滋賀師範(学校)出身で一度軍隊に行っておられ、下士官だったと思うけれど。主に、行進の練習でした。沢先生にも召集令状が来て、校庭でお別れ会をしたことを覚えています。

コラム 高等女学校における校友会誌

県内の高等女学校の中には、作文集や校友会誌を刊行した学校があります。彦根高等女学校では、「校友会誌」、同窓会誌の「芹汀(きんてい)」、作文集「花がたみ」等を刊行しました。また、大津市高等女学校の校友会・貞友会が「ながら」を発行しました。学校と卒業生をつなぐ校友会誌等の冊子の刊行は、高等女学校の発展の象徴といえます。なかなか終わらない戦争は、女学生の学校生活を変えてゆきました。

彦根高等女学校『花がたみ』

昭和3年(1928年)10月からはじまった彦根高等女学校の作文集です。

生みの親は藤川助三先生です。重要な科目でありながら、顧みられない作文の上達のために刊行することにしました。

藤川先生は、作文の上達への道には「よい文をよく読むこと」として、「それが学友の文であると、(中略)これを読んで容易に共鳴共感し、容易に作者に味到(内容などを十分に味わいつくす)し得る」と示しています。

作文集のタイトル「花がたみ」は、花を盛る籠のことを指します。「野辺を彩る千紫万紅(色とりどりの花が咲きみだれているようす。色あざやかなさま)とりどりの草花の中から、色香の妙なるを摘みとって、この花がたみに盛り上げようという心」で名づけられました。



学徒勤労働員体制の強化

日中戦争以降、出征した男性の労働力を補うために、中等教育機関以上の生徒たちは、食糧増産や軍需品の生産等のため働かされました。文部省は昭和13年(1938年)に「集团的勤労作業運動実施ニ関スル件」を通牒しました。学校はそれを受けて、夏休み等の3日~5日間、農事や家事、軍需工場等へ学生・生徒たちを働かせました。

しかし、戦争の長期化により、学生・生徒の動員体制はさまざまなかたちで進められていきました。昭和18年(1943年)の「学徒戦時動員体制確立要綱」が閣議決定。「有事即応ノ態勢」では、「勤労働員ヲ強化」を目的に、女子生徒の場合は、戦時救護の訓練の実施が求められました。さらに、1年のうち3分の1の期間を勤労働員にあてるようになっていきました。

昭和19年(1944年)、学生・生徒の勤労働員体制はさらに強化されていきました。「決戦非常措置要綱ニ基ク学徒動員実施要綱」の閣議決定によって、「通年動員」が開始され、これまで、勤労働員の対象外とされた中等学校1・2年生と国民学校高等科児童まで拡大し、働くことになりました。

同年12月には、中等学校卒業者の勤労働員の継続の措置がとられました。また、翌年3月卒業を予定している生徒を引き続き動員するために、中等学校の付設課程を設けて、進学させることもしました。

【体験談—女学校の生徒が託児所を手伝ってくれました】

木津 龍尊さん(愛荘町)

愛荘町の信光寺の住職だった木津龍尊さんは、日曜学校と託児所を開いておられました。

日曜学校は、大正4年(1915年)頃からずっとやらしてもらってます。それはもうずっと続いておりましたが、戦争が段々おこってまいりました。そして、季節の託児所、子供を預かる仕事ですね。春と秋の農繁期に託児所をここで開き、学校行くまでの子供を預かりました。

昭和12年(1937年)時分には、もうありましたんで、その時分からずっと開いてたんです。それが終戦まで続きました。ほとんど家内と二人でやらし

てもらいました。ほんで戦争が激しくなりますと、女学校の生徒が手伝いにきてくれました。

【体験談一畑仕事が上手になりました】

水野 澄子さん（大津市）

中島 美佐子さん（東近江市）

日野高等女学校の同級生だった水野さんと中島さんが、勤労奉仕先としていった農作業について語っています。

水野さん 被服科もなくなってしまっ。先輩らと私らと、そして、1年下に妹がいるんですよ。その3学年ぐらいが、一番犠牲になってるんです。勉強は習えなくてね。

中島さん ほの代わり、畑仕事は上手になった。

水野さん 畑やとか、もの作るの。それでね、卒業式の写真やらクラス会の写真を見るとね、お嫁さんがね、お母さんやっぱり皆、手が太いですね、言われててね。土鍬振るったり。ここの手が皆ね、細い人でも、ごついです。やっぱり骨組みがね。土鍬振るてたから、そら、仕方ないわね。



稲刈りの奉仕作業 日野高等女学校



稲刈りの奉仕作業 日野高等女学校

【体験談一2年生になると勤労奉仕が始まりました】

葛見 幸枝さん（高島市）

葛見幸枝さんが藤樹高等女学校の2年生になると、勤労奉仕が始まりました。

稲刈り・麦刈り、薪運び、暗渠排水の作業などに出かけました。薪運びは、学校から高島の中溝あたりまで歩いて行って、薪を背負って来るんです。軍需用の燃料になると聞いていました。一日に10束くらい。山から丸太の一本橋を渡って、車の通る本道まで下りてくるんです。真っ白な細長い袋に弁当を入れ、それを斜めに肩に掛け、予備の草履も下げて。運べない人の分は、皆で助け合って運び出しました。

暗渠排水の作業場所は、今の箱館山スキー場麓の湿田なのですが、田んぼの中に大きな溝を掘って、松の枝を埋めるんです。これで排水をよくするんです。

他にも、今津の岸脇地区で蚕のエサになる桑の葉っぱを摘むんです。「室」といって小屋の畳3枚くらいの大きな穴が掘ってあり、その中へはしごで下りて行き、桑の葉を千切る作業もありました。この作業は何回もなかったけれど。

それから、北船木で、蚕の臓器の一部分、茶褐色の蛆虫みたいなものを、お酢のような液に漬け、一本の糸に伸ばして乾燥する仕事もありました。ものすごく臭いがきつかったことを覚えています。この糸は、戦地で負傷した兵隊さんの傷口を縫う糸になるんだと聞いていました。

【体験談一3日間、兵隊さんと同じことをささはった】

小澤 富美子さん（守山市）

愛知高等女学校3年生の時、小澤富美子さんは、舞鶴海兵団の海洋訓練に参加しました。女子生徒に海軍の訓練を体験させて、そのきびしさを実感させようとしたものでした。訓練は3日間でしたが、海兵団に入団したての新兵が行う訓練と生活を体験したのです。

舞鶴でね、3日間の海洋訓練。もう、兵隊さんと同じことをささはった。手旗信号から、カッター漕いだり、天突き体操も教えてもらた。食べるもんも

同じもん食べて。

海軍はね、5分前という訓練。5分前。起床ラッパを吹いた時に起きてては遅い。ラッパ吹いたらすぐ集合。ラッパ鳴ってから起きてては遅いの。ターーと行って、5分前集合せなあかんにや。だから、うかうか寝てられへん。

修学旅行がなくなっていた当時、小澤さんたちは、こうした海洋訓練にもみんな行きたがったといいます。半分遊びに行くという気分があったのですが、実際はきつい訓練となりました。

また小澤さんたちは、このほかにも、1カ月の間、病院で怪我人や病人を看護する体験もあり、4年生の時には軍需工場への学徒動員に参加することになります。



舞鶴海兵団での海洋訓練時の集合写真

高等女学校から農学校への転換

戦争の長期化は、中等教育機関とそこへ通う生徒に影響を及ぼしました。しかし、それだけではありませんでした。高等女学校から農学校への転換です。男子労働力不足を補う女子労働力の育成や食料増産対策の観点から、県内では女子教育の中に農業教育の普及が求められました。

寺庄・南柚・龍池・宮（今の甲賀市甲南町）の女子らが通う高等女学校は、昭和19年（1944年）に甲南町立甲南女子農学校（翌年に県立となる）へ学校名を変更しました。同年には、野洲郡立女子農芸学校が開校しています。

また、この頃の県内の中等学校では、彦根商業学校が廃校、神崎商業学校が神崎農学校へ。大津商業学校と長浜商業学校が工業学校へ転換しています。

学校工場

日中戦争以降、中等学校に通う学生たちは、軍需品の生産や食料増産等を理由に動員されました。また学校校舎の一部を軍需工場へ提供し、そこに学生たちを働かせました。

県内の高等女学校内にあった軍需工場

県立大津高等女学校...雨天体操場に吉田電機の学校工場を設置。

大津市立高等女学校...雨天体操場に山口特殊電線株式会社の学校工場を設置。

滋賀高等女子実業学校...山添発条の学校工場を設置。

藤樹高等女学校...裁縫室で軍用蚊帳の製作。寺内製作所が体育館に疎開。

水口高等女学校...学校が主体となり、独自に真綿製造工場を設置。

日野高等女学校...講堂などに住友通信工業が移転。

八幡高等女学校...体育館に軍需工場が移転。

淡海高等女学校...昭光工業の学校工場を設置。

彦根女子商業学校...講堂などに学校工場を設置。

長浜高等女学校...屋内体操場に豊国航空の学校工場を設置。

【体験談—5年生になったら真綿づくりばかり】

上村 清子さん（甲賀市）

昭和14年（1939年）に水口高等女学校に入学した上村清子さんは、5年生になった頃から学校で真綿づくりをするようになりました。水口高等女学校では、学校が主体となって真綿製造をしていました。

5年と4年と3年は真綿づくり、ほんで2年・1年は繭の炊き番なんです。もう、全員でやりました。5年生になったら、勉強はぜんぜんありませんでした。真綿づくりばかり。

朝早う行って、もう7時半ごろから学校に着いて、タライに水をくんで、それから下級生がきばって薪で繭を炊いてはるねん。繭を入れたドンゴロス（麻製の袋）に南京虫が付いてるんです。すると下級生は、そこらが痒うなってくるんです。

その繭を剥くとサナギが出てきますでしょ。それを集めて先生がふりかけを作らったんです。煎って粉にしてあるんです。食べましたよ。そんなん、

食べな、みんな食べさせられてた。

真綿を作るための学校の改装みたいなことはしません、大きな鍋を買ったりねえ、鉄の釜やっと思えますけど、それからタライを置く台とか、腰掛けとか、そんなんは用意されましたけど。廊下は全部ダア〜とタライが並んで、タライは家から持って行きましたね。

みんな廊下に並んで、だから教室は空っぽ。真綿は1日30〜40枚ぐらいできたかなあ、それを講堂で乾かしますねん。ザアッと並べて。たぶん、この辺りは昔は真綿をつくってたから、道具とかもあると思わはったんと違うやろか。せやけど、水口女学校の生徒は皆はじめてやった。「どうなることやなあ」といいながら。

今で言うたら中学2年と1年の歳やから、ちょっと大変なことやったやろねえ。仕事がきつかったんか、どやしらんけど、私らより2年下の人が、ある日作業が終わったら倒れて静養室へ入れはったら、急性脳膜炎でその晩に亡くなったり、それと水をか

ぶるんで、リュウマチになった人や、「胸がえらい、胸がえらい」と言わはる人が結核になったり。

作業中はもう喋ったらダメ、先生が見に回わらはるんです。兵隊さんはいなかったような気がしますね。ほんでに、県庁からは偉いさんが視察に来やはったことはあります。ノルマはなかったね。だいたい30枚か40枚は作ってくださいと言われるんやけど。



水口高等女学校卒業式



展示風景

第3章 勉強よりも増産—滋賀県女子学徒勤労報国隊を中心に—



滋賀県女子学徒勤労報国隊として 日野高等女学校の生徒

1) 滋賀県女子学徒勤労報国隊

滋賀県では、昭和19年(1944年)7月24日に県内の高等女学校13校の生徒らが名古屋の軍需工場へ学徒勤労動員のため出発しました。この時、女学生徒たちにつけられた名称が「女子学徒勤労報国隊」でした。当時の新聞報道をみると、「女子学徒勤労報国隊として「お国のために」、「女でもできることを」等の女学生の決意がうかがえます。

しかし、実際の動員先の環境は厳しいものでした。慣れない工場作業や十分な食事が摂れなかったことによって体調を崩してしまう女学生もいました。さ

らに、昭和19年(1944年)末に発生した東南海地震と軍需工場を狙った空襲が女学生を襲いました。

2) 滋賀県女子学徒勤労報国隊として参加した県内の高等女学校と配属先工場

○13学校、約2,000名の女学生が参加しました
愛知高等女学校、大津高等女学校、大津市立高等女学校、木之本高等女学校、草津高等女学校、甲南女子農学校、滋賀高等女子実業学校、淡海高等女学校、藤樹高等女学校、彦根高等女学校、日野高等女学校、水口高等女学校、八幡高等女学校

○配属先工場

岡本工業 笠寺工場、三菱電機 大曾根工場、三菱重工業航空機製作所 大江工場、道徳工場

※水谷孝信『滋賀県学徒勤労動員の記録』（ウインかもがわ 2005年）をもとに作成しました。

滋賀県女子学徒勤労報国隊として



昭和十九年七月六日 写
靴はついに学園にまで伸びかよわき
女学生も生産第一線に出動せねばなら
なかった。
滋賀県女子学徒勤労報国隊として
名古屋へ出動を目前にひかえて。



小澤 富美子さん 提供

愛知高等女学校の生徒の手記より

「滋賀県女子学徒勤労報国隊員として」

滋賀新聞 昭和 19 年 7 月 22 日



滋賀新聞 昭和 19 年 (1944 年) 7 月 22 日付

【体験談—2 学期から学徒動員で名古屋へ行きました】

T さん (東近江市)

O.Y さん (東近江市)

O.M さん (愛荘町)

昭和 19 年 (1944 年)、彦根高等女学校 4 年生の時に、学徒動員で三菱電機名古屋製作所へ行きました。

O.M さん ほのときに学徒動員や。私が行かなあかん、始まんいうて言うときやがな。県立の彦女、1 番が行かんことには滋賀県はおさまらん。勢いよくて達者やった、あんときは。

T さん 大曾根 (名古屋) 行ったの。

O.M さん うん。1 年は違うとこやったでな。たしか、名古屋三菱電機やったのよ。なんせ 4 年生はな仕事終えてから勉強やったで。ほんな、疲れてんにや。勉強って、頭に入るわけないやろ。ほんで私は四尺旋盤から、一尺 (約 30cm)、三尺、四尺。旋盤工やったのよ。こんなボルトやらを削ってな。男勝りなんしてきたんやでな、私らは。何の部品かは、あんなん秘密やわな。

私ら機械やったさかいにな。ほんなもん、男勝りで行かんならんやん。四尺旋盤でな。ご存じか知らん、あるやろ? あれを動かすのよ。よう研ぎに行つてな。バリ取り。四尺、ピーッと電気入れてな。楽しかったよ。鉄の棒なつたのを削るんや。不思議ですな。道具は自分ら研いだのよ。切れやんだら。体が丈夫で健康、ほんなもんは機械班。

O.Y さん ほや、仕上げのな。電線の線つなぎやな。電線の先っぽを皮むいて線つなぐとかな、ほういうことやったな。

O.M さん 仕事は機械班と仕上げ班のふたつに分かれてた。ほてな、仕事も違うのよ、ころっと。

【体験談—名古屋の勤労働員時の食事】

岡田 光子さん (日野町)
多中 久子さん (東近江市)
中島 美佐子さん (東近江市)
小杉 愛子さん (東近江市)
治武 ひでさん (甲賀市)
水野 澄子さん (大津市)

食事らしい食事ができなくなり生理がとまってしま

中島さん ほんで、やっぱり女ですやろ。メンス (月経) なんかもその月から止まったな。
多中さん 私らも止まってしまったな。食べるものがないし。
水野さん もう、私も半年ぐらいなかった。
中島さん 全然。身体がころっと変わってな。
治部さん そやけど、まだ家にいる時はないと言いつつながら、まだ、食事らしい食事をな。
中島さん 豆が落ちたっても、気になったね。
水野さん もやしがね、雪の道にね、落ちてたんですよ。そして、その上を踏んで通って行くわけですよ、みんな。そのもやしを踏むのが、もったなくて、ああ、もったいないと思って。

ベタドロ

水野さん ベタドロちゅうあざなや。それがね、カレーライス風のね、具が入ってない。
小杉さん もやしと豆腐がのってるにや。
中島さん カレーライスの具も全然入ってない。あれがまずかったんや、一番。
水野さん 「また、今日も」と言った。
小杉さん ほんで、ベタドロとかドロベタとかゆうてた。ネターンとして、ドロドロで。食

べたくない。

中島さん みんなゆうてたんや。

【体験談—学徒勤労報国隊のこと①—昭和 19 年 (1944 年) 7 月から年末まで—】

土井 節子さん (大津市)

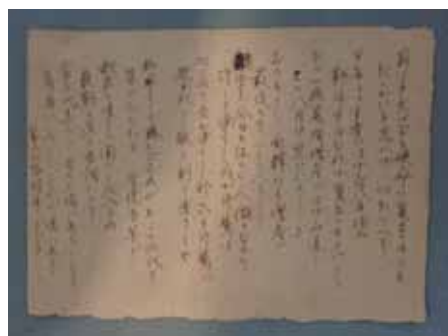
土井節子さんは、大津高等女学校 5 年生の時に、滋賀県女子学徒勤労報国隊として名古屋の岡本工業笠寺工場に動員されました。

大津高等女学校 5 年生 200 人 (1 クラス 50 人、忠・孝・仁・義の 4 クラス) が学徒勤労報国隊として笠寺工場に動員されたのは、昭和 19 年 (1944 年) 7 月 27 日です。彦根高女や、新潟県の十日町中学の男子生徒も一緒でした。私たち女子生徒は工場の寮に入りました。

岡本工業笠寺工場では、飛行機の脚を作っていました。勤労学徒としての作業は、組み立て・旋盤・ミーリング・フライス・検査・事務などがありました。先生が生徒の適性を見て振り分けられるのですが、身体の丈夫な者は現場作業に配置されました。私たちは、それぞれ「お国のために役立っている」と考え、誇りに思っていました。

私は、飛行機の車輪にカバーを取り付ける作業に従事していました。ジュラルミンの板をはさみで切り、やすりで削って鉋で止めて行く仕事です。おもりを下げ、芯を正確に合わせるが大変難しいのですが、一回で簡単に合わせてしまう素晴らしい技術を持った仲間もいました。皆、「神風日の丸」のはちまきを締め、頑張りました。このはちまきは汚れたら洗い、また汚れたら洗いして使いました。当時のもので残っているのは、この「神風日の丸」のはちまきだけです。

私たちは何かあると、「学徒動員の歌」を歌いました。毎朝、部屋ごとに点呼をとり、整列して出勤しました。最初のころは、夜、一室に集まり、教科書を開いて学習することもありましたが、昼間働いていると疲れて、夜の学習は出来なくなりました。休日には、家にあてて手紙を書いたり、歌を歌ったり、本を読んだりして過ごしました。先生に笠寺観音に連れてもらったこともあるし、後に岐阜に移ってからは揖斐川へ月見草を見に行ったり養老の滝まで連



勤労働員中につくった短歌

れて行ってもらったこともあり、それは楽しかった思い出のひとつです。食事は食堂で、みんなと一緒に大豆やコーリヤンの入った丼ご飯を食べました。鰯や、毛が生えたままの豚肉などが副食に出てきました。夜勤の時は、すいとんなどの夜食が出ました。



はちまき「神風」

【体験談—12月7日の東南海地震】

- 岡田 光子さん (日野町)
- 多中 久子さん (東近江市)
- 中島 美佐子さん (東近江市)
- 小杉 愛子さん (東近江市)
- 治武 ひでさん (甲賀市)
- 水野 澄子さん (大津市)

工場で作業していた女学生

- 水野さん ものすごい、ひどいでしたんですよ。
- 小杉さん 震度 7 ぐらいあったんや。
- 水野さん 現場事務の 4 人か 5 人がね、ぱっと出たわええけど。クローラメッキや。亜鉛メッキやら滅茶苦茶。揺れてね。動きがとれへんで。ふっと見たら、高圧線が揺れてね、あれがちぎれたら死ぬわーと、思った。
- 小杉さん 午後 1 時 36 分。私はこの時社長室へ使いに行っってね、3 階が社長室でしたんよ。今でいう非常階段の鉄骨の、そこの階段を出た途端にね、こんななってね、降りられへん、どうにか降りてね。ほしたら、憲兵さんが「伏せ。」ゆわはったでね、防空帽被ってね、伏せたんや。地震も何もわからへんね。ほんで、それこそ貯水槽の水がじゃぼーん、じゃぼーんとなっったですわ。ほんで、「伏せ。」ゆうて、後休んでからね、人員点呼あったんね。

寮の壁に亀裂が入る

- 岡田さん 寮の二階にいましてね。真ん中が廊下で両方に小さい部屋があったんです。みんなとりあえず、ほの、真ん中の廊下に出たんですね。
- 中島さん 私、逃げると地が割れてよ。
- 岡田さん 屋根がそのまま落ちてきやへんかなと思って。
- 水野さん 寮は潰れませんでしたけどね、亀裂がいてましたわ。



勤労働員時に書き綴った日記
(日野高等女学校の生徒)

3) 名古屋の空襲

滋賀県の女学校の生徒らが動員された三菱電機や岡本工業等の多くの工場が立地する名古屋は、工業都市でした。また、航空機生産の拠点であったため、アメリカ軍の目標爆撃の対象となっていました。昭和 19 年 (1944 年) 末から、アメリカ軍による空襲がたびたび行われました。アメリカ軍による名古屋への空襲は、63 回行われました。

【体験談—学徒勤労報国隊のこと②—激しくなる空襲と合同卒業式—】

土井 節子さん (大津市)

土井節子さんは、大津高等女学校 5 年生の時に、滋賀県女子学徒勤労報国隊として名古屋の岡本工業笠寺工場に動員されました。昭和 20 年 (1945 年) から卒業式までのことを語っています。

空襲

昭和 20 年 (1945 年) のお正月も帰郷せずがんばりました。名古屋への空襲が始まり、それが激しくなってきました。窓の外に防空壕が作られ、空襲のときには壕へ避難しましたが、近くに爆弾が落ちる

とその震動で、上からパラパラと土が落ちてきました。身体も 30 センチメートルほど跳び上がりました。

卒業式

その年の大津高女の卒業式は、笠寺工場の体育館で行われました。それまで、大津高女の卒業式で歌われたのは「卒業のうた」(学びの道に果てしはなけれど／学びの月日に限りぞありける)で、在校生が(万歳、万歳、万歳／山辺も野辺もかすみ渡り)と祝ってくれるのですが、この時は「海行かば」を歌っての卒業式になりました。

卒業式は済ませたものの、私を含めほとんどの人が専攻科に残る形で、引き続き工場で働くことになりました。女子専門学校に進む一部の人がだけ帰って行きました。

【体験談—お布団を持って防空壕へ入りました】

T さん (東近江市)

O.Y さん (東近江市)

O.M さん (愛荘町)

名古屋は、工業都市であり航空機生産の拠点であったため、アメリカ軍の目標爆撃の対象となっていました。昭和 19 年 (1944 年) 末から、アメリカ軍による空襲がたびたび行われました。三菱電機名古屋製作所で勤労働員を経験された彦根高等女学校の女学生の空襲体験です。

O.M さん 空襲いうたら慣れたもんや、もう。ちゃんところ見るやろ、空を。

T さん 向こうの空。

O.M さん ほとん、あ、今日はこっち来よった、こっち攻める。あ、今度こっち逃げたらええ。あ、今日はこっちや。もう大体飛んで来よる空気とか何やして分かってくるにやわ。もう。怖いもんな。

一方通行しか、しよらへん。編隊組んで来やるやんが。でさかいもう、編隊やさかい崩せへんから決まったコースやんが。で、こっちはほれを見て、あ、今度この道来よる、ほなこっち逃げたらええにや。

O.Y さん 防空壕やな。

O.M さん 防空壕にしても道を逃げるにしても、(敵機の) 反対行ったらええんや。ほらもう、行きよるさかいに。

O.Y さん うん、ほうよ。布団持ってな。布団をかぶって。みんながかぶって (笑)。

O.M さん 頭にかぶるのよ。防空頭巾かぶって、ほんな追つかへんさかい。ほら寒うなったりするさかいによ。

T さん お布団持って行ったな。

O.M さん 昼間は仕事行って、(空襲があつたら) ほのままピャーッと逃げるんやさかいに。昼もあつた。夜明けが多かつた。ひどいときはもう靴履いて寝たで。

【体験談—学徒勤労報国隊のこと③—工場の疎開と終戦—】

土井 節子さん (大津市)

昭和 20 年 (1945 年) 4 月、土井節子さんは、大津高等女学校の専攻科へ進学し、引き続き滋賀県女子学徒勤労報国隊として名古屋の岡本工業笠寺工場に動員されました。

工場疎開

空襲はますます激しくなり、笠寺工場も危険になって来ました。そのため、私たちは同じ岡本工業の岐阜県神戸工場に移動することになりました。昭和 20 年 (1945 年) 4 月ごろ、疎開先の神戸工場へ送ってもらう予定で荷造りしておいた荷物が、笠寺工場への爆撃で全部焼けてしまいました。

岐阜の神戸に移ってから、毎夜のように警戒警報・空襲警報が発令されました。私たちは、夜は枕元に防空頭巾を置いて寝ていました。

同年 7 月、「大垣を空襲する」とのビラが米軍機から撒かれました。そして予告通り、大垣市への大空襲がありました。私たちは、警報が出たので荷物を持ち、近くのお寺に避難しました。その途中、頭上で照明弾がパーッと明るく炸裂しました。「やられたっ」と思い、耳と目を両手で抑え、口を開けてその場に伏せました。焼夷弾は隣村に落とされましたが、私たちは無事でした。やがて、天を突く真っ赤な炎や黒い煙が轟音とともに見えました。大垣市街が燃えさかり、逃げまどっているのであろう人々の阿鼻

叫喚までが、私たちの所に聞こえて来ました。

終戦

8月に入ってから、私は体調を崩しました。先生は、何か理由があれば生徒を滋賀に戻そうとしておられました。8月8日、私ともう一人の級友が、先生の引っ張って下さる食堂のリヤカーで駅に送られました。大津に着くと、帰郷したことを校長先生に報告しました。

そしてその一週間後に敗戦の日を迎えたのです。毎日、不安な日を送っていましたが、まさか日本が負けるとは思っていませんでしたから、本当に驚きました。

4) 空襲と工場からの引揚げ

滋賀県女子学徒勤労報国隊の生徒たちが動員された工場が立地する名古屋は、工業都市であり、また航空機生産の拠点であったため、激しい空襲が襲います。度重なる空襲と東南海の地震により、軍需品を生産できない工場もありました。昭和20年(1945年)には、名古屋から岐阜県や富山県へ工場を疎開させていきました。滋賀県女子学徒勤労報国隊として参加した学校は、工場とともに疎開し、生産に勤めました。

親から女学生を預かる学校にとって、動員先の名古屋への空襲は大変恐ろしいものでした。学校工場で働かせるという理由をつけて、女学生を故郷へ引揚げた学校もありました。

【傳田校長先生の決断】

昭和19年(1944年)末から、軍需工場が集積する名古屋への空襲が激しくなっていきます。合同卒業式後、日野高等女学校の女学生たちが作業する工場は、岐阜県大垣の奥町工場へ疎開することになります。

しかし、当時の日野高等女学校の傳田校長先生は、学校工場で働かせるという名目のもと、女学生たちを日野へ連れて帰ることを決断しました。動員中の女学生たちは、急いで身の回りの物を持って帰郷しました。



甲西寮 日野高等女学校専攻科の生徒



日野高等女学校専攻科の卒業式
(工場の寮にて)



展示風景

5) 県内に残った女学生

【体験談—銃後を守るために勉強はちょっと置いといて】

帛丘 美代さん（近江八幡市）

昭和19年（1944年）4月に近江高等女学校に進学した帛丘美代さんは、勤労働員として入学してすぐに工場で働きました。



近江高等女学校入学時（昭和19年）

1年間勉強は皆ちょっと置いといて、というふうな指令が出たからこそ、もう、その（昭和20）年度になったら、昼働いてね、半分働いて半分勉強ちゅうのは、私とこも無くなったんですよ。だからね、（授業は）2時間ぐらいになった。

朝から晩までね、（勤労働員に）行かんなんですから。あっちやこっちやね。そういう時代では、非常にややこしい時代ではあったちゅうことは言えますね。

一番やっぱり印象に残ってんのは、先生も熱心やったか知りませんがね、そういう、今のほの日本の事情、戦争の事情とかね。そのために国民皆兵ね、皆、兵隊になるんやとかね。全員、学徒動員やないでと。もうあんたら学徒やないんやと。みな働く勤労働員やと。銃後を守るためにはな、勉強ちょっと置いといて、ほてから、みんなね、兵隊さん皆いやはらへんねんからね、あんたら女子が中心になって働かならんという、その勤労働員で。だから多分ね、最後の（昭和）20年4月以降はね、出ると思うんですわ。

最初行ったときは学徒動員という感じであったんで。ほんで学徒も働かなあかん。動員して。で、それが（昭和）20年度になったら、もうそんなこと

してられへんにやと。みんなが働いて銃後を守るんやと、日本全部そういうふうな雰囲気。学生という言葉をね、「学徒」ちゅう言葉を使わん。何かそういうふうな。

【体験談—「決戦服」を着て学校に行きました】

上村 清子さん（甲賀市）

戦時中に水口高等女学校に通っていた方の体験談です。当時の女学生は、戦場にいる兵士と同様に戦うという気持ちを持ち、セーラー服から「決戦服」とよばれる服を着て、勤労働員の作業にはげみました。

そらあ、もう、みんなが大変なときでした。靴はあらへんし、藁草履やったな。どうにかズックを手に入れて、堅田（現大津市）の工場（住友金属）へ行きましたけどよ。学校へ通うてる間は、もう下駄か藁草履ですな、女学校の中では藁草履。みんなが革靴を履いて学校へ通うたんは1年生まででした。

写真は5年生の時、卒業の年ですな（昭和18年か19年頃）。これはなあ、ほんとはセーラー服ですわね。それが、決戦服という名前になって、それを着たいもんが着て。写真に写っているのは、決戦服です。下はモンペです。この写真は先生に内緒で写しに行ってる。水口にフジタという写真屋があるねん。みんなでな、こそこそと、見つかったら怒られるから。

決戦服を着て、学校へ行きました。学校では、体操服を着て、エプロンをかけて仕事をしていました。



決戦服を着て撮影
（水口高等女学校の生徒）

【体験談—みんな、はちまき締めてゲートル。勇ましい格好です。】

森田 恵美子さん（守山市）

森田恵美子さんは、学徒動員で草津の敷島帆布へ行きました。

昭和19年（1944年）に滋賀師範学校女子部に入學して、昭和20年（1945年）の4月からね、学徒動員で草津の敷島帆布へ行って、背囊などの織物、ズックを織っておりました。ああいうものの織物を、この大きな機械動かしてやっておりましたの。4月から、8月までですね。終戦まで。

草津のね、駅からずっと下りた、まあ昔の駅ですけど、ちょっと行ったところにね、敷島帆布があったんです。大路町ゆうのかね。今で言うたら、大路。草津のね、その辺り。

これが、敷島帆布の入社式です。みんな、はちまき締めてゲートル。勇ましい格好です。下はモンペです。上は、国民服みたいな服をくれはったんでしょね、会社が。日の丸のはちまきを締めていました。

彦根への空襲

彦根の周辺では、昭和20年（1945年）の5月から7月にかけて7回空襲の被害を確認しています。彦根市田原付近では、約900発の焼夷弾が田地に着弾しました。

昭和20年（1945年）5月14日の空襲

名古屋へ向かう500機のアメリカ軍のB-29が彦根上空を通過中に、日本機が迎え撃とうとしました。その流れ弾の破片によって旭森国民学校（今の彦根市立旭森小学校）の児童5名が負傷しました。

展示した機銃弾の破片は、空襲のあった周辺に落ちていたもので、提供いただいた方も負傷しました。

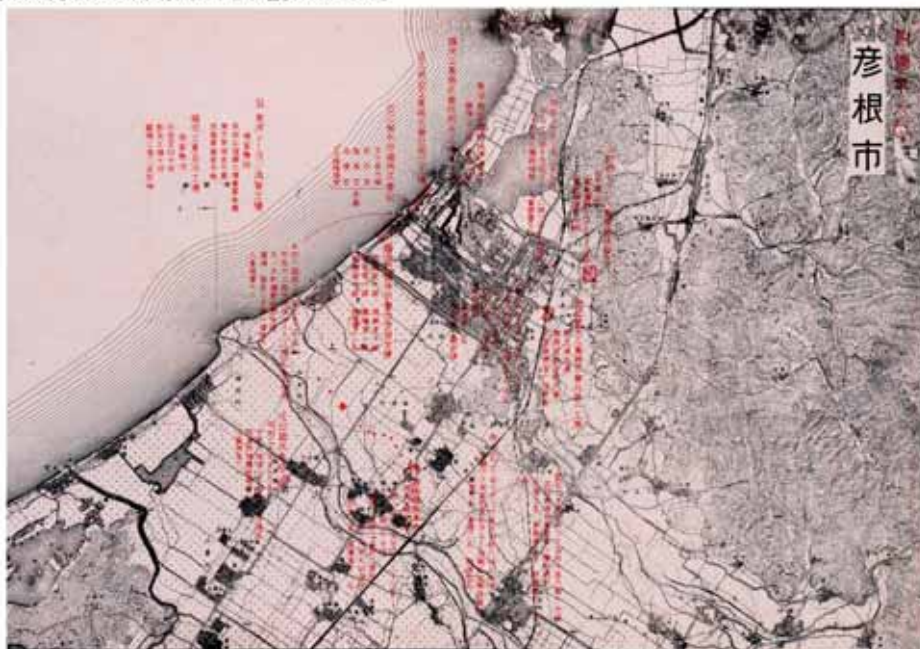
【体験談—「南無阿彌陀仏」言いもって、机の下に隠れました。】

Nさん（東近江市）

昭和20年（1945年）5月以降になると、滋賀県各地で空襲が行われました。高田工場のある彦根周辺では、アメリカ軍のB-29や艦載機が頻繁に飛来しました。動員先の高田工場で働いていた愛知高等女学校のNさんは、工場の炊事場で空襲に遭いました。

彦根への空襲

彦根では、昭和20年5月から7月にかけて7回、空襲の被害を確認しています。また、彦根市田原付近では、約900発ほどの焼夷弾が田地に着弾しました。



戦災概況図 彦根 国立国会図書館所蔵

私はね、そのとき食事当番でしたんや。食事の準備に行っせん、当番やで。それ、行くなり、空襲警報で、バンバンッやさかいに、怖あてみんなのとこ逃げに行けへんねん。隊の中へ。仲間の中へ。

ほんでな、「こんなしたらあかんにや、隠れよっ」言わはって。ほしたら、もうごはん炊き終わって、炊事の釜が下向けてあった。ほて、「この釜の下へ入ったらどうもないわ」いうてな、釜の中に入った、4、5人が。ほいたらね、音がだんだんと聞こえへんかったさかい、今のうちに皆のいるとこ行きたいわけや、うちらだけ離れてるわけ。ほて、出てきたら、「何やってるっ」いうて怒られてな、回ってはる工員さんの警備の人に。「机の中入れっ」言わはって。また、この食堂のなか入ってきてな、机の下へもぐった。ほしたら食堂の前が、電気の何かしやはる、大事な建物やったらしいわ。ほこ目がけてグラマンが、バアーツと来よるのよ。中に乗ってはる人も見えるの。

乗ってはる人も見えて、ピューッと突っ込んで。「はあ、もう死んだわ。南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏」言いもって、皆、机の中に隠れて。ほんだけど、ほこへ落ちんと前のほうで煙出たるにゃんか。

ほしてから皆んとこ行って。やっと皆のとこへ行った。ほんで田んぼのとこまでね、私ら、防空カバンも何にも持たんとよ。炊事の袋だけ持ってよ。そこには防空壕ちゆなもん、あらへんにや。工場から離れなあかんから、田んぼのほうへ逃げた。たいてい田んぼのふちは、木が植えてましたんや。

【体験談—爆風のショックで倒れてしまいました。】

A さん（甲賀市）

水口高等女学校4年生だったAさんは、学徒動員により大津市にあった住友電気通信工業で働くことになりました。

住友電気通信工業へ10人、近江航空へ35人が派遣されました。私は、住友電気通信工業へ動員されたんです。

女子職員寮として金波楼（大津市膳所にあった旅館）があてられ、膳所から電車で石山の工場へ通いました。寮の食事は、ひじきの一杯入った御飯とか米糠のパン、じゃがいも、そしてシジミのお汁など

でした。

工場では「真空管」「音響」「営繕」などの課があって、私は営繕課の事務をしました。職員と工員の出入りの通用門は別になっていて、職員は黒の井桁のバッチを、工員はグリーンの井桁のバッチをつけていました。東洋レーヨンの空襲の時（昭和20年（1945年）7月24日）、私はたまたま工場内を歩いていたんですが、爆風のショックで思わず倒れてしまいました。それだけ強い爆風が吹いたんです。

【体験談—女学生に部品を張り付ける作業をしてもらいました。】

H さん（東近江市）

現在の彦根市高宮にあった滋賀航空工業株式会社では、高宮高等女学校の生徒たちが学徒動員で働いていました。滋賀航空工業で女学生に作業の方法を教えた方の体験談です。

会社の前の名前は、箕福紡績。箕の中におたやん（お多福）が住む、それがマークでしたんや。ほんで箕福紡績ちゆう名前付けてましたんや。なんや飛行機に箕福ちゆうなの、似合わんで。滋賀県やで、滋賀航空工業株式会社に改めたんですわ。

学徒動員ちゆうのはね、彦根の高宮ちゆうとこにな、高等女学校がありましたんや。彦根には彦根高等女学校ちゆうのがおしたけどな。高宮には、昔の裁縫学校だった女学校があつて。使ってくれちゆうんで。大きい学校やなかったから、50人ぐらいまでやと思います。来てました、学徒動員で。

女学校の生徒さんは、いちばんしやすいリブ（あばら骨）みたいな物、小骨ちゆうのかな、小骨の製作をしていました。接着して、各型に曲げるように。まあ、言うたら型がこしらえてましてな、それにはめ込んでいって、止めていいたらええにやで、ちょっと習ろたらできます。こんな板の上にな、こんなぐらいの厚みの枠が組んでますにや。こんな飛行機の羽の小骨の。小骨ちゆうても、こっからこのぐらいのもんで小さいもんですよ。それを張り付ける作業でした。

【体験談—希望して銀行に行かせてもらったんです。】

Kさん（東近江市）
愛知高等女学校に通っていたKさんは、学徒動員により銀行で働いていました。

私は小さい頃からそろばんが好きでしたので、昭和19年（1944年）、希望して学徒動員で滋賀銀行に行かせてもらったんです。家から10分のところに滋賀銀行がありました。17歳のころです。一週間ほどね、大津の滋賀銀行の本店さんに泊まり込みで、研修に寄せてもらいました。ほんで、読み上げ算やら、暗算やら、それをお勉強しました。

空襲警報がなると、近くに住んでいるものは銀行へ行くことになっていました。怖かったです。夜中だと、外は真っ暗ですわね。そして銀行のシャッターを降ろさるんです。急いで帳簿を倉庫に片づけに行きますの。それからね、倉庫の前で、何一つしゃべらずに、みんなでじっとしてますねん。空襲警報が解除になりますと、急いで帳簿を元に戻すんです。貯金係でございましたので。

もう、いつ死ぬか分からん。（アメリカ軍の）B29の音とサーチライトがついてるんです。半分死を覚悟しながらね。

同じ女学校から行ったのは私一人でございました。ほんで、他の学校からこられた方がおられまして、その方と二人でした。

私は、終戦まで銀行で働いていました。ですから、（昭和20年8月15日の）天皇陛下の御言葉も銀行で聞きました。学校は、勉強はできませんでしたが、5年生まで通いました。5年生まで仮出席という形でその間は勉強というのはありません。ですから、銀行へ行っていたのが出席という形になるんです。無遅刻・無欠席で銀行に行っていたのが、そのまま学校の出席と同じ扱いになってました。お給料は40円程いただいておりました。

私は窓口にもおりましたが、（預金などの）勧誘にも寄せてもらいました、余所の家に。ほとんど、毎日回ってました。ノルマもあり、これだけの成績を達成しなならんと一生懸命になりました。やっぱり、常にお国のために働こうという気持ちが強かったですね。

【体験談—工場内の青年学校で授業をしていました。】

Oさん
東近江市にあった岡崎製織場は、太平洋戦争に入ると軍需工場となり、飛行機の部品を製造していました。工場内には青年学校が設けられて、従業員に対して夜に授業が行われていたそうです。

岡崎製織場は、明治39年（1906年）に義父が創業しました。大正6年（1917年）に工場が新築され、事業は拡大を続けました。生産品の主体は帯でしたが、絹紬（広帯の布団裏の生地）も縫っていました。様々なスポーツ部ができ、中でも野球部が非常に強かったんです。当時「岡崎製織場」「同、応援歌」「岡崎野球部応援歌」が作られ、それは今も残っています。

昭和18年（1943年）に三菱の傘下に入り、飛行機部品の製造を開始。社名も「岡崎産業」にかわりました。飯盒や飛行機部品（ネジなど）を造り、繊維部では帯を織っていました。

同年には工場内に青年学校が創設され、男子部と女子部がありました。女子従業員・学徒動員の多くの人は寄宿舎に入っていましたが、青年学校女子部は寄宿舎の女子従業員を対象に夜間に授業が行われていました。私は旧の女子専門学校で和・洋裁と国語の教授資格を得ていたので、青年学校でこの2科目のほか算術なども教えていました。

また工場では、国民学校高等科の男子生徒や女子生徒、日野高等女学校の女生徒たちの学徒動員の生徒たちが来ていました。永源寺や愛東から働きに来ていた女工さんもいました。その中で、八日市国民学校高等科2年生の松村さんが旋盤で指を切断し、それが元で死亡したことは忘れられません。

運動場には、学徒動員の人たちによって防空壕が掘られました。終戦直前には艦載機の空襲で、工場の壁にも数発の機関銃弾が撃ち込まれました。

第4章 卒業—それぞれの道へ—

【体験談—専攻科に無理矢理入れられました。】

上村 清子さん（甲賀市）

上村清子さんは、昭和20年（1945年）3月に水口高等女学校の本科を卒業し、翌月の4月に同校の専攻科に進み、引き続き学徒動員として工場で働きました。

昭和19年（1944年）、私は女学校の5年生でした。次の年の春まで（水口高等女学校へ）行って、専攻科に無理矢理入れられて、堅田の工場に行っただけです。全員が専攻科に入れられたんです。農業要員という形で家に待機してた人もいます。私みたいに両親のいる子は専攻科に残って、動員で工場に行ったわけです。

昭和20年（1945年）の4月やったかなあ、堅田に行くようになって、専攻科のとき、寮に入って。あの時は大津から船に乗って行きました。5月から8月の4ヶ月ぐらいやったね。行かんしょうがないし、皆が行かざるもんやさかい、行かんわけにはいかへんし、行きましたん。

ほんでも、もう食べるもんが、あんまりようなかったんです。生徒は藁やら、ふすまやら、藁を粉にしたパン。それが作業の途中でオヤツにあたるんやけど、そのパンが楽しみで。家から大豆の煎ったやつとか、誰かが面会の時に持ってきてもろた奴をみんなで分けて。赤飯が食べたいやろというて、家から赤飯を持って来やはった人がいるのかなあ。それが、カビが生えかけてきたんのに、それ食べてはんの。でんでん虫の炊いたんも出たけど、食べんしょうないでしょ。食べましたけど。穀はついてませんで、食用でんでん虫ってあったんかなあ。ご飯はジャガイモご飯いうて、小さいジャガイモに米粒がついたんねん。ほんで米粒を取ってしもたら、おイモばかり。コーリャンご飯とか、麦ご飯やったら、上等や。白ご飯はぜんぜんあらへん。ほんで大豆のご飯。固うて食べられへんの。それを下級生が豆だけ取って干して、寮に持って帰って食べるようにしやはったらしい。

その時の住友金属へは、専攻科と本科の3年生と2年生が行っていました。4年生は名古屋の工場の

ほうに行かはって、1年生だけが学校に残らはったのかな。

工場では、飛行機のエンジンの基やとかをつくってたんと違うんかなあ。粘土を型に詰めるのやわ。ドンドンドン、ハンマーで叩いて、それをコソッと杵をはずすと形が出てきて。

お風呂は、毎晩入れてくれてはりました。空襲やらがあるときは入れへんわな。夜はだいたいご飯が終わったら自由でした。せやけど、読む本もあらへんし、寝転がって喋ってるくらいでな。ほんで、いつ空襲やわからへんので、靴履いて寝てた。夜中に起きて、山の中に逃げるわな。帰ってからは寝られへん。寝られへんから、明るくの作業がえろうてなあ、指打ったりする。終戦前は、しょっちゅうそういうことがありましたね。

堅田から東を見てると、八日市やとか、東の方が燃えたるのがよう見えて。終戦は工場で知りました。みんな、ワアワア、ワアワア泣かはって、そんなアホなことがあるやろか、と思いましたね。

【体験談—工場から帰って5日後に、小学校へ赴任しました。】

Nさん（日野町）

Nさんは、日野高等女学校専攻科在籍中に名古屋の笠寺工場へ動員され、昭和20年（1945年）3月27日に動員先の工場から帰ってきました。数日後に、山上小学校（現東近江市）の教員として赴任しました。

もうあと、日があらへんわね。すぐに先生してたわけよ。何にも勉強してへんのに。始業式に来なさいゆうて辞令もらったけど、山上小学校でどんなとこやわからへんでしょう？で、電話したの。そしたら校長先生が出はって、「わし校長やが、始業式の日、ござい（来てください）」て言わはった。なんかその言葉が田舎の言葉で、緊張感がほぐれてね、よかったわ。

始業式の日、三里（約12km）の道を自転車で、お父さんについてきてもらって。自転車で学校へ行った。講堂で新任挨拶するのを、お父さんが聞いてはったの。山上小学校は、わりあい大きな学校やったね。古い建物やったけど。

私らはみんな、卒業したら先生になると決まっていたのよ。でも、私たちはあんまり勉強してないでね。そやけど、男の人がみんな軍隊行ってはって手が薄かったんで、私らは助教やったけど、女学校出ただけで皆、先生になった時代やった。だから免許持ってなかつても、ちょっと肩身狭い思いはなかつた。1年は助教やったけど、昭和21年(1946年)の3月には、ちゃんと県から『訓導』の免許くれとかはる。その頃は、女学校(卒業した)だけで、全然免許のない人も多かつたの。だからもう、すぐ4年生を受け持って、自分で授業してたわけ。

辞令は4月1日で、春休みがあるで、始業式は8日頃かな。そやから帰ってから10日ほどしかあらへん。工場から帰ってきて、ちゃんと先生してんねんよ。ちゃんとね、教員の副読本みたいなんがあるの、国語・算数とか作文とか修身とかね。それをきばって(頑張って)読んでね、教えるの。それもパンフレットみたいな、薄い薄い雑誌みたいなんでね。



辞令「永源寺山上国民学校助教ヲ命ス」

【体験談—大阪からの疎開児童の寮母をしていました。】

玉八 初子さん(日野町)

玉八初子さんは、役場の依頼で疎開児童の寮母をすることになりました。寮母は、日野町から2名、大阪から来た方が1名いました。昭和19年(1944年)9月から、大阪市の南大江国民学校5年生の男子疎開児童の寮母を務めました。

日野町の役場から、疎開児童を受け入れるようになったさかいに、寮母として入ってくれ言うて来てくれましたのやわ。その当時、私とこは母と2人でしたなあ。遠い所へやられるとどうもならんと思うて八日市の鑄物工場へ勤めてましたところへ役場から来てくれましたんでなあ。疎開児童の寮母として入らしていただきましたようなことですよのやわ。

やっぱり病気になる子やケガする子もあるやろうで、救急の手当のことやら看護婦の勉強やら彦根へ1ヶ月位講習に通いましたんですよのやわ。

子どもの衛生係として入らしていただきまして、まあ、みんな元気な子どもさんでしたけれども風邪ひいたり、頭痛いやら、お薬で治る者はお薬飲んだり、また、前が古川医院さんでしたので、お医者さんへ連れてったり、長くかかる人は遠いところのお医者さんへ連れて行ったり、そんなことしてましたわ。

月に1回は駆虫剤飲ましたり、キズの手当は毎日です。その手当している間に、「ぼくの家はこうやねんで」とか、もうほの間いっぱい自分の家の話をしてくれはりますね。一人だけかまうことも出来ませんしね。並んで来やはったら一人ずつですな。一人ずつ聞いてあげられましたわ。ほんでにもう痛いところなかつたら、今度は耳ほじってくれ言うて。一番苦勞やったのはシラミでないやろうか。



寮母さんと疎開児童たち

【体験談一とにかく勉強よりも、とにかく食べることに】

杉本 智恵子さん (甲賀市)

杉本智恵子さんは水口高等女学校卒業後、京都の専門学校を卒業しました。結婚までの約3年間、伴谷国民学校で教員として勤めていました。



卒業後は学校の教員として勤める
伴谷国民学校 校舎前 (昭和16年~18年頃)

結婚前や。専門学校上がって国民学校の教員の免許があるさかいに。学校は(家の)近いところではなかってんやわ。自転車で山の中をずっと通ってよ。家から通うのに、ちょうど40分か半時間で帰れるな。山の中をこう行って、あっこは寒い寒い、怖い怖いところやな。あっこをダーッと(自転車を)漕いで、ずっと行ったら明るいところがあって、伴中通って下山通って伴谷小学校でした。

伴谷小学校に勤めた時に、ピアノを習うたんやわ。子どもらは、それに合わせて講堂に入ってきはんのや。行進曲や。その時、校長が弾いていたけど、弾

く人なかってんやな。ほんで私も稽古させてもらうてよ。私は歌が好きで、すぐピアノを覚えられましたわ。好きなことや楽しいことは残んでな。グランドピアノやってよ。ミ、ド、ミ、ド、行進曲です。ミドミドミソソ、ファレレ、ミレド。ミレドドレミ。おんなじ曲を弾いてたの。

(国民学校では) なんでも教えなしようがない。3年生か4年生を教えた。なんでも。裁縫も教えなならんしな。何もかもの先生やわ。この専門の先生やないさかいにな。

戦争の最中でな。食べることに必死や。最後は人間食べることにちゅうことな。食べることに精いっぱいの生活をしてきたちゅうことや。運動場では全部芋作る。食べられへんでよ。

当時は、子どもも働かな。あの時分は一致団結。あの時代、心ひとつになったでな。とにかく食糧のために子どもらも気張り(がんばり)ましたな。昔の子、よう気張りやったな。それも仕事の一部やねんやわ。するもんがなかったさかいにないけど、みな子どもら、よう気張りやった。とにかく勉強よりも、とにかく食べることに。勉強別でもいい、とにかく食べることに、元気にいることやなど。最後に残ることはサツマイモ。食べな動けないな。豆は手間がかかる、1年に一遍しかとれない。サツマイモは植えといたら採れますで、どんな土でも。運動場の土でも。



伴谷国民学校の教員ら

【体験談—女学校まで出してもろうたのにね、行かな罰が当たる】

善野 令子さん（守山市）

昭和18年（1943年）に県が派遣した中支嵐部隊慰問団の一員として選ばれ、2ヶ月に渡り中国各地の慰問に廻りました。慰問団は、知事のメッセージを伝えるのが目的でしたが、当時流行していた「暁に祈る」や「愛国の花」、「婦人従軍歌」などを歌ったり踊ったりして、郷土の将兵を慰めました。

私は県立大津高等女学校を卒業して、お花生けたり、お茶を習ったりしてたんです。家では、兄がボーイスカウト、私がガールスカウトしてたんです。兄は寺継がんならんでね。

私の実家がお寺で、日曜学校してました。その時、子どもらと一緒に、家に菊やら作ってますやろ。その花を新聞紙に包んでね、自転車に括ってね、野洲から大津の陸軍病院まで、兵隊さん慰問に行っていました。

父に「令子、お前な、兄ちゃんが戦争行ってらるにやさかい、お前も行くか。」と聞かれ、私も「会えるかも分からんさかい、戦地へ行きたい。」言うてね。私、一番尻子（末っ子）でしたさかいね。父も母も70歳を超えていました。「お前が行ってる間に、お母ちゃん死んでもだんないけ（構わないか）。それでも行くけ？」（と母が）言うて。父がね、「行ってこい。ちゃんと、神さん仏さんが守ってくれはる。よこしまな心を思うやない。お国のことだけを思て行ってこい。」て父が言うたからな、「はい。お父さんやらして下さい。行って参ります。」言うてね、仏さんの前でね。兵隊さんはね、ピンクの赤紙が1枚来てね、「はい、召集令状。」嫌もくそも、みな行かまりましたやろ。

同級生の優秀な子らが早稲田大学やら、東京やら行ってらるんです。ほの人らが学徒動員で皆行ってらる。それに私が女学校まで出してもろうたのにね、行かな罰が当たる。どんなことがあっても行こう。怖いのと行こうという心とで、ずーっと迷いもって行って。

知事さんのメッセージを交替で読むんです。「私たちは、滋賀県代表で皇軍兵士の皆様を（中略）滋賀県から寄せて参りました。ただいまから並川知事様

の言葉をお伝え申し上げます。皆様の御武運長久を滋賀県民一同、心よりお祈り申し上げます。」そういうようなことです。

団員は、みんな18歳から23歳まででしたわ。3月頃から何遍も県へ寄って（集まって）ね、顔なじみになるようにしてね。何しよう言うて。「私音楽な」、「私踊るわ。」言うて、お互いに。歌やら何か、せなて。私が踊りを知ってましたから私「愛国の花」やら、みんなに教えてね。ほして、それを踊りました。



戦地の兵士の前に並ぶ滋賀県女子青年団中支嵐部隊慰問団（昭和18年）



兵士とともに江州音頭を踊る

【父が、看護婦になって国のために尽くせ言うてね。】

山田 富久さん（東近江市）

山田富久さんは、昭和19年（1944年）に日本赤十字社の看護学校を卒業後、6月にジャワ島へ派遣され、終戦まで陸軍病院で看護活動に努められました。

私はね、5人兄弟ですにやわ。私は女学校はぶかれて、高等科出ましたね。私は学校の先生になりたかったでね、師範（学校）を受けるんです。家の父が「いやそら先生もいいけど、看護婦になってお国

の為に尽くすほうがええ」って言うてね。師範と両方受けて、両方とも一応受かったんですね。受かったんですけど、「先生になりたいわ」言うたら、いや、看護婦さんになって国の為に尽くせ言うてね。ほんで、結局日赤（日本赤十字社）の（看護学校の）方に進みました。

日赤に入ったのは、昭和17年（1942年）ですわ。あの頃、（修業年限が）3年から2年になって昭和19年（1944年）3月に卒業して、その年の6月に召集されました。大津の県庁前に滋賀支部があるんです、日赤のね。そこでね、皆が合同で撮った写真もあるんですけどね。

まるまるふた月かかって航行して、ジャワ島に到着。スラバヤの南方第7陸軍病院に着いたのです。第7陸軍病院の分院がマランにあって、その内科病棟と伝染病棟で勤務しました。

ほて、昭和20年（1945年）8月15日が終戦ですわね。その時、インドネシアの従業員の男の子がね、日本語が片覚えでね、「ニッポン マケタゾ ニッポン マケタゾ」いうてね、私らにね。ほしたら、もう負けたんやから、その病院もね、やっぱり追い出されるわけですわね。ほして、行ったところで、「ここを出てくれ」や、「ここは住民の家や」言うて追い出された。ほてまた、患者連れて出んならんでしょ。置いとけへんでね。そやから、3箇所ぐらい回ってて。

（連合国軍の）オランダ人やとかアメリカ人が入ってきたらね、負けたんやから、特に女は何をされるやわからん言うてね。あれは部隊長やったかなー、みんな短刀をね、全部配らはったのです、女に。こんな切れるんやろうか？ 短刀を皆磨いでね。ほれで、もしもオランダ人やらアメリカ人が入って来たらもう、（自分の）腹を切るか、首に刺すか言うてね。女がこんな切腹できるやろうか。軍医殿に撃ってもらおうかって言うて、うまいこと当たって死ねたらいいけど、ほのままで寝込んだら、えらいこっちゃ言うて。そやけど、どうもなかって、まあ良かったんやけどね。



戦地へ出発する前の看護婦（大津市）



兵士とともに看護要員として従軍した女性が持参した水筒

さいごに

【体験談—いくら軍需工場やゆうても人命を軽視した扱いやった】

平塚 廣さん（長浜市）

平塚廣さんは、徴用を経て昭和18年（1943年）に出征、中国へ派遣されました。湖南省宝慶で終戦を迎えたのち、昭和21年（1946年）に帰郷しました。その時に、木之本高等女学校に進学した妹・八重子さんの死を知りました。

昭和18年（1943年）の12月10日の出征の時に、私の2番目の妹の八重子が、弟を背負って宮さん（神社）まで送ってくれたんです。覚えてますねや。

ところが、帰ったら妹がおらんねや。どうしたて聞いたら、死んだて言いますねや。妹は、学徒動員で8月6日に腸チフスで死んでますねや。長浜での学徒動員の日記を読むと、戦争一途で。もう、勉強相場やない。軍事工場へ徴用されて。ほんで、寮に入って仕事しとったんですけど。これほんで、検閲受けたんでしょな。死ぬまで仕事やとったんでしょね。

私もあとから、親父に聞いたんですけど、その時の医者なんかの対応が、むちゃくちゃやったんですな。これ、看病らしい看病、薬らしい薬も出しとらへんのですな。ろくな対応もせんと、ほんまに苦しかったやろと思います。病気になってからの工場の処遇があまりにも冷淡やで、人間的な扱いやなかったゆうことを言うてましたわ。ほんで、親父はそれを聞いて、残念がってね。親としては耐えられんとゆうことで、ほんとに命の尊厳さを知らん。いくら軍需工場やゆうても、人命を軽視した扱いやったと親父は残念がって。

当時、木之本女学校がね、学校葬をしてくれはったんですが親父は行きよらんなんです。あまりにもひどいと。娘がこれでは犬死にやと。なんとか生き証人を捜して、あんばい往生するような証言をしてもらおうよう考えるゆうことで、親父は日夜奔走してね。ほしたら、当時の校長やらの生き証人がおられましてね。戦争当時は、なんぼ苦しいても、国のためや言うて、死んでいきよったんです。

【体験談—何一つ勉強らしいものをしてないまま、学校を卒業してしまいました。】

Fさん（東近江市）

Fさんは、淡海女学校3年生の時に近江絹糸という会社で、飛行機の部品に穴を開け、鉋を打っていく作業をしていました。

昭和19年（1944年）、私が女学校3年生のとき、近江絹糸へ学徒動員に出かけることになりました。始めのうちは、工場内の寮に入りました。工場には沖縄から働きに来ている女性も沢山ありました。夜中に何度も空襲警報が出されました。その度に、眠いのを我慢して、湖岸の松原まで避難しました。

私たちの仕事は、飛行機の昇降舵（という部品）に穴を開け、鉋を打っていくことでした。鉋がガタガタ揺れたりすると、見回りの人が「やり直し」と注意していきました。工場全体が唸っているの、いつでも耳が「うわーん」と鳴っている感じがしました。

先生も一緒に工場に来ていましたが、授業は全くありませんでした。白い布の帽子を被って作業をしていましたが、髪の毛に毛ジラミがわいて困りました。

淡海女学校からは、1クラス50人ほどが動員で出ていましたが、彦根女子商業学校からも動員に来ていました。

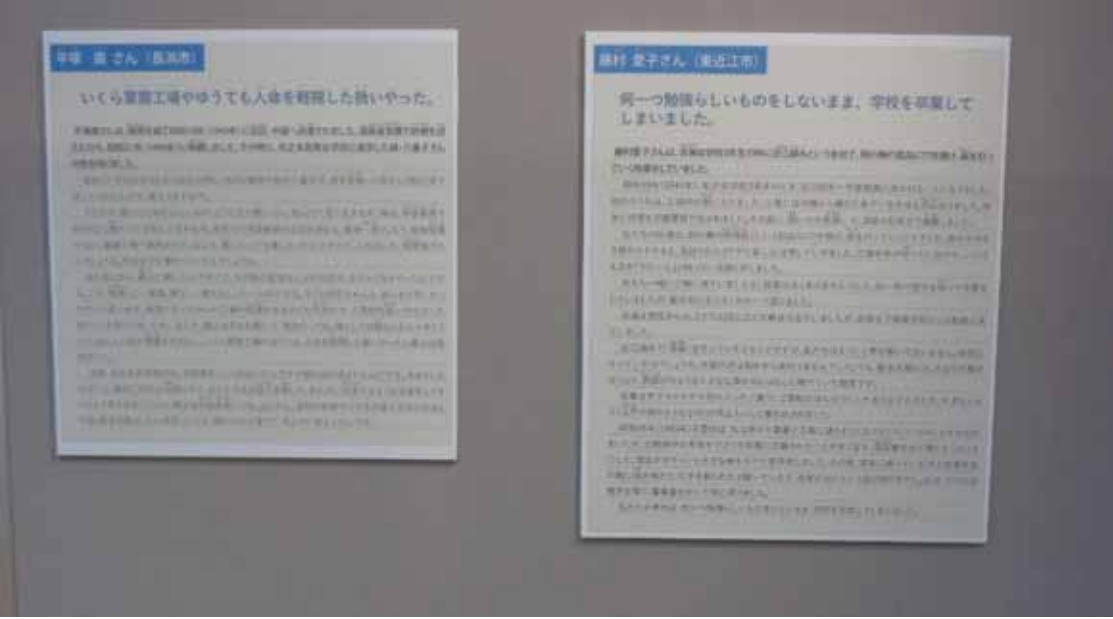
近江絹糸で「零戦」を作っていたとのことですが、私たちはそういう事を聞いてはいません。秘密になっていたのでしょうか。作業内容は始めから変わっていませんでした。でも、戦争末期には、あまり仕事なくなり、鉋選びのような小さな仕事を何とはなしに続けていた程度です。

食事はサツマイモや大豆の入ったご飯で、ご飯粒はほんの少ししかありませんでした。大きなムカゴ（山芋の実のようなもの）が沢山入ったご飯も出されました。

昭和20年（1945年）の夏頃は、私は家から電車で工場に通うようになりました。いつのことかは忘れましたが、出勤途中の電車がアメリカ軍機に空襲されたことがあります。高宮駅を出て間もなくのことでした。電車がガチャンと大きな音を立てて急停

車しました。その時、電車に乗っていた井上校長先生の腕に弾が当たり、片手を取られたと聞いています。死者が出たという話は知りません。私は、その日は電車を降り、電車道を歩いて家に帰りました。

私たちの年代は、何一つ勉強らしいものをしていないまま、学校を卒業してしまいました。



第32回企画展示「戦争と女学生—戦時下の学校生活と進路—」展示資料一覧表

展示資料番号	資料名	点数	資料説明	提供者名
第1章 女子教育の拡充と学校生活				
1	パンフレット「春の服飾雑貨展示会 菊日本学生服即売会」	1	販売元 株式会社田村駒商店	個人提供
2	パンフレット「国策に順応して非常時に輝く菊日本印(ス・フ製品)学生服即売開始に就いて」	1	昭和13年1月 株式会社田村駒商店	個人提供
3	水彩画 セーラー服姿の女学生	1	旧制彦根高等女学校の生徒の画集から	個人提供
4	教科書『新制 女子東洋史』(高等女学校用、昭和14年9月1日訂正発行)	1	旧制彦根高等女学校の生徒が使っていた教科書	個人提供
5	教科書『新選 歴史精図 国史之部』(昭和13年3月19日訂正発行)	1	旧制彦根高等女学校の生徒が使っていた教科書	個人提供
6	ノート 地理	1	旧制彦根高等女学校の生徒が使用したもの	個人提供
7	ノート 心理学	1	旧制彦根高等女学校の生徒が使用したもの	個人提供
8	ノート 物理	1	旧制彦根高等女学校の生徒が使用したもの	個人提供
9	絵葉書 滋賀県女子師範学校・滋賀県立大津高等女学校	1	明治41年～昭和6年の間、両校は同じ敷地内にあった	田村芳江さん
10	手帳「生徒心得」(滋賀県立八日市中学校)	1	禁戒の項目に「女学校に於けるバザー・運動会・展覧会・音楽会などに赴くこと」をあげている	川越孝一さん
11	袴の型紙	1	高等女学校で使用されていた	田中和之さん
12	『裁縫仕立上帳』(彦根高等女学校)	1	高等女学校で使用されていた	個人提供
13	教科書『裁縫』	4	旧制彦根高等女学校の生徒が使用したもの	田中和之さん
14	学資計算簿(久保田春枝氏)	1	昭和10年	田中和之さん
15	滋賀県立彦根高等女学校 第45回卒業式 式次第	1	昭和15年3月20日に挙行。	田中和之さん
16	卒業アルバム	1	昭和15年度卒業 滋賀県立彦根高等女学校	田中和之さん
17	彦根高等女学校修学旅行の記録	1	彦根高等女学校の修学旅行記	田中和之さん
18	デッサン画 彫刻	1		個人提供
19	デザイン画 椅子	1		個人提供
20	水彩画 やかん	1	旧制彦根高等女学校の生徒の作品	田中和之さん
21	水彩画 皿と食パン	1	旧制彦根高等女学校の生徒の作品	田中和之さん
22	図案	1	旧制彦根高等女学校の生徒の作品	田中和之さん
23	デッサン画 立体物	1		個人提供
24	デッサン バケツ	1	旧制彦根高等女学校の生徒の作品	田中和之さん
25	水彩画 本とインク瓶	1	旧制彦根高等女学校の生徒の作品	田中和之さん
26	水彩画 花と花瓶	1	旧制彦根高等女学校の生徒の作品	個人提供
27	水彩画 セーラー服姿の女学生	1	旧制彦根高等女学校の生徒の作品	個人提供
28	画集	1	旧制彦根高等女学校の生徒の作品	個人提供
29	『中等教育 家事新教科書』上巻(昭和12年1月23日訂正4版発行)	1	高等女学校の授業には、家庭で必要とされる科目の履修が必要だった	田中和之さん
30	『家庭良導』上巻(昭和17年2月25日発行)	1	高等女学校の授業には、家庭で必要とされる科目の履修が必要だった	田中和之さん
31	メモ帳	1	家事に必要な事柄を記録したもの	個人提供
コラム 戦時中の女性の服装				
32	防寒コート	1	友人が縫ったコート。布地は戦時中独特のゴツゴツしたものだった	個人提供
33	着物	1	よい着物はお米に替え、残った着物を補修して着たという	個人提供
34	手作りの上着	1	後身ごろは粗悪なホームスパンを使用。空襲の合間を縫ってつくった	個人提供
35	もんぺ	1		個人提供
36	防空用もんぺ型紙(実物大)	1	廃物利用、銃後の御奉公	個人提供
第2章 戦争による学校生活の変化				
37	西浦治一郎さんから杉本智恵子さんへの手紙(昭和12年頃)	1	中国の戦地の兵士から女学生宛ての手紙	杉本智恵子さん
38	西浦治一郎さんから杉本智恵子さんへの手紙(昭和12年頃)	1	中国の戦地の兵士から女学生宛ての手紙	杉本智恵子さん
39	杉本智恵子さんから西浦治一郎さんへの手紙(昭和15年頃)	1	女学生から航空兵に送った最後の手紙	杉本智恵子さん
40	『出征兵士に送る 女子慰問手紙文』	1		個人提供
41	教科書『音楽1』(中等学校女子用、昭和19年1月25日発行)	1	戦時中の教科書には、「ドレミ」ではなく「ハニホヘト」と書かれている	個人提供
42	画集より(戦時ポスター、標語作品)	1	女学生が描いた戦時中のポスター、標語作品	個人提供
43	知人の女学生から海軍航空兵宛ての葉書(昭和19年7月12日付)	1	大津高等女学校の校舎が工場になった様子を書き綴る	碓本綾子さん
44	知人の女学生から海軍航空兵宛ての葉書(昭和19年7月17日付)	1	大津高等女学校の校舎が工場になった様子を書き綴る	碓本綾子さん
コラム 高等女学校における校友会誌				
45	彦根高等女学校「校友会誌」第十七号～第二十一号	4	彦根高等女学校から生徒や卒業生に配布されたもの。	田中和之さん
46	彦根高等女学校作文集「花がたみ」第34号～第41号、第43号～第45号、第50号記念号～第53号送別号	14	彦根高等女学校発行の生徒作文集。昭和10年～15年まで。	田中和之さん
47	彦根高等女学校『芹汀』復刊第一号～復刊第三号、第20号、第21号	1	戦後発行され、卒業生等に配布されたもの。	田中和之さん
48	綴り(彦根高等女学校「校友会誌」、「芹汀」(昭和15年頃))	1	在学中の昭和10年～15年頃までの学校からの配布物を綴ったもの	田中和之さん
第3章 勉強よりも増産—滋賀県女子学徒勤労報国隊を中心に—				
1) 滋賀県女子学徒勤労報国隊				
49	「決意之辞」	1	日野高等女学校の生徒が、名古屋の工場へ動員されるときに書き綴った決意文	岡田光子さん
50	「はちまき」神風	1	大津高等女学校5年生が勤労動員時に締めたはちまき。	土井節子さん
51	日誌／想い出日誌	4	日野高等女学校生徒が学徒動員中に書き綴った日誌。	中島美佐子さん
52	勤労動員中に作った短歌	1	日野高等女学校生徒が学徒動員中につくった短歌。	岡田光子さん

5) 県内に残った女学生			
53	機銃弾の破片	1 昭和20年5月14日に彦根市内を襲った機銃弾。弾が花びら型に開いている。	高居豊三さん
第4章 卒業—それぞれの道へ—			
54	辞令「右当銀行雇ヲ命ズ」(昭和15年3月25日付)	1 彦根高等女学校を卒業し、滋賀銀行へ就職した方の辞令。	田中和之さん
55	中支嵐部隊を訪れた時の日記	1 県の慰問団として訪れた戦地の様子を書き綴った。	善野令子さん
56	従軍手帖	1 県の慰問団として訪れた戦地の様子を書き綴った。	善野令子さん
57	昭和十八年滋賀県女子青年団中支嵐部隊慰問行	1 戦後、県の慰問団として訪れた戦地の様子をまとめた冊子。	善野令子さん
58	寄せ書き	1 戦時中は、高等女学校卒業したのち看護婦を目指すため方もいた。寄せ書きは戦地へ行く直前に友人とともに寄せた	奥村モト子さん
59	為書き	1 昭和12年から14年の間、救護看護婦として戦地中国へ渡った。出発前に送られた為書き	田中直美さん
60	大津日赤病院前で撮影(昭和19年7月1日)	1 父の勧めで看護の道に進む。赤襟をかけて故郷を出発した。	山田富久さん
61	水筒	1 女でも手に職をつけるために看護の道を進む。戦地では救護活動に務めた	川口治郎さん
62	履歴書(川口愛さん直筆)	1 女でも手に職をつけるために看護の道を進む。戦地では救護活動に務めた	川口治郎さん
63	救護業務の賞金贈与状	1 女でも手に職をつけるために看護の道を進む。戦地では救護活動に務めた	川口治郎さん
64	臨時救護看護生徒の辞令	1 女でも手に職をつけるために看護の道を進む。戦地では救護活動に務めた	川口治郎さん
65	従軍手帳	1 女でも手に職をつけるために看護の道を進む。戦地では救護活動に務めた	川口治郎さん
66	臨時救護看護婦の辞令	1 女でも手に職をつけるために看護の道を進む。戦地では救護活動に務めた	川口治郎さん

第32回企画展示「戦争と女学生—戦時下の学校生活と進路—」写真・図表パネル一覧表

章	節	項	写真・図表タイトル	提供者名	備考
メインタイトル		バナー	校庭に整列する女学生（アルバム『記念』、滋賀県木之本実科高等女学校）	武田一夫さん	昭和13年3月
第1章 女子教育の拡充と学校生活			表・滋賀県内の高等女学校	当館作成	
			絵葉書 日野高等女学校（奉安庫、校庭、校舎）	個人	
			バレー部の仲間と（日野高等女学校）	個人	
			学芸会（日野高等女学校）	個人	
			理科の実験の様子（和装、愛知高等女学校）	県立愛知高等学校	
			図書室（和装、愛知高等女学校）	県立愛知高等学校	
			滋賀県立大津高等女学校平面図（『ながら』より）	中西一雄さん	
			女子師範寮歌	個人	
			東近江市愛東支所の敷地内にあるヘレン・ケラーの銅像	当館撮影	
		バナー	絵葉書 滋賀県女子師範学校・滋賀県立大津高等女学校	田村芳江さん	
		バナー	裁縫の授業（アルバム『記念』、滋賀県木之本実科高等女学校）	武田一夫さん	昭和13年3月
			彦根高等女学校卒業アルバムより 奉仕活動、クラブ活動	田中和之さん	昭和15年3月
			学科課程および教授時間数（彦根高等女学校 学校手帳より）		
			久保田春江さんが絵の展覧会で金賞をもらった際の賞状	田中和之さん	
第2章 戦争による学校生活の変化			染色または美術の授業（アルバム『記念』、滋賀県木之本実科高等女学校）	武田一夫さん	昭和13年3月
			裁縫の授業（アルバム『記念』、滋賀県木之本実科高等女学校）	武田一夫さん	昭和13年3月
			調理実習（アルバム『記念』、滋賀県木之本実科高等女学校）	武田一夫さん	昭和13年3月
			校庭に整列する女学生（アルバム『記念』、滋賀県木之本実科高等女学校）	武田一夫さん	昭和13年3月
		バナー	水口高等女学校勤労奉仕の記念写真	上村清子さん	
			父・杉本太朗さんの出征	杉本智恵子さん	昭和12年頃
			水口高等女学校新築落成記念絵葉書	上村清子さん	
			愛知高等女学校 校舎	県立愛知高等学校	
第3章 勉強よりも増産—滋賀県女子学徒勤労報国隊を中心に—			稲刈り奉仕（日野高等女学校） 3点	個人	
			舞鶴海兵団での海洋訓練（愛知高等女学校3年生）	小澤富美子さん	昭和18年頃
			水口高等女学校卒業式	上村清子さん	
			表・県内の高等女学校内にあった工場（学校工場）	当館作成	
		バナー	女子勤労報国隊	八日市まちかど情報館	
			滋賀県女子学徒勤労報国隊として	小澤富美子さん	昭和19年7月6日
			滋賀新聞記事「女子学徒勤労報隊 愈よ総進軍」	当館収集	昭和19年7月22日付
			「学徒勤労報国隊」の腕章をつけて		
			岡本工業 甲西寮（日野高等女学校専攻科）	個人	
			日野高等女学校専攻科卒業式	個人	
			近江高等女学校入学当時の厩丘美代さんたち	厩丘美代さん	昭和19年6月4日撮影
第4章 卒業—それぞれの道へ—			厩丘美代さんが在学した頃の近江高等女学校	厩丘美代さん	
			水口高等女学校5年生頃の上村清子さん	上村清子さん	
			敷島帆布入社式での集合写真	森田恵美子さん	
			戦災概況図（彦根市）	国立国会図書館所蔵	
			岡崎製織場の場歌と応援歌	個人	
		バナー	伴谷国民学校・青年学校の教職員	杉本智恵子さん	
		バナー	兵士の前に並ぶ滋賀県女子青年団中支嵐部隊慰問団	個人	昭和18年頃
		バナー	疎開児童と寮母	玉八初子さん	昭和19年～20年頃
		バナー	日本赤十字社滋賀支部前にて	山田富久さん	
			辞令「滋賀県神崎郡永源寺山上国民学校助教ヲ命ズ」	個人	昭和20年3月31日
			辞令「滋賀県国民学校訓導ニ任ス」	個人	昭和21年3月31日付
			寮母の玉八初子さんと疎開児童たち	玉八初子さん	
		伴谷国民学校の教員とともに	杉本智恵子さん	昭和16年～18年頃	
		伴谷国民学校・伴谷青年学校の看板を前に	杉本智恵子さん		
		踊る慰問団員と兵士（江州音頭か）	善野令子さん		
		皇軍慰問演劇班の腕章をつけて	善野令子さん		
		寄せ書き日の丸を手に	山田富久さん		
		日本赤十字社の制服姿の川口愛さん	川口治郎さん		

令和4年度 滋賀県平和祈念館企画展示実施報告書

編集・発行：滋賀県平和祈念館

〒527-0157 東近江市下中野町 431 番地

TEL:0749-46-0300 / FAX:0749-46-0350

E-mail : heiwa@pref.shiga.lg.jp

印刷：株式会社モリワキ印刷

令和6年（2024年）3月31日